

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習 I A	
開 講 期	春学期	単 位 演 2
担 当 者	専任教授 藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

修論を書くための問題設定、方法論等の問題点を検討し、練り上げていくための指導をするとともに、各学生の研究の方向、関心を考慮しながら、マンガを中心としたポップカルチャーについての基礎文献を読んでいきます。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：オリエンテーション講義 (1)
 第3回：オリエンテーション講義 (2)
 第4回：修論の問題設定と方法論の検討 (1)
 第5回：修論の問題設定と方法論の検討 (2)
 第6回：修論の問題設定と方法論の検討 (3)
 第7回：基礎文献講読 (1)
 第8回：基礎文献講読 (2)
 第9回：基礎文献講読 (3)
 第10回：基礎文献講読 (4)
 第11回：学生による研究発表 先行研究調査 (1)
 第12回：学生による研究発表 先行研究調査 (2)
 第13回：学生による研究発表 先行研究調査 (3)
 第14回：まとめ討議

履修上の注意

迷走せずに修論を仕上げていくための力を付けるためには、まず、自分の問題設定や方法論を見直し、甘いところを正し、鍛え上げていくことが必要です。最初に、論文とは何か、何が必要とされるのかをしっかりと押さえ、自分の問題意識の核心、それを明らかにする方法論を絞り込んでいきます。

そのためにはまず先行研究にあたること。事前に、自分の問題設定と、それを明らかにするための方法論を、自分なりに絞り込んできてください。また、言うまでもないことですが、『論文の書き方』本はたくさん出ていますから、基礎を押さえること。自分が問題とする分野の「先行研究リスト」を作るところから始めましょう。

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に、自分の問題設定と、それを明らかにするための方法論を、自分なりに絞り込んできてください。

また、『論文の書き方』本はたくさん出ていますから、最低でも1冊は熟読し、自分の研究計画を再検討してみてください。

教科書

指導する学生の研究テーマに応じて、その都度指定します。

参考書

指導する学生の研究テーマに応じて、その都度指定します。

成績評価の方法

問題設定の的確さ、先行研究の選択のしかた、読み込みの的確さ、他の学生とのディスカッション、意見交換の適切さ、によって判断されます。自分の研究実績と発表70%、他学生の研究への貢献度30%。

その他

あとで迷わなくてすむよう、最初に的確な羅針盤を自分の中に持ちましょう。

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習 I B	
開 講 期	秋学期	単 位 演 2
担 当 者	専任教授 藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

前学期で基本的な方向を固めた上で、調査を進めつつ、より進んだ先行研究を読み込んでいくとともに、必要な基礎文献を購読しつつ、自分の選んだ問題設定を明らかにするための基礎的な力をつけていきます。

この学期が終わる頃には、修論完成までのスケジュールと自分の中の地図が明確に出来上がっていることを目指します。

授業内容

- 第1回：休み中の研究報告とスケジュールリング
 第2回：修論の現状報告と問題点の検討 (1)
 第3回：修論の現状報告と問題点の検討 (2)
 第4回：修論の現状報告と問題点の検討 (3)
 第5回：修論の現状報告と問題点の検討 (4)
 第6回：基礎文献講読 (1)
 第7回：基礎文献講読 (2)
 第8回：基礎文献講読 (3)
 第9回：基礎文献講読 (4)
 第10回：学生による研究発表 課題報告 (1)
 第11回：学生による研究発表 課題報告 (2)
 第12回：学生による研究発表 課題報告 (3)
 第13回：学生による研究発表 課題報告 (4)
 第14回：残った問題の検討・まとめ

履修上の注意

今学期は、今の時点での研究の現状を報告してもらい、見えてきた問題点について検討します。その上で、各人についてそれぞれ、研究して明らかにすべき課題を明らかにし、後半では、それぞれの課題について報告してもらいます。

ここまでで、それぞれの研究の全体像とそこに至る道のりが具体的に見えてくるはずです。

準備学習（予習・復習等）の内容

自分が研究しようとしているテーマと方法、現在迷っている点、研究を進めていく上でここが難所だと予測される点を、きちんと他人に伝えられるようにしてください。研究の見通しと乗り越えるべき問題を明確にすること。

教科書

学生の研究テーマと進捗状況に応じて、適宜指定します。

参考書

学生の研究テーマと進捗状況に応じて、適宜指定します。

成績評価の方法

各人の発表の内容、課題への取り組み70%、討議への参加の積極性、他学生の研究への貢献度30%を基本として総合的に評価する。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

ポップカルチャー研究		備考	
科目名	ポップカルチャー演習 I C		
開講期	春学期	単位	演 2
担当者	専任教授 藤本 由香里		

授業の概要・到達目標

今学期は、各人の研究をより進めるとともに、狭い範囲でない、より総合的な問題まで視野を広げ、研究の視点を深くする訓練をしていきます。研究に取り組む基礎体力を十分なところまで高めます。

授業内容

第1回：休み中の研究報告とスケジュールリング
第2回：修論の現状報告とさらなる課題の検討 (1)
第3回：修論の現状報告とさらなる課題の検討 (2)
第4回：修論の現状報告とさらなる課題の検討 (3)
第5回：修論の現状報告とさらなる課題の検討 (4)
第6回：高度基礎文献講読 (1)
第7回：高度基礎文献講読 (2)
第8回：高度基礎文献講読 (3)
第9回：高度基礎文献講読 (4)
第10回：学生による研究発表：別視点の気づき (1)
第11回：学生による研究発表：別視点の気づき (2)
第12回：学生による研究発表：別視点の気づき (3)
第13回：学生による研究発表：別視点の気づき (4)
第14回：残った問題の検討・まとめ

履修上の注意

博士前期課程も2年目に入り、自分の研究の基盤を固めるとともに、より視野の広さを持った文献の講読が必須になります。研究をより進めるためのヒントは、直接関係のありそうな分野だけでなく、隣接領域や、思いがけないところに埋まっています。可能な限りアンテナを立てておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

もう一度、自分の研究を少し離れたところから見直し、研究の具体的な方法や目的だけでなく、自分の研究をより広い問題意識の中に位置づけなおし、研究の意義を問い直すことを意識的にやってみてください。

教科書

学生の研究の方向や進捗状況によって、その都度指定します。

参考書

学生の研究の方向や進捗状況によって、その都度指定します。

成績評価の方法

各人の発表の内容、課題への取り組み80%、討議への参加の積極性、他学生の研究への貢献度20%を基本として総合的に評価する。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究		備考	
科目名	ポップカルチャー演習 I D		
開講期	秋学期	単位	演 2
担当者	専任教授 藤本 由香里		

授業の概要・到達目標

いよいよ修論をまとめる時期に入ってきます。固まってきた研究を確実にし、よりブラッシュアップしていくとともに、残った問題点をクリアにしていきます。また、研究の成果を他人に確実に伝えるために、論文の記述方法、プレゼンテーションの方法についても改善できるところは最大限改善していきます。

授業内容

第1回：休み中の研究報告とスケジュールリング
第2回：学生による現時点での修論発表 (1)
第3回：学生による現時点での修論発表 (2)
第4回：学生による現時点での修論発表 (3)
第5回：学生による現時点での修論発表 (4)
第6回：修論の課題のクリア (1)
第7回：修論の課題のクリア (2)
第8回：修論の課題のクリア (3)
第9回：修論の課題のクリア (4)
第10回：修論発表のブラッシュアップ (1)
第11回：修論発表のブラッシュアップ (2)
第12回：修論発表のブラッシュアップ (3)
第13回：修論発表のブラッシュアップ (4)
第14回：残った問題の検討・まとめ討議

履修上の注意

最後に気を抜かないように、全力でラストスパートを。

準備学習（予習・復習等）の内容

研究そのものも大事ですが、確実に伝わるような見せ方も大事です。授業時間外でも、発表を誰かに聞いてもらったり、論文を読んでわかりにくい表現を指摘してもらったりしましょう。とくに留学生は必ずネイティブにチェック・訂正してもらって、日本語のブラッシュアップをしておくこと。

教科書

特に指定しません。

参考書

特に指定しません。

成績評価の方法

各人の発表の内容、課題への取り組み80%、討議への参加の積極性、他学生の研究への貢献度20%を基本として総合的に評価する。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習ⅡA	
開 講 期	春学期	単 位 演 2
担 当 者	専任准教授 森川 嘉一郎	

授業の概要・到達目標

ポップカルチャー演習ⅡA～Dでは、マンガ・アニメ・ゲームなどの現代文化、キャラクター商品、現代美術やデザイン、そして現代都市に関するさまざまな現象を扱う。とりわけ「おたく文化」やその秋葉原への集中に見受けられるような、特定のスタイルやテイスト、コミュニティや場の形成を追う研究に、アクセントを置く。また、英語による発表や論文も可とする。

演習ⅡAでは、基礎的な文献の精読や既往研究を洗い出しつつ、発表とディスカッションを繰り返しながら、各々の関心に沿った研究テーマの設定を進める。古典的文献としてマクルーハンの『メディア論』を精読しつつ、マンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。

授業内容

- 第1回：マンガ・アニメ・ゲーム・デザイン・現代都市の諸相と研究テーマ
 第2回：研究テーマの企画立案と調査法
 第3回：文献と既往研究の探索
 第4回：経過報告と討論
 第5回：作品紹介と鑑賞
 第6回：経過報告と討論
 第7回：『メディア論』精読1
 第8回：経過報告と討論
 第9回：作品紹介と鑑賞
 第10回：経過報告と討論
 第11回：『メディア論』精読2
 第12回：経過報告と討論
 第13回：作品紹介と鑑賞
 第14回：最終発表・討論

履修上の注意

期末には各自で一学期分の成果を一冊の小冊子にまとめて提出する。このため、印刷・製本に二千円程度の出費を見込むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。研究のテーマや方法が定まるまでは、複数のテーマを併行して進める。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

成績評価の方法

討論と発表を含む実習過程と、成果物の双方により総合的に評価を行う。研究の内容はもとより、その意義や成果を伝えるための工夫も重視する。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習ⅡB	
開 講 期	秋学期	単 位 演 2
担 当 者	専任准教授 森川 嘉一郎	

授業の概要・到達目標

演習ⅡAが文献調査に力点を置いたのに対し、演習ⅡBでは、各々の研究テーマにより、フィールドワークやインタビューなどの取材調査を行う。年度末にはそれらの成果を製本された状態にまとめる。就職を希望する業種によっては、就職活動のポートフォリオの一部となるように作成してもよい。また適宜、受講者の関心や傾向に応じ、展覧会や見本市、街を視察する学外演習を実施する。

古典的論文としてベンヤミンの「複製技術時代の芸術作品」を精読しつつ、引き続きマンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。

授業内容

- 第1回：マンガ・アニメ・ゲーム・デザイン・現代都市の諸相と調査法
 第2回：研究テーマの再構築
 第3回：フィールドワーク/インタビューの設計
 第4回：経過報告と討論
 第5回：作品紹介と鑑賞
 第6回：経過報告と討論
 第7回：「複製技術時代の芸術作品」精読1
 第8回：経過報告と討論
 第9回：中間報告会の準備
 第10回：中間報告会の準備
 第11回：「複製技術時代の芸術作品」精読2
 第12回：レイアウト
 第13回：校正と入校
 第14回：最終発表・討論

履修上の注意

期末には各自で一学期分の成果を一冊の小冊子にまとめて提出する。このため、印刷・製本に二千円程度の出費を見込むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

成績評価の方法

討論と発表を含む実習過程と、成果物の双方により総合的に評価を行う。研究の内容はもとより、その意義や成果を伝えるための工夫も重視する。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

ポップカルチャー研究		備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習ⅡC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任准教授 森川 嘉一郎		

授業の概要・到達目標

ポップカルチャー演習ⅡC・Dでは、演習ⅡA・Bでまとめた成果と経験を下敷きにしなが、研究計画を再構築し、学外場で発表できる水準の修士論文の作成に焦点を合わせる。とりわけマンガ・アニメ・ゲームおよびそれらに近接する文化は、学問や教養の対象として新しいため、テーマ設定や資料の採取、調査法や発表手法の創出に多くの試行錯誤や実験を要する。前衛的な試みを、促したい。

演習ⅡCでは、逐次成果報告を行いながら、一次資料の追加採取を進める。加えて、過去からの経緯の上に対象を位置づけたり、対象の歴史的な成り立ちを明らかにしていく。そして演習ⅡD開始時には修士論文の草稿が完成するように、準備を進める。

古典的文献としてブルデュの『ディスタンクシオン』を精読しつつ、引き続きマンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。

授業内容

- 第1回：マンガ・アニメ・ゲーム・デザイン・現代都市の資料採取
- 第2回：「本」の成り立ちとルール、作り方
- 第3回：経過報告と討論
- 第4回：経過報告と討論
- 第5回：作品紹介と鑑賞
- 第6回：経過報告と討論
- 第7回：『ディスタンクシオン』精読1
- 第8回：経過報告と討論
- 第9回：作品紹介と鑑賞
- 第10回：経過報告と討論
- 第11回：『ディスタンクシオン』精読2
- 第12回：経過報告と討論
- 第13回：作品紹介と鑑賞
- 第14回：最終発表・討論

履修上の注意

期末には各自で一学期分の成果を一冊の小冊子にまとめて提出する。このため、印刷・製本に二千円程度の出費を見込むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

成績評価の方法

討論と発表を含む実習過程と、成果物の双方により総合的に評価を行う。研究の内容はもとより、その意義や成果を伝えるための工夫も重視する。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究		備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習ⅡD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任准教授 森川 嘉一郎		

授業の概要・到達目標

演習ⅡA～Cの成果をもとに、初回までに書き上げた修士論文の草稿の加筆修正や推敲を行う。必要に応じて追加的な取材や調査を行い、年度末に修士論文として仕上げる。また、それぞれのテーマに応じた場で発表する。

古典的論文としてグリーンバークの「アヴァンギャルドとキッシュ」を精読しつつ、引き続きマンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。

授業内容

- 第1回：修士論文の草稿の発表
- 第2回：読書会
- 第3回：論文指導
- 第4回：論文指導
- 第5回：作品紹介と鑑賞
- 第6回：論文指導
- 第7回：「アヴァンギャルドとキッシュ」精読1
- 第8回：論文指導
- 第9回：論文指導
- 第10回：論文指導
- 第11回：「アヴァンギャルドとキッシュ」精読2
- 第12回：発表準備
- 第13回：発表準備
- 第14回：発表の総括

履修上の注意

演習ⅡA～Cの成果をもとに、初回までに修士論文の草稿を書き上げておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

成績評価の方法

討論と発表を含む実習過程と、成果物の双方により総合的に評価を行う。研究の内容はもとより、その意義や成果を伝えるための工夫も重視する。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	ポップカルチャー演習Ⅲ A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任准教授 宮本 大人		

授業の概要・到達目標

漫画、およびアニメーションを考える上で必要な基礎文献の講読を通じて、修士課程において必要な読解力を養うことと、漫画・アニメーションについての研究・評論史の概要を把握することを目指す。具体的には、毎回担当者を決め、当該テキストの詳細なレジュメを作成した上で、内容の要旨を発表する。他の受講者には、発表者の要約を踏まえて、活発に質疑を行うことを求める。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：漫画関連文献の講読と討論 (1)
 第3回：漫画関連文献の講読と討論 (2)
 第4回：漫画関連文献の講読と討論 (3)
 第5回：漫画関連文献の講読と討論 (4)
 第6回：漫画関連文献の講読と討論 (5)
 第7回：漫画関連文献の講読と討論 (6)
 第8回：中間総括討論
 第9回：アニメーション関連文献の講読と討論 (1)
 第10回：アニメーション関連文献の講読と討論 (2)
 第11回：アニメーション関連文献の講読と討論 (3)
 第12回：アニメーション関連文献の講読と討論 (4)
 第13回：アニメーション関連文献の講読と討論 (5)
 第14回：総括討論

履修上の注意

議論への積極的な参加が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回の要約担当者は、当該テキストのみならず、それが参照している重要文献等、そのテキストの背景にも目配りしておくことが求められる。担当者以外の受講者も、必ず事前に当該テキストを読んで論点を押さえてくることが求められる。

教科書

各年度ごとに取り上げる文献はある程度更新される。当該年度に扱う文献についてはイントロダクションの際に、指示する。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

レジュメ作成と発表：60％，討論への貢献度：40％

その他

特になし。

ポップカルチャー研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	ポップカルチャー演習Ⅲ B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任准教授 宮本 大人		

授業の概要・到達目標

漫画、およびアニメーションの研究・評論上の、先端的な議論を重点的に検討することを通じて、最新の研究動向を把握し、その意義と問題点を自分なりに要約できる力を身につけることを目指す。また、これを通じて、修士論文における自らの研究を、この分野の最前線に位置付けられるようになることを目指す。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：漫画論の先端的文献の講読と討論 (1)
 第3回：漫画論の先端的文献の講読と討論 (2)
 第4回：漫画論の先端的文献の講読と討論 (3)
 第5回：漫画論の先端的文献の講読と討論 (4)
 第6回：漫画論の先端的文献の講読と討論 (5)
 第7回：漫画論の先端的文献の講読と討論 (6)
 第8回：中間総括討論
 第9回：アニメーション論の先端的文献の講読と討論 (1)
 第10回：アニメーション論の先端的文献の講読と討論 (2)
 第11回：アニメーション論の先端的文献の講読と討論 (3)
 第12回：アニメーション論の先端的文献の講読と討論 (4)
 第13回：アニメーション論の先端的文献の講読と討論 (5)
 第14回：総括討論

履修上の注意

議論への積極的な参加が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回の要約担当者は、当該テキストのみならず、それが参照している重要文献等、そのテキストの背景にも目配りしておくことが求められる。担当者以外の受講者も、必ず事前に当該テキストを読んで論点を押さえてくることが求められる。

教科書

各年度ごとに取り上げる文献はある程度更新される。当該年度に扱う文献についてはイントロダクションの際に、指示する。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

レジュメ作成と発表：60％，討論への貢献度：40％

その他

特になし。

博士前期課程**主要科目**

ポップカルチャー研究		備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習Ⅲ C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任准教授 宮本 大人		

授業の概要・到達目標

漫画・アニメーションに関する先行研究の批判的検討に基づいて、自らの研究の内容と意義をプレゼンテーションする訓練を行う。具体的には、受講者各自が、まず、自らの関心に即した文献を要約、発表し、これについて受講者全員で討論を行う。その上で、受講者各自が、自らの修士論文のテーマ、内容、手法の概要を発表し、これについて受講者全員で討論する。これを通じて、修士論文における自らの研究を、この分野の最前線に位置付ける力を高めることを目指す。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：文献要約と研究発表（1）
 第3回：文献要約と研究発表（2）
 第4回：文献要約と研究発表（3）
 第5回：文献要約と研究発表（4）
 第6回：文献要約と研究発表（5）
 第7回：文献要約と研究発表（6）
 第8回：文献要約と研究発表（7）
 第9回：文献要約と研究発表（8）
 第10回：文献要約と研究発表（9）
 第11回：文献要約と研究発表（10）
 第12回：文献要約と研究発表（11）
 第13回：文献要約と研究発表（12）
 第14回：文献要約と研究発表（13）

履修上の注意

議論への積極的な参加が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回の担当者は、文献要約のみならず、自らの研究の概要の発表においても、的確なレジュメの作成、図版資料の用意などが求められる。担当者以外の受講者も、必ず事前に当該テキストを読んで論点を押さえてくることが求められる。

教科書

扱うテキストは受講者の関心に応じたものを選ぶ。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

レジュメ作成と発表：60％，討論への貢献度：40％

その他

特になし。

ポップカルチャー研究		備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習Ⅲ D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任准教授 宮本 大人		

授業の概要・到達目標

漫画・アニメーションに関する受講者各自の研究の発表と、それに対する検討を行う。具体的には、受講者各自が、まず、自らの修士論文のための研究の内容について発表し、これについて受講者全員で討論を行う。これを通じて、修士論文の完成に向けて、自らの研究の問題点を把握し、その改善、調整を行えるようにする。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：発表と討論（1）
 第3回：発表と討論（2）
 第4回：発表と討論（3）
 第5回：発表と討論（4）
 第6回：発表と討論（5）
 第7回：発表と討論（6）
 第8回：発表と討論（7）
 第9回：発表と討論（8）
 第10回：発表と討論（9）
 第11回：発表と討論（10）
 第12回：発表と討論（11）
 第13回：発表と討論（12）
 第14回：発表と討論（13）

履修上の注意

議論への積極的な参加が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回の発表者は、自分の研究の進捗状況を客観的にとらえ、今、何を優先すべきなのかを意識すること、他の受講者は、発表者の現状にとって何が必要なのかを真剣に考え、発表者の助けになるコメント、討論ができるよう心がけてもらいたい。

教科書

特に用いない。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

発表60％，討論への貢献度40％。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究		備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習ⅣA		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	特任教授 氷川 竜介		

授業の概要・到達目標

演習 A～D では修士論文の執筆に際し、立体的な検証が可能となる視点をあたえつつ、複数回の発表、意見交換をもとに指導する。先行研究が乏しいため、関連メディア（マンガ、ゲーム、ノベル等）のビジネス概況、表現についても考慮し、文献調査や関係者への聞き取り調査なども行う。今期は修論の目標設定、課題抽出、方法論等の進め方の基礎を構築する。研究テーマや方向性を確認し、不足面については指導する。また、基礎文献の査読や映像作品の確認も必要に応じて行う。

授業内容

- 第1回 インTRODクッション
 - 第2回 テーマ立案と調査法の議論
 - 第3回 既存文献講読と発表（1）
 - 第4回 既存文献講読と発表（2）
 - 第5回 作品鑑賞と議論
 - 第6回 経過報告と討論（1）
 - 第7回 経過報告と討論（2）
 - 第8回 経過報告と討論（3）
 - 第9回 作品紹介と鑑賞
 - 第10回 経過報告と討論
 - 第11回 学生による研究発表（先行研究調査）（1）
 - 第12回 学生による研究発表（先行研究調査）（2）
 - 第13回 経過報告と討論
 - 第14回 最終発表、まとめ討議
- ※授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

研究論文にとって大事なことは「変化」です。修論が書かれる前と後で過去にはない変化を生み出し、前に進む必要があります。今期はまず課題分野の「先行研究リスト」を作成し、そのフロントラインを見極めましょう。過去の情報に疑問を持ち、課題・問題を発見する視点で、目標を再確認します。

準備学習（予習・復習等）の内容

『論文の書き方』という書籍は多数あるので一読してください。その上で修論の課題設定と執筆を進める方法論、プロセス、スケジュールなど研究計画を具体化し、提示できるように用意してください。全体方針として具体的な疑問に具体的に応えますので、学生から自主的に提案することで進めます。

教科書

使用しません。

参考書

学生のテーマによっては参考文献を指定します。

成績評価の方法

問題設定、先行研究調査についての確さで評価します。議論における意見交換の積極性、クリティカル・ポイントの発見能力も判断材料です。学生の実績、発表が70%、議論の活性化によるゼミへの貢献度30%程度。

その他

積極性を重んじます。アニメ業界の人脈もありますので、うまく氷川を利用してください。

ポップカルチャー研究		備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習ⅣB		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	特任教授 氷川 竜介		

授業の概要・到達目標

演習 B は修士論文の折り返し点に該当する。したがって B の終わる時点までには学生の選んだ問題設定に大きな疑問がなく、残り1年の明確なスケジュールと作業一覧ができていて、迷いのない状態となっていることをめざす。たとえば先行研究の洗い出しなどは B の段階で終わらせて不足部分を明確化する。聞き取り取材などもキーパーソンに関しては終わらせておくこと。基礎文献の査読や映像作品確認も必要に応じて行うが、よりテーマに密着したものとしていく。

授業内容

- 第1回 休暇中の研究報告、スケジュール確認
 - 第2回 先行文献調査発表と議論（1）
 - 第3回 先行文献調査発表と議論（2）
 - 第4回 先行文献調査発表と議論（3）
 - 第5回 作品鑑賞と議論
 - 第6回 文献査読、経過報告と討論（1）
 - 第7回 文献査読、経過報告と討論（2）
 - 第8回 文献査読、経過報告と討論（3）
 - 第9回 作品紹介と鑑賞
 - 第10回 学生による研究発表（中間発表対応）（1）
 - 第11回 学生による研究発表（中間発表対応）（2）
 - 第12回 学生による研究発表（中間発表対応）（3）
 - 第13回 中間発表のフィードバック
 - 第14回 最終発表、まとめ討議
- ※授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

修士論文の作成も、ひとつの「プロジェクト」です。たとえば最後の数ヶ月で「作文」というところに集中すれば何とかなるようなものではありません。ブレのない幹と枝葉を見分け、ゴールをきちんと見えたうえで、着実に積みあげるよう、時間を有効に使ってください。

準備学習（予習・復習等）の内容

書籍『論文の書き方』にもPDCAサイクルなどプロセス管理の概念が書いてあるはずですが。不足の場合、ビジネス書などで補強すること。計画の骨子さえしっかりしてれば、問題があっても回復は容易です。アニメ、ゲームづくりにも同じプロセスがあるので、その理解も必要です。

教科書

使用しません。

参考書

学生のテーマによっては参考文献を指定します。

成績評価の方法

問題設定、先行研究調査についての確さで評価します。議論における意見交換の積極性、クリティカル・ポイントの発見能力も判断材料です。学生の実績、発表が70%、議論の活性化によるゼミへの貢献度30%程度。

その他

IT企業でのプロジェクト・マネージャの経験もありますので、うまく氷川を利用してください。

ポップカルチャー研究		備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習ⅣC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	特任教授 氷川 竜介		

授業の概要・到達目標

演習Cは修士論文執筆の本格化となる。Bまでで固めたテーマ、先行文献調査に対し、自身の論文の先進性や更新性を確認。明確化された方針のもと、必要な一次情報のリストアップ、情報収集・取材スケジュールを出し、To Do リストを潰して論文の完成度を確立する。Dの時点ではブラッシュアップに集中すべきであるから、Cの終わりまでには完成形が見えるべきである。作品確認も必要に応じて行うが、この時点では総合性や視野の広さの獲得に傾注する。

授業内容

- 第1回 休暇中の研究報告、スケジュールリング確認
 - 第2回 論文の現状発表と課題抽出 (1)
 - 第3回 論文の現状発表と課題抽出 (2)
 - 第4回 論文の現状発表と課題抽出 (3)
 - 第5回 作品鑑賞と議論
 - 第6回 先行文献と論文の討論 (1)
 - 第7回 先行文献と論文の討論 (2)
 - 第8回 先行文献と論文の討論 (3)
 - 第9回 作品紹介と鑑賞
 - 第10回 学生による研究発表、クロスレビュー (1)
 - 第11回 学生による研究発表、クロスレビュー (2)
 - 第12回 学生による研究発表、クロスレビュー (3)
 - 第13回 中間発表のフィードバック
 - 第14回 最終発表、まとめ討議
- ※授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

修士論文執筆も後半戦。Cは最終的な品質を決める重要な期間となります。新規の一次情報を収集しつつ、最初の1年で固めた課題設定とその論証の骨子に矛盾がないか等検証しながら、論文の骨格をしっかりと構築してください。先行研究を超えるための努力も必要です。

準備学習（予習・復習等）の内容

計画の骨子を調整できる最後のチャンスです。これまでの成果を確認するとともに、自身の生産性（調査や執筆速度など）を把握、Dに至る計画の無理を確認してください。また論文そのものの社会性などの位置づけを、少し距離をおいたところから再確認すること。

教科書

使用しません。

参考書

学生のテーマによっては参考文献を指定します。必要に応じて学外関係者との意見交換なども行う。

成績評価の方法

問題設定、先行研究調査についての的確さに加え、プロジェクト管理の理解度も評価します。研究完成度への具体的なアプローチや課題設定の完成度が重要です。学生の実績、発表が80%、議論の活性化によるゼミへの貢献度20%程度。

その他

進捗確認やプロジェクト達成プロセスは、今後の人生すべてに役立つので、身につけてください。

ポップカルチャー研究		備 考	
科 目 名	ポップカルチャー演習ⅣD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	特任教授 氷川 竜介		

授業の概要・到達目標

演習Dは修士論文の完成であり、まとめの時期である。1年半の成果をふまえ、情報収集の欠落、論旨の飛躍や破綻を確認。余裕があればフィールドワーク、学外見学、クリエイターや商業研究者との意見交換などで、修士論文のオリジナリティと完成度を高める。さらに文章とプレゼンテーションのクオリティを高め、「他者の理解と共有性」への改善を重ねる。知見の先進性、修士論文の完成度は言うにおよばず、未来のアニメ文化に対して、さらなる進化の触媒となりうるレベルを目標とする。

授業内容

- 第1回 休暇中の研究報告、スケジュールリング確認
 - 第2回 修論発表とレビュー (1)
 - 第3回 修論発表とレビュー (2)
 - 第4回 修論発表とレビュー (3)
 - 第5回 課題対応とレビュー (1)
 - 第6回 課題対応とレビュー (2)
 - 第7回 課題対応とレビュー (3)
 - 第8回 フリーディスカッション
 - 第9回 発表練習とブラッシュアップ (1)
 - 第10回 発表練習とブラッシュアップ (2)
 - 第11回 発表練習とブラッシュアップ (3)
 - 第12回 発表練習とブラッシュアップ (4)
 - 第13回 フリーディスカッションとフィードバック
 - 第14回 発表へむけての最終討議とまとめ
- ※授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

Dは最終段階です。プロジェクトが完成へ向かうときには、想定外のことが次々に起きてあっという間に時間が消費されるものです。しかし課題をリストアップし、総量を把握しながら冷静に対処すれば必ず完成します。落ちついて様々な視点からチェックを反復、完成度を高めてください。

準備学習（予習・復習等）の内容

Cまではインプットの時期でした。最終段階はその熟成と、「論文執筆」「発表」というアウトプットの時期です。何度も発表練習と査読を繰り返せし、論旨の飛躍や伝わりにくい表現などを徹底的に排除してください。留学生の方はネイティブの知人・友人複数からの確認を受けてください。

教科書

使用しません。

参考書

学生のテーマによっては参考文献を指定します。

成績評価の方法

発表内容、表現、課題への取り組みが80%、議論の活性化によるゼミへの貢献度20%程度。

その他

課題・問題はあって当たり前、なければ逆に先進性や独自性の欠落を疑ってください。

メディア・社会・国際研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	コンテンツ・メディア演習ⅡA		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 工学博士 長谷川 文雄		

授業の概要・到達目標

これから2年間にわたって修士論文を作成するに際し、研究テーマの設定を行い、それを今後推進していくための研究計画書を作成するための指導を行う。研究テーマが定まったところで、研究計画書を作成する。まず当該研究に関する先行事例を調査するとともに、関連文献のリストを作成し収集をする。

当該研究を進めるにあたって必須の基本的な資料の講読をもとに討論を繰り返す。論文構想を確認し、さらに資料の講読及び討議を進めていく。最終的に研究テーマを確定し、先行事例、既存資料の講読を踏まえて、当該研究者の論文構想の最終発表を行う。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究テーマに関する討議・相談
- 第3回：研究計画の作成
- 第4回：先行研究論文調査
- 第5回：文献リスト作成、指導
- 第6回：文献の確認、指導
- 第7回：基本資料講読及び討論 (1) 前半
- 第8回：基本資料講読及び討論 (1) 後半
- 第9回：論文構想の確認、指導
- 第10回：基本資料講読及び討論 (2) 前半
- 第11回：基本資料講読及び討論 (2) 後半
- 第12回：研究作業の課題の確認、指導
- 第13回：論文テーマの修正案の提示
- 第14回：論文構想最終発表

履修上の注意

今後の論文作成に当たって、最も重要な過程であるので、国内外の先行研究、関連研究、基礎的文献を効率良く行ってほしい。

建築にたとえるならば、基礎工事に相当しよう。この過程を疎かにすると、研究を進めていくに従い、根本から見直さなければならない事態になる可能性があるため、留意して欲しい。

準備学習（予習・復習等）の内容

討議で議論された文献、資料について収集をするとともに、演習に参加する前に講読してくること。

教科書

『創造的論文の書き方』伊丹敬之（有斐閣）

参考書

『コンテンツ学』長谷川文雄、福富忠和（世界思想社）
同時に、当該学生の研究テーマに即し、基礎的資料を配布する。

成績評価の方法

授業への参加状況（授業内小レポート及びディスカッション、60%）とレポート（40%）

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	コンテンツ・メディア演習ⅡB		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 工学博士 長谷川 文雄		

授業の概要・到達目標

春学期で立てた研究計画の進捗状況を確認しつつ、さらに先行研究、関連した基礎文献を講読し、研究に関連した調査を進めていく。必要に応じ、ヒアリングやマス調査など外部調査を実施するとともに、関連学会等が研究発表会を開催する折りは、積極的に聴講を行う。今学期中に修論完成までの詳細なスケジュールを見極め、次学期に向けてのさらなる研究推進を行う。

授業内容

- 第1回：夏季休暇中の進捗状況の報告と確認
- 第2回：修論の進捗状況の報告と問題点の確認・検討 (1)
- 第3回：修論の進捗状況の報告と問題点の確認・検討 (2)
- 第4回：修論の進捗状況の報告と問題点の確認・検討 (3)
- 第5回：修論の進捗状況の報告と問題点の確認・検討 (4)
- 第6回：修論の進捗状況の報告と問題点の確認・検討 (5)
- 第7回：副指導員を交えた中間報告と討議 (1)
- 第8回：副指導員を交えた中間報告と討議 (2)
- 第9回：修論の進捗状況の報告と問題点の確認・検討 (6)
- 第10回：修論の進捗状況の報告と問題点の確認・検討 (7)
- 第11回：関連研究に関する課題に基づく発表と討議 (1)
- 第12回：関連研究に関する課題に基づく発表と討議 (2)
- 第13回：関連研究に関する課題に基づく発表と討議 (3)
- 第14回：総括

履修上の注意

秋学期は春学期に決めた研究計画に基づき、夏季休暇中の研究が進捗した一方、新たな課題も見えてきたはずである。そこを重点的に検討し、さらなる展開を目指したい。

準備学習（予習・復習等）の内容

秋学期は個人発表が中心になるので、事前に周到的な準備を進め、演習に望むこと。

教科書

進捗に応じ、また新たな課題に対する対処を前提にした文献を中心に、教科書的に扱う。

参考書

進捗に応じ、また新たな課題に対する対処を前提にした文献を中心に、関連文献を参照する。

成績評価の方法

授業への参加状況（授業内小レポート及びディスカッション、60%）とレポート（40%）

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	コンテンツ・メディア演習ⅡC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 工学博士 長谷川 文雄		

授業の概要・到達目標

論文の完成に必要なコンテンツ・メディアの領域で、多面的な視点で考察できるように、日本のコンテンツ産業の現状と課題について討議を行なう。目指す論文の完成にどこに課題があり、どのように克服すべきかを把握し、論文作成に資する。

授業内容

第1回：当該論文とコンテンツ・メディアの関係性の確認
第2回：コンテンツ・メディア産業の特徴
第3回：他産業との比較
第4回：コンテンツ産業の現状における課題
第5回：当該論文とコンテンツ産業を巡る討議
第6回：当該論文とコンテンツ産業を巡る討議
第7回：当該論文とコンテンツ産業を巡る討議
第8回：討議内容を踏まえた論文構成の確認
第9回：副指導者を交えた論文構成の確認と課題抽出
第10回：論文執筆に向けた作成指導
第11回：論文執筆に向けた作成指導
第12回：論文執筆に向けた作成指導
第13回：論文執筆に向けての最終確認と討議
第14回：総括

履修上の注意

現在急速に変化している分野なので、当該論文との関連性の把握に努めること。

準備学習（予習・復習等）の内容

新しい知識の習得のため、指示した文献を熟読すること。

教科書

『情報通信白書2018』総務省

参考書

『コンテンツ産業論』川島伸子（ミネルヴァ書房）
『コンテンツ産業論』出口弘，田中秀幸，小山友介（東京大学出版会）
『デジタルコンテンツ白書2018』財デジタルコンテンツ協会編
『コンテンツ産業とイノベーション』半澤誠司（勁草書房）
その他、演習中において必要に応じ指示する。

成績評価の方法

授業への参加状況（授業内小レポート及びディスカッション，60％）とレポート（40％）

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	コンテンツ・メディア演習ⅡD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 工学博士 長谷川 文雄		

授業の概要・到達目標

修士論文完成に向けての最後の学期となり、これまで3学期間を通じて行われてきた指導・討議を元に修論の完成を目指す。

ドラフトとして書き上げた修士論文の加筆修正や推敲を行い、必要に応じて追加の調査・分析を行なう。11回までに準完成論文を提出し、発表の準備を行なう。

授業内容

第1回：夏期休暇中の進捗状況の報告・討議
第2回：論文作成指導
第3回：論文作成指導
第4回：論文作成指導
第5回：論文作成指導
第6回：副指導者を交えた中間報告
第7回：論文作成指導
第8回：論文作成指導
第9回：論文作成指導
第10回：論文作成指導
第11回：準完成論文提出
第12回：発表準備
第13回：副指導者を交えた発表準備
第14回：総括

履修上の注意

今学期は完成を目指すため毎回毎回の指導・討議を重ねていくが、疑問の点は残さず、演習時に解決ないし解決方法を確認すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

夏期休暇前に論文の構成を完成させ、それをもとに休暇中に論文ドラフトを完成させ、その草稿をもとに指導していくため、夏季休暇は特に力を入れて研究に励むこと。

教科書

論文完成を目指すので、特に利用しない。

参考書

論文完成を目指すので、特に利用しないが、論文作成に応じた生じてきた課題については、解決を図るための資料・文献をその都度参考にする。

成績評価の方法

授業への参加状況（授業内小レポート及びディスカッション，60％）とレポート（40％）

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	日本社会システム演習ⅠA		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（商学） 白戸 伸一		

授業の概要・到達目標

本演習のA～Dを通じて、日本近現代における流通産業と流通政策の発達史を研究する。日本的流通の特徴として、中小零細経営の滞留に伴う流通の多段階性と総合商社の発達が指摘される。大規模小売企業の成長とともに流通の構造変化が進行しているが、他方では貿易の担い手であり卸段階に位置する総合商社は相変わらず強力である。このような日本の流通構造や流通産業の発達史を動態的に分析し、現状における課題と今後の可能性を展望することが本演習の課題である。そのために演習ⅠA・Bでは、マクロ的視点より日本の流通構造の変遷を確認しつつ、各時期の流通政策との関連性を検討する。従ってその到達目標は、日本経済の発達史に流通の発達史を位置づけながら、マクロ的視点から日本の流通構造の特徴を解明するとともに、流通政策の有効性を検証することである。

授業内容

- 第1回：課題に関するイントロダクション
- 第2回：日本の「流通革命」論の検討
- 第3回：日本の「流通革命」論の検討
- 第4回：日本の「流通産業」論の検討
- 第5回：日本の「流通産業」論の検討
- 第6回：総合商社に関する先行研究の検討
- 第7回：総合商社に関する先行研究の検討
- 第8回：総合商社に関する先行研究の検討
- 第9回：総合商社に関する先行研究の検討
- 第10回：日本の小売段階の構造分析（先行研究とデータ分析）
- 第11回：日本の小売段階の構造分析（先行研究とデータ分析）
- 第12回：日本の卸段階の構造分析（先行研究とデータ分析）
- 第13回：日本の卸段階の構造分析（先行研究とデータ分析）
- 第14回：まとめ

履修上の注意

関連する先行研究は事前に目を通し、その基本的論点を確認しておくこと。また、『商業統計』等の官庁統計の構成や変遷について事前に確認しておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

日本の流通に関する通史的著作（石井寛治『日本流通史』、石井寛治編『近代日本流通史』、石原武政・矢作敏行編『日本の流通100年』等）については事前に精読しておくこと。

教科書

特になし。

参考書

- 『日本の流通・サービス産業』廣田誠（大阪大学出版会）
- 『現代日本経済 第3版』橋本寿朗・長谷川信・宮島英昭（有斐閣）
- 『総合商社の研究』田中隆之（東洋経済新報社）
- 『日本の成長戦略と商社』戸堂康之（東洋経済新報社）
- 『産業政策と企業統治の経済史』宮島英昭（有斐閣）
- 『日本流通マーケティング史』小原博（中央経済社）
- 『日本流通産業史』マーケティング史研究会編（同文館）

成績評価の方法

各テーマについて分担を決め文献の輪読・報告を求めるので、それらへの取り組み状況や、期末に提出を求めるレポートによって評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	日本社会システム演習ⅠB		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（商学） 白戸 伸一		

授業の概要・到達目標

本演習のA～Dを通じて、日本近現代における流通産業と流通政策の発達史を研究する。日本的流通の特徴として、中小零細経営の滞留に伴う流通の多段階性と総合商社の発達が指摘される。大規模小売企業の成長とともに流通の構造変化が進行しているが、他方では貿易の担い手であり卸段階に位置する総合商社は相変わらず強力である。このような日本の流通構造や流通産業の発達史を動態的に分析し、現状における課題と今後の可能性を展望することが本演習の課題である。そのために演習ⅠA・Bでは、マクロ的視点より日本の流通構造の変遷を確認しつつ、各時期の流通政策との関連性を検討する。従ってその到達目標は、日本経済の発達史に流通の発達史を位置づけながら、マクロ的視点から日本の流通構造の特徴を解明するとともに、流通政策の有効性を検証することである。

授業内容

- 第1回：流通政策研究に関するイントロダクション
- 第2回：流通政策研究の先行研究検討
- 第3回：流通政策研究の先行研究検討
- 第4回：流通政策研究の先行研究検討
- 第5回：貿易政策に関する検討
- 第6回：貿易政策に関する検討
- 第7回：国内流通政策に関する検討（戦前・戦後復興期）
- 第8回：国内流通政策に関する検討（戦前・戦後復興期）
- 第9回：国内流通政策に関する検討（高度成長期）
- 第10回：国内流通政策に関する検討（70-80年代）
- 第11回：国内流通政策に関する検討（規制緩和期）
- 第12回：国内流通政策に関する検討（都市政策・まちづくり政策）
- 第13回：国内流通政策に関する検討（都市政策・まちづくり政策）
- 第14回：まとめ

履修上の注意

政策史研究については、基本的には関連文献・資料の読み込みと批判的検討を試みるので、事前に提示したテーマに沿って報告してもらう予定である。

準備学習（予習・復習等）の内容

自分の研究テーマに関連のある政策については、政策立案から実施結果まで関連資料や文献を収集し報告準備しておくこと。

教科書

『通商産業政策史4 商務流通政策』通商産業政策史編纂委員会編・石原武政編著（経済産業調査会）

参考書

- 『シリーズ流通体系⑤日本の流通政策』石原武政・加藤司編（中央経済社）
- 『流通政策入門』渡辺達朗（中央経済社）
- 『産業政策と企業統治の経済史』宮島英昭（有斐閣）

成績評価の方法

主として各自の報告内容により評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	日本社会システム演習 I C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（商学） 白戸 伸一		

授業の概要・到達目標

本演習の A～D を通じて、日本近現代における流通産業と流通政策の発達史を研究する。日本的流通の特徴として、中小零細経営の滞留に伴う流通の多段階性と総合商社の発達指摘される。大規模小売企業の成長とともに流通の構造変化が進行しているが、他方では貿易の担い手であり卸段階に位置する総合商社は相変わらず強力である。このような日本の流通構造や流通産業の発達史を動態的に分析し、現状における課題と今後の可能性を展望することが本演習の課題である。そのために演習 I C・D では、演習 I A・B での検討を踏まえ、各自の修士論文テーマに即した報告・討論を織り込みながら、流通産業や流通政策、とりわけまちづくり政策中に位置づけられた流通政策がどのように展開されているのかを、フィールドワークを通じて検証してゆくこととする。その過程では、諸外国との事例との対比を試みながら、この分野における日本の独自性や問題点の解明を行なう。1980年代以降のデータが如実に示しているように、日本の小売業は顕著な構造変化を見せている。まちづくり 3 法に示されているように小売業をまちづくりのインフラの一つに位置づけ、中心市街地の活性化が試みられているが、このような事例に関するフィールドワークに取り組みつつ、日本における流通のあり方を検討する。これらの検討により、まちづくりの視点からの流通政策及び地域流通における日本の特質を理解することを到達目標とする。

授業内容

第1回：課題に関するイントロダクション
 第2回：日本的流通論の特徴
 第3回：小売業の構造変化（データによる確認、先行研究の検討）
 第4回：流通政策の転換（産構審流通部会・中政審等におけるビジョン、提言等の検討）
 第5回：まちづくりと流通問題
 第6回：小売業の国際比較
 第7回：小売業の国際比較
 第8回：小売業の国際比較
 第9回：ケース・スタディ
 第10回：ケース・スタディ
 第11回：ケース・スタディ
 第12回：ケース・スタディ
 第13回：ケース・スタディ
 第14回：まとめ

履修上の注意

以下に掲げる参考書には事前に目を通し、その基本的論点を確認しておくこと。また、それ以外にも必要に応じて他の文献等を提示するので読んでおくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

各自の研究テーマに関する報告を適宜行なってもらうので、論文構成に対応した報告を準備すること。

教科書

特になし。

参考書

『日本の産業システム 2 素材産業の新展開』植草・大川・富浦編（NTT 出版）
 『流通の構造変動と課題』横森豊雄（白桃書房）
 『小売国際化プロセス』矢作敏行（有斐閣）
 『シリーズ流通体系 4 地域商業の競争構造』『シリーズ流通体系 5 日本の流通政策』石原武政・加藤司編（中央経済社）
 『地域商業の底力を探る』矢作敏行他（白桃書房）
 『通商産業政策史 4 商務流通政策』石原武政編著（経済産業調査会）

成績評価の方法

各テーマについて分担を決め報告を求めるので、それらへの取り組み状況や、期末に提出を求めるレポートによって評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	日本社会システム演習 I D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（商学） 白戸 伸一		

授業の概要・到達目標

本演習の A～D を通じて、日本近現代における流通産業と流通政策の発達史を研究する。日本的流通の特徴として、中小零細経営の滞留に伴う流通の多段階性と総合商社の発達指摘される。大規模小売企業の成長とともに流通の構造変化が進行しているが、他方では貿易の担い手であり卸段階に位置する総合商社は相変わらず強力である。このような日本の流通構造や流通産業の発達史を動態的に分析し、現状における課題と今後の可能性を展望することが本演習の課題である。そのために演習 I C・D では、演習 I A・B での検討を踏まえ、各自の修士論文テーマに即した報告・討論を織り込みながら、流通産業や流通政策、とりわけまちづくり政策中に位置づけられた流通政策がどのように展開されているのかを、個別研究やフィールドワークを通じて検証してゆくこととする。その過程では、諸外国との事例との対比を試みながら、この分野における日本の独自性や問題点の解明を行なう。これらの検討により、各自の研究テーマやまちづくりの視点からの流通政策及び地域流通における日本の特質を理解することを到達目標とする。

授業内容

第1回：個別研究・フィールドワークに関するイントロダクション
 第2回：個別研究報告 1
 第3回：ケース・スタディ 1（対象都市の歴史・特徴、商工団体及び自治体の流通政策、小売企業の流通・マーケティング戦略）
 第4回：ケース・スタディ 1（対象都市の歴史・特徴、商工団体及び自治体の流通政策、小売企業の流通・マーケティング戦略）
 第5回：個別研究報告 2
 第6回：ケース・スタディ 2（対象都市の歴史・特徴、商工団体及び自治体の流通政策、小売企業の流通・マーケティング戦略）
 第7回：ケース・スタディ 2（対象都市の歴史・特徴、商工団体及び自治体の流通政策、小売企業の流通・マーケティング戦略）
 第8回：個別研究報告 3
 第9回：ケース・スタディ 3（対象都市の歴史・特徴、商工団体及び自治体の流通政策、小売企業の流通・マーケティング戦略）
 第10回：ケース・スタディ 3（対象都市の歴史・特徴、商工団体及び自治体の流通政策、小売企業の流通・マーケティング戦略）
 第11回：個別研究報告 4
 第12回：論点整理
 第13回：ケース・スタディに見られる共通性と異質性の検討
 第14回：まとめ

履修上の注意

各自の研究テーマに基づく個別報告と共同研究のケース・スタディを交互に報告する予定である。報告は、可能な限り 1 次資料を用いて行なうことが望ましい。

準備学習（予習・復習等）の内容

各自の論文構成と報告部分の関連を明確にしながら準備すること。

教科書

特になし。

参考書

『通商産業政策史 4 商務流通政策』石原武政編著（経済産業調査会）、『商業まちづくり政策』渡辺達朗（有斐閣）

成績評価の方法

主として各自の報告内容により評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	日本社会システム演習ⅡA		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（経済学） 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

日本企業の人事労務管理に関しては、長期雇用や年功賃金制度が今の時代に果たして有効的な制度なのかなど、さまざまな論点がある。この演習では、日本企業の生産現場の強さの要因とされる「知的熟練」をはじめ、労働者やホワイトカラーのキャリア管理、年功賃金や長期雇用などの主要問題を取り上げ、日本企業の国際展開の視点も入れて、議論する。それに合わせて、中小企業労働者や女性労働者や高年労働者などの分野にも目を配り、そこにどのような問題があり、その課題は何かについても考える。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：さまざまな労働者グループ
 第3回：知的熟練
 第4回：大企業労働者のキャリア
 第5回：大卒ホワイトカラーの人材開発
 第6回：報酬 Pay：年功賃金か
 第7回：長期雇用と解雇
 第8回：人的資本の現代理論
 第9回：中小企業労働者
 第10回：女性労働者
 第11回：高年労働者とフリーター
 第12回：海外の日本企業
 第13回：働く場での労働組合
 第14回：マクロの労働経済

履修上の注意

テキストの内容を理解することを第一にして、疑問点や論点について議論する形式で進めるので、テキストを予習して参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業のおよそ半分は講義形式、残りの半分は議論方式によって進めるので、事前にテキストと関連資料を読んで授業に臨むことが必要である。関連資料は毎回紹介する。

教科書

『仕事の経済学（第3版）』小池和男（東洋経済新報社）

参考書

『新しい人事労務管理』佐藤博樹・藤村博之・八代充史（有斐閣マルマ）
 『日本産業社会の「神話」』小池和男（日本経済新聞社）
 『日本的雇用慣行の経済学』八代尚宏（日本経済新聞社）

成績評価の方法

授業への参加度（60％）とレポート（40％）によって評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	日本社会システム演習ⅡB		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（経済学） 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

日本企業の海外工場におけるものづくり方式の移転と人材育成をテーマとする。その前提として日本企業の海外展開の歴史、直接投資の推移、海外日本企業についての既存研究を概観し、その後、欧米とアジアにおける日本企業の海外工場の事例を取り上げ、日本企業の競争優位の要素を海外工場に移転するとき、どのような要因が決め手になるかについて考える。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：海外活動の歴史と段階
 第3回：統計による直接投資の国際比較
 第4回：海外日本企業についての研究（1）
 第5回：海外日本企業についての研究（2）
 第6回：日本の職場における生産技術者と製造技術者
 第7回：アメリカの日本企業（1）：NUMMI
 第8回：アメリカの日本企業（2）：日産アメリカ
 第9回：イギリスの日本企業（1）：トヨタ英工場
 第10回：イギリスの日本企業（2）：英国の東芝工場
 第11回：アジアの日本企業（1）：トヨタタイ工場
 第12回：アジアの日本企業（2）：日産中国工場
 第13回：アジアの日本企業（3）：トヨタ中国工場
 第14回：アジアの日本企業（4）：トヨタ台湾工場

履修上の注意

テキストの内容を理解することを第一にして、疑問点や論点について議論する形式で進めるので、テキストを予習して参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回読むべき関連資料を紹介あるいは配布するので、それを学習して授業に臨むこと。
 授業は講義の後、30分程度議論を行う方式で進める。

教科書

『海外日本企業の人材形成』小池和男（東洋経済新報社）
 『アメリカに生きる日本的生産システム』安保哲夫他（東洋経済新報社）

参考書

『人材形成の国際比較—東アジアと日本』小池和男・猪木武徳編（東洋経済新報社）
 『日本的経営・生産システムと東アジア』板垣博編著（ミネルヴァ書房）

成績評価の方法

授業への参加度（60％）とレポート（40％）によって評価する。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

メディア・社会・国際研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	日本社会システム演習ⅡC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（経済学） 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

ものづくりの組織能力は国・地域によって偏在している。すなわち、特定の国・地域がすべての分野で競争優位を発揮する例はあまりない。日本の場合も例外ではなく、日本企業が得意とする分野もあれば、あまり得意ではない分野もある。この演習ではこの問題を、製品アーキテクチャの概念に基づいて、具体的な製品・産業を取り上げて探ることとする。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：ものづくりの国際経営論
第3回：東アジアにおける製造ネットワーク
第4回：東アジアへの直接投資と企業成長マネジメント
第5回：日本の産業競争力：液晶テレビ・パネル産業
第6回：日本の産業競争力：携帯電話産業
第7回：日本の産業競争力：ハードディスク・ドライブ産業
第8回：日本の産業競争力：自動車産業
第9回：日本の産業競争力：オートバイ産業
第10回：アジア企業の競争戦略：台湾企業
第11回：アジア企業の競争戦略：韓国企業
第12回：アジア企業の競争戦略：中国企業
第13回：日本企業の戦略展望（1）
第14回：日本企業の戦略展望（2）

履修上の注意

テキストの内容を理解することを第一にして、疑問点や論点について議論する形式で進めるので、テキストを予習して参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回関連資料を紹介あるいは配布する。テキストとともにその関連資料を読んで授業に出ること。
毎回、講義の後、30分程度の時間を確保して議論を行う。

教科書

『ものづくりの国際経営戦略：アジアの産業地理学』新宅純二郎・天野倫文編（有斐閣）

参考書

『中国製造業のアーキテクチャ分析』藤本隆宏・新宅純二郎編著（東洋経済新報社）
『メイド・イン・ジャパンは終わるのか』青島矢一、武石彰、マイケル・A・クスmano編著（東洋経済新報社）

成績評価の方法

授業への参加度（60％）とレポート（40％）によって評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	日本社会システム演習ⅡD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（経済学） 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

「強い工場」と「弱い本社」、「高いものづくり組織能力」と「低い市場パフォーマンス」という日本企業の問題について、ものづくり組織能力と製品アーキテクチャを軸に議論する。それにあわせて、新興国の代表ともいえる中国との関係設定についても議論する。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：日本のものづくり論
第3回：「強い工場・強い本社」への道
第4回：もの造りの組織能力：トヨタを例として（1）
第5回：もの造りの組織能力：トヨタを例として（2）
第6回：もの造り能力とアーキテクチャとの相性（1）
第7回：もの造り能力とアーキテクチャとの相性（2）
第8回：アーキテクチャの産業地政学
第9回：中国との戦略的つきあい方（1）
第10回：中国との戦略的つきあい方（2）
第11回：もの造り能力の収益への結び付け方（1）
第12回：もの造り能力の収益への結び付け方（2）
第13回：もの造り日本の進路（1）
第14回：もの造り日本の進路（2）

履修上の注意

テキストの内容を理解することを第一にして、疑問点や論点について議論する形式で進めるので、テキストを予習して参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、関連資料を紹介あるいは配布するので、テキストとともに、その関連資料を読んで授業に出ること。
毎回、講義の後、30分程度の時間で議論を行う。

教科書

『日本もの造り哲学』藤本隆宏（日本経済新聞社）

参考書

授業の進行に合わせて適宜関連文献を紹介する。

成績評価の方法

授業への参加度（60％）とレポート（40％）によって評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	日本社会システム演習Ⅲ A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（政治・国際研究） 鈴木 賢志		

授業の概要・到達目標

現代日本社会における、法令・規則などのフォーマルな制度、慣習・不文律と呼ばれるようなインフォーマルな制度、およびその総体である社会システムの特徴を理解する上で、スウェーデンをはじめとする北欧諸国の社会システムは（良い意味でも悪い意味でも）大いに参考となる要素を有している。そのような理解のもとで、本演習においては「日本社会と北欧社会の比較分析」を主眼とし、その前提となる日本社会、北欧社会に関する基礎的な知識の醸成と、それを踏まえて、自らの研究において設定すべき問題、そしてそれに対する仮説の検討を行う。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：日本と北欧の比較—国家システム
 第3回：日本と北欧の比較—政党システム
 第4回：日本と北欧の比較—行政システム
 第5回：日本と北欧の比較—教育システム
 第6回：日本と北欧の比較—男女平等システム
 第7回：日本と北欧の比較—育児支援システム
 第8回：日本と北欧の比較—高齢者支援システム
 第9回：日本と北欧の比較—年金・保険システム
 第10回：日本と北欧の比較—生活保護システム
 第11回：日本と北欧の比較—雇用システム
 第12回：日本と北欧の比較—エネルギー供給システム
 第13回：研究課題の設定と仮説の検討（初回提案および検討）
 第14回：研究課題の設定と仮説の検討（再提案および検討）

履修上の注意

履修に際して、北欧の言語や社会システムに関する予備知識は特に求めない。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回のテーマに関して、自分が議論したいトピックを明確にして授業に臨むこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

授業内で指定する。

成績評価の方法

レポートおよび平常点（授業参加の積極度や授業で出題する課題の到達度）で評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	日本社会システム演習Ⅲ B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（政治・国際研究） 鈴木 賢志		

授業の概要・到達目標

研究の問題設定と仮説の検討を継続しつつ、それらを実証するための方法論に力点を置いた学習を行う。具体的には、北欧諸国への現地調査とインタビュー、日本および北欧社会の特性を表すような国際比較データの収集・加工方法の修得、MS-EXCELやSPSSなどのソフトウェアを用いたデータの整理、および統計解析手法の修得を目指す。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：研究の問題設定と仮説の検討（初回提案および検討）
 第3回：研究の問題設定と仮説の検討（再提案および検討）
 第4回：国際比較データの収集（経済指標）
 第5回：国際比較データの収集（社会指標）
 第6回：国際比較データの収集（世論調査）
 第7回：国際比較データの加工・分析（基本関数の利用）
 第8回：国際比較データの加工・分析（クロス集計）
 第9回：国際比較データの加工・分析（ピボットテーブルの利用）
 第10回：統計解析手法の修得（基本統計量）
 第11回：統計解析手法の修得（標準分布）
 第12回：統計解析手法の修得（検定）
 第13回：統計解析手法の修得（単純回帰分析）
 第14回：統計解析手法の修得（重回帰分析）

履修上の注意

統計については、事前に高度な数学的知識を必要とせず学習できるように配慮する。

準備学習（予習・復習等）の内容

統計分析は、何より「慣れる」ことが大切なので、学習した内容を何度も復讐して身につけるよう、努力してほしい。

教科書

特に指定しない。

参考書

授業内で指定する。

成績評価の方法

レポートおよび平常点（授業参加の積極度や授業で出題する課題の到達度）で評価する。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	日本社会システム演習ⅢC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（政治・国際研究） 鈴木 賢志		

授業の概要・到達目標

本演習では、設定した問題と仮説を理論的に裏付ける文献精査を行い、実証的な方法によって検証するという、研究の核心となる作業を行う。定期的な発表と、それに基づく議論を繰り返し、論文全体を徐々に精緻化していく。

また質的な実証データの収集のために行うインタビュー調査の設計、実施方法を修得する。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究の問題設定と仮説の再検討（初回提案および検討）
- 第3回：研究の問題設定と仮説の再検討（再提案および検討）
- 第4回：文献精査（広くテーマに関わる文献の精査）
- 第5回：文献精査（主要仮説に関する文献の精査）
- 第6回：文献精査（データの利用に関する文献の精査）
- 第7回：定量データによる仮説の検証（主要データの選定）
- 第8回：定量データによる仮説の検証（主要データの基本属性の検証）
- 第9回：定量データによる仮説の検証（主要データの限界の明確化）
- 第10回：定量データによる仮説の検証（他の関連データの検証）
- 第11回：インタビュー調査の設計（目的の確定）
- 第12回：インタビュー調査の設計（対象者の選定）
- 第13回：インタビュー調査の実施（実施結果の分析）
- 第14回：インタビュー調査の実施（実施結果分析にもとづく議論）

履修上の注意

インタビュー調査は、インターネット等を通じて間接的に行うことも可能であるが、必要に応じて学部学生の北欧研修に同行する機会も与える予定である。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回のテーマは研究のステップを表しているので、受け身の姿勢で臨むのではなく、毎回そのステップを自分で実行した上で、そこで生じた問題点について授業で討議するという形になることを、しっかり心得てほしい。

教科書

特に指定しない。

参考書

特に指定しない。

成績評価の方法

論文の仕上がり具合と、平常点（授業参加の積極度や授業で出題する課題の到達度）。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	日本社会システム演習ⅢD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（政治・国際研究） 鈴木 賢志		

授業の概要・到達目標

学会等での発表の場で得られたコメント等のフィードバックを反映させて研究の質をさらに高め、その論文を国際的な学術誌に投稿、発表していくことを目指す。またそれと並行して、今回の研究の弱点や、カバーできなかった研究領域を明らかにし、可能であれば第2の論文の作成、そこまでが難しければ、将来に向けての問題提起と仮説の提案を行い、主たる研究論文と合わせて修士課程の研究の集大成とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：現時点における研究の発表（論点の整理）
- 第3回：現時点における研究の発表（プレゼンテーション内容の討議）
- 第4回：現時点における研究の発表（プレゼンテーション資料の作成）
- 第5回：現時点における研究の発表（プレゼンテーションの実際）
- 第6回：研究のまとめと課題の抽出（議論の確認）
- 第7回：研究のまとめと課題の抽出（研究の限界）
- 第8回：研究のまとめと課題の抽出（今後の研究の展望）
- 第9回：研究論文の投稿・発表（学術誌の選定）
- 第10回：研究論文の投稿・発表（投稿規定の読み方）
- 第11回：研究論文の投稿・発表（投稿・発表の手続き）
- 第12回：第2論文の作成・将来への問題提起（仮説の抽出）
- 第13回：第2論文の作成・将来への問題提起（検証方法の検討）
- 第14回：第2論文の作成・将来への問題提起（考えうる論点の検討）

履修上の注意

特になし。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回のテーマは研究のステップを表しているので、受け身の姿勢で臨むのではなく、毎回そのステップを自分で実行した上で、そこで生じた問題点について授業で討議するという形になることを、しっかり心得てほしい。

教科書

特に指定しない。

参考書

特に指定しない。

成績評価の方法

論文の成果、平常点（授業参加の積極度と授業で出題する課題の到達度）で評価する。

その他

2年間の集大成として1つの成果を上げ、その後のキャリアにつなげていけるよう、鋭意努力していただきたい。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	国際関係・地域演習 I A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 溝辺 泰雄		

授業の概要・到達目標

「地域」を研究するとはどのような営為なのか。ある「地域」を理解するには何が必要なのか。本演習は、地域研究を志す調査者・研究者が調査フィールドとする「地域」と向き合う姿勢について、過去から現在に至る様々な研究者の論考を基に検討を加える。社会科学統計データだけでは読み解くことができない地域の動態を把握するための要件を考察する。

この問題を論究するために、本演習活動は徹底した文献調査と議論を中心に進めることとなる。各受講者は、自らが設定した「地域」について、少なくとも外国語文献（主として英語）と日本語文献をそれぞれ5～10冊を読み、それぞれについてのレビューを発表することになる。

授業内容

第1回：導入（今期活動内容の説明と問題設定）
 第2回：原書講読と発表・ディスカッション（1）
 第3回：原書講読と発表・ディスカッション（2）
 第4回：原書講読と発表・ディスカッション（3）
 第5回：原書講読と発表・ディスカッション（4）
 第6回：原書講読と発表・ディスカッション（5）
 第7回：原書講読と発表・ディスカッション（6）
 第8回：原書講読と発表・ディスカッション（7）
 第9回：原書講読と発表・ディスカッション（8）
 第10回：原書講読と発表・ディスカッション（9）
 第11回：原書講読と発表・ディスカッション（10）
 第12回：原書講読と発表・ディスカッション（11）
 第13回：原書講読と発表・ディスカッション（12）
 第14回：研究報告書の発表と相互検討

履修上の注意

I Aは徹底した文献調査に基づく演習のため、外国語（特に英語）の読解力が必須である。この点を十分に考慮に入れた上で、受講の判断をおこなうこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

2回目以降の演習では各回必ず事前に課題図書の前読をおこない、演習終了後は課題図書に関する短評を執筆の上、Oh-o! Meiji クラスウェブに提出することが求められる。

教科書

初回演習時に紹介する。

参考書

初回演習時に紹介する。

成績評価の方法

各文献レビューの内容、及び、ディスカッション時の貢献度に基づき、総合的に判断する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	国際関係・地域演習 I B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 溝辺 泰雄		

授業の概要・到達目標

I Aにおいて検討を加えた地域研究者の要件を基に、受講者各自が対象とする地域に関する先行研究のサーベイをおこない、地域研究の意義と限界を考察する。経済においてはグローバル化、言語においては英語化が進む現在において、個別の地域を現地の目線から学ぶことにどのような意味があるのだろうか。本演習は受講者の調査報告を中心に、上記の問いについて検討を加えたい。この問題意識に基づき、受講者各自が行った調査報告を中心に各演習は進められる。

授業内容

第1回：導入（今期活動内容の説明と問題設定）
 第2回：原書講読と発表・ディスカッション（1）
 第3回：原書講読と発表・ディスカッション（2）
 第4回：原書講読と発表・ディスカッション（3）
 第5回：原書講読と発表・ディスカッション（4）
 第6回：原書講読と発表・ディスカッション（5）
 第7回：原書講読と発表・ディスカッション（6）
 第8回：原書講読と発表・ディスカッション（7）
 第9回：原書講読と発表・ディスカッション（8）
 第10回：原書講読と発表・ディスカッション（9）
 第11回：原書講読と発表・ディスカッション（10）
 第12回：原書講読と発表・ディスカッション（11）
 第13回：原書講読と発表・ディスカッション（12）
 第14回：研究報告書の発表と相互検討

履修上の注意

受講者の発表及びそれに関する議論が本演習の主たる活動となる。そのため、演習に対する積極的な姿勢が常に求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

2回目以降の演習では各回必ず事前に課題図書の前読をおこない、演習終了後は課題図書に関する短評を執筆の上、Oh-o! Meiji クラスウェブに提出することが求められる。

教科書

初回演習時に紹介する。

参考書

初回演習時に紹介する。

成績評価の方法

演習時におこなった発表及び議論の貢献度、さらに期末に提出するレポートの内容に基づき、総合的に判断する。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	国際関係・地域演習 I C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 溝辺 泰雄		

授業の概要・到達目標

いわゆる開発途上国・地域において過去から現在にかけて展開されてきた「発展」や「開発」を目指す取り組みを取り上げ、その歴史的な変遷と現代的意味について検討を加える。この問題について検討するべく、受講者はフィールド調査計画の作成に加え、関連する先行研究の徹底した調査を実施する。本演習は、受講者のプレゼンテーションとディスカッションを中心に進められる。

授業内容

第1回：導入（今期活動内容の説明と問題設定）
第2回：原書講読と発表・ディスカッション（1）
第3回：原書講読と発表・ディスカッション（2）
第4回：原書講読と発表・ディスカッション（3）
第5回：原書講読と発表・ディスカッション（4）
第6回：原書講読と発表・ディスカッション（5）
第7回：原書講読と発表・ディスカッション（6）
第8回：原書講読と発表・ディスカッション（7）
第9回：原書講読と発表・ディスカッション（8）
第10回：原書講読と発表・ディスカッション（9）
第11回：原書講読と発表・ディスカッション（10）
第12回：原書講読と発表・ディスカッション（11）
第13回：原書講読と発表・ディスカッション（12）
第14回：研究報告書の発表と相互検討

履修上の注意

本演習は、演習終了後の夏期休暇期間中に各自の対象とするフィールドに少なくとも1ヶ月に渡って実地調査をおこなうことを前提としている。調査地の決定及び実際の調査活動は受講者が全ての責任をもって自主的におこなう。

準備学習（予習・復習等）の内容

2回目以降の演習では各回必ず事前に課題図書の前読をおこない、演習終了後は課題図書に関する短評を執筆の上、Oh-o! Meiji クラスウェブに提出することが求められる。

教科書

初回演習時に紹介する。

参考書

初回演習時に紹介する。

成績評価の方法

調査計画書の内容及び演習における発表・議論を通じた貢献度に基づき、総合的に判断する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	国際関係・地域演習 I D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 溝辺 泰雄		

授業の概要・到達目標

いわゆる開発途上国・地域における「開発」とは何を意味するのかを徹底的に議論する。本演習に参加する受講者は少なくとも1ヶ月以上に渡る開発途上国・地域におけるフィールド体験を有することを前提とし、そこでの体験と先行研究の調査・検討を基に、「開発」が内包する諸側面を解き明かしていく。複数回にわたるプレゼンテーションとディスカッションが演習活動の中心となる。

授業内容

第1回：導入（今期活動内容の説明と問題設定）
第2回：原書講読と発表・ディスカッション（1）
第3回：原書講読と発表・ディスカッション（2）
第4回：原書講読と発表・ディスカッション（3）
第5回：原書講読と発表・ディスカッション（4）
第6回：原書講読と発表・ディスカッション（5）
第7回：原書講読と発表・ディスカッション（6）
第8回：原書講読と発表・ディスカッション（7）
第9回：原書講読と発表・ディスカッション（8）
第10回：原書講読と発表・ディスカッション（9）
第11回：原書講読と発表・ディスカッション（10）
第12回：原書講読と発表・ディスカッション（11）
第13回：原書講読と発表・ディスカッション（12）
第14回：研究報告書の発表と相互検討

履修上の注意

複数回にわたるプレゼンテーションとディスカッションが演習活動の中心となるため、演習前後の準備に相当程度時間を用いることができる者の受講を前提とする。

準備学習（予習・復習等）の内容

2回目以降の演習では各回必ず事前に課題図書の前読をおこない、演習終了後は課題図書に関する短評を執筆の上、Oh-o! Meiji クラスウェブに提出することが求められる。

教科書

初回演習時に紹介する。

参考書

初回演習時に紹介する。

成績評価の方法

複数回に及ぶプレゼンテーションの内容とそれに基づくディスカッションの貢献度、及び期末レポートの内容を総合的に判断し、評価を決定する。

その他

本演習は国際関係・地域演習 I C の受講を前提とする。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習ⅠA		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（教育学） 横田 雅弘		

授業の概要・到達目標

この演習は、異文化間教育とは何かという概念の検討から始め、履修者が自分の博士前期課程で取り組むテーマを決め、それについてどのようにアプローチするのかについての大きな筋を決めることが前半の課題である。漠然とディスカッションするのではなく、具体的な研究の切り口を見つけていく作業であり、その後の研究のベースとなる。後半からは実際に調査を開始し、各自がレジメをきって発表する。

異文化間教育については国や民族の違いという「国際」の観点だけでなく、異なる文化的背景という意味での「文化際」というより広い観点で捉えるので、学生のテーマも広いものになり得る。

授業は、文献講読、発表とディスカッションという形式で行う。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：参加者の興味関心のシェア
- 第3回：異文化間教育についての概念の検討（1）
- 第4回：異文化間教育についての概念の検討（2）
- 第5回：異文化間教育の文献講読と討論（1）
- 第6回：異文化間教育の文献講読と討論（2）
- 第7回：各自のテーマと方法についての構想発表（1）
- 第8回：異文化間教育学会大会への参加
- 第9回：各自のテーマと方法についての構想発表（2）
- 第10回：各自のテーマと方法についての構想発表（3）
- 第11回：各自のテーマと方法についての構想発表（4）
- 第12回：各自のテーマと方法についての構想発表（5）
- 第13回：各自のテーマと方法についての構想発表（6）
- 第14回：包括的な討論

履修上の注意

全ての文献の精読と活発な討論が求められる。
後半では各自が研究テーマに従って文献講読や調査に投入するので、毎回レジメを作成して発表してもらう。
例年6月初旬に開催される異文化間教育学会の大会に、次年度の発表のための準備として参加する。

準備学習（予習・復習等）の内容

前回の授業で担当教員や学生の仲間からもらったコメントを生かし、次回のレジメを作成して発表するので、そのための復習と予習が不可欠である。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

受講者の関心に応じて推薦する。

成績評価の方法

レジメと発表：60％、討論での貢献：40％

その他

異文化間教育学会への入会（学生会員）を求める。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習ⅠB		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（教育学） 横田 雅弘		

授業の概要・到達目標

ⅠBでは、個人の演習テーマ（修士論文につながるテーマ）を決めて、そのテーマに関する文献を読み進むとともに、具体的な調査を設計し、後半ではその計画に則り調査（文献研究を含む）を開始する。2月には、異文化間教育学会大会（6月）の発表申請（ポスター発表等）を行い、3月に大会発表抄録のための原稿を提出する。これを通して、受講者の関心を調査と学会発表という具体的な成果に結実させる力量を鍛える。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：個人の演習テーマと調査計画についての発表と討論（1）
- 第3回：個人の演習テーマと調査計画についての発表と討論（2）
- 第4回：個人の演習テーマと調査計画についての発表と討論（3）
- 第5回：個人の演習テーマと調査計画についての発表と討論（4）
- 第6回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論（1）
- 第7回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論（2）
- 第8回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論（3）
- 第9回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論（4）
- 第10回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論（5）
- 第11回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論（6）
- 第12回：個人の演習テーマに即した調査実践報告と討論（1）
- 第13回：個人の演習テーマに即した調査実践報告と討論（2）
- 第14回：包括的な討論

履修上の注意

演習テーマは受講者によって異なるが、全員で協力しながら完成度の高い調査と討論を行うことが求められる。春期休業期間中にも、調査等学会発表のための真剣な準備が求められる。この期間に、抄録作成を目的とした合宿または集中的な議論の機会を設ける。

準備学習（予習・復習等）の内容

前回の授業で担当教員や学生の仲間からもらったコメントを生かして次回のレジメを作成するので、そのための復習と予習が不可欠である。また、学会の大会発表抄録を提出することになるので、その推敲を行うことになる。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

受講者の関心に応じて推薦する。

成績評価の方法

テーマ設定、調査の設計、報告：60％、討論での貢献：40％

その他

異文化間教育学会の学生会員として、次年度の大会発表申請を行う。

博士前期課程

主要科目

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習 I C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（教育学）	横 田	雅弘

授業の概要・到達目標

I C では、個人の演習テーマ（修士論文につながるテーマ）に関する文献を読み進むとともに、6 月に開催される異文化間教育学会大会において発表するための調査の補足作業を行い、模擬発表を繰り返して洗練させる。

大会発表後は、そこで得られたコメントなどをもとに、必要に応じて追加調査を実施し、修士論文執筆に備える。

これを通して、修士論文の中核となる調査とその理論的な筋立てを最終的に完成させ、さらにそれを表現する力量、パワーポイントを用いた発表力を鍛える。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：模擬発表 1-1
第3回：模擬発表 1-2
第4回：模擬発表 2-1
第5回：模擬発表 2-2
第6回：模擬発表 2-3
第7回：模擬発表 3-1
第8回：模擬発表 3-2
第9回：模擬発表 3-3
第10回：異文化間教育学会大会での発表
第11回：異文化間教育学会大会発表を踏まえた討論（1）
第12回：異文化間教育学会大会発表を踏まえた討論（2）
第13回：追加調査の計画発表と討論
第14回：包括的な討論

履修上の注意

演習テーマは受講者によって異なるが、全員で協力しながら活発な討論を行うことが求められる。I C 後の夏期休業期間中には、必要に応じて追加調査を実施することが求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

模擬発表を繰り返しながら学会発表での質を高めていくので、指導教員や学生の仲間からもらったコメントを生かすための予習と復習が不可欠である。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

受講者の関心に応じて推薦する。

成績評価の方法

発表の完成度：60%，討論での貢献：40%

その他

6 月に異文化間教育学会大会での発表（口頭発表あるいはポスター発表）が求められる。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習 I D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（教育学）	横 田	雅弘

授業の概要・到達目標

I D では、6 月の異文化間教育学会大会における個人発表ならびに夏期休業期間中の追加調査に基づき、修士論文の最終的な構成を発表し、順次執筆しながら発表を繰り返して完成させる。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：発表と討論（1）
第3回：発表と討論（2）
第4回：発表と討論（3）
第5回：発表と討論（4）
第6回：発表と討論（5）
第7回：発表と討論（6）
第8回：発表と討論（7）
第9回：発表と討論（8）
第10回：発表と討論（9）
第11回：発表と討論（10）
第12回：発表と討論（11）
第13回：修士論文提出
第14回：包括的な討論

履修上の注意

演習テーマは受講者によって異なるが、全員で協力しながら活発な討論を行うことが求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回レジメを準備して発表することになるので、そのための復習と予習が不可欠である。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

受講者の関心に応じて推薦する。

成績評価の方法

発表と修士論文の完成度：70%，討論での貢献：30%

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究	備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習Ⅱ A	
開 講 期	春学期	単 位 演 2
担 当 者	専任教授 山脇 啓造	

授業の概要・到達目標

この演習は、多文化共生社会の担い手として活躍できる人材の育成を目的とする。すなわち、国や自治体、学校、NPO、企業などで、外国人住民にかかわる施策や事業にかかわる者あるいはそうした分野の職業に就くことを目指す者の受講を想定している。多文化共生分野の文献を講読し、討論を重ねることで、多文化共生社会の形成に関する現状と課題に関する理解を深め、国や自治体、学校、NPO、企業などが果たすべき役割を探る。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：問題意識の共有
 第3回：多文化共生分野の文献講読と討論 (1)
 第4回：多文化共生分野の文献講読と討論 (2)
 第5回：多文化共生分野の文献講読と討論 (3)
 第6回：多文化共生分野の文献講読と討論 (4)
 第7回：多文化共生分野の文献講読と討論 (5)
 第8回：多文化共生分野の文献講読と討論 (6)
 第9回：多文化共生分野の文献講読と討論 (7)
 第10回：多文化共生分野の文献講読と討論 (8)
 第11回：多文化共生分野の文献講読と討論 (9)
 第12回：多文化共生分野の文献講読と討論 (10)
 第13回：多文化共生分野の文献講読と討論 (11)
 第14回：包括的な討論

履修上の注意

英語の文献も取り上げるので、相当な英語力が必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、授業の最後に次週までの課題を課す。

教科書

初回のイントロダクション時に指定する。

参考書

適宜指定する。

成績評価の方法

担当文献のレジメと発表（50%）、討論への貢献（50%）

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究	備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習Ⅱ B	
開 講 期	秋学期	単 位 演 2
担 当 者	専任教授 山脇 啓造	

授業の概要・到達目標

この演習は、多文化共生社会の形成に寄与する専門人材を育成することを目的とする。すなわち、外国人受け入れや多文化共生の地域づくりにかかわる自治体や国際交流協会、市民団体、教育機関、企業などのスタッフ（あるいはスタッフをめざす者）が、多文化共生社会の形成に関する現状と課題に対する基本的な理解を深め、課題解決のための具体的方策を探ることを目的とする。

Ⅱ B では、諸外国における多文化共生社会の形成に関する主要文献（日本語および英語）について、毎回、担当受講生がその要旨を発表し、他の受講者と活発な質疑応答を行う。また、学期末までに各受講生がそれぞれ研究テーマと研究計画を定める。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：問題意識の共有
 第3回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論 (1)
 第4回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論 (2)
 第5回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論 (3)
 第6回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論 (4)
 第7回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論 (5)
 第8回：研究テーマと研究計画の相談
 第9回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論 (6)
 第10回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論 (7)
 第11回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論 (8)
 第12回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論 (9)
 第13回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論 (10)
 第14回：研究テーマと研究計画の発表

履修上の注意

英語の文献も取り上げるので、相当な英語力が必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、授業の最後に次週までの課題を課す。

教科書

初回のイントロダクション時に指定する。

参考書

初回授業時に指定。

成績評価の方法

担当文献のレジメと発表（50%）、討論への貢献（50%）

その他

特になし。

博士前期課程**主要科目**

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習ⅡC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 山脇 啓造		

授業の概要・到達目標

この演習は、多文化共生社会の形成に寄与する専門人材を育成することを目的とする。すなわち、外国人受け入れや多文化共生の地域づくりにかかわる自治体や国際交流協会、市民団体、教育機関、企業などのスタッフ（あるいはスタッフをめざす者）が、多文化共生社会の形成に関する現状と課題に対する基本的な理解を深め、課題解決のための具体的方策を探ることを目的とする。

ⅡCでは、各受講生が研究テーマにそって文献講読や調査を進める。各受講生による関連文献の紹介を経て、2回の中間報告を行い、互いに論評を行う。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：問題意識の共有セッション
 第3回：文献紹介（1）
 第4回：文献紹介（2）
 第5回：文献紹介（3）
 第6回：中間報告（1）
 第7回：中間報告（2）
 第8回：中間報告（3）
 第9回：文献紹介（4）
 第10回：文献紹介（5）
 第11回：文献紹介（6）
 第12回：中間報告（4）
 第13回：中間報告（5）
 第14回：総括

履修上の注意

英語の文献も取り上げるので、相当な英語力が必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、授業の最後に次週までの課題を課す。

教科書

初回のイントロダクション時に指定する。

参考書

適宜指定する。

成績評価の方法

担当文献および中間報告のレジメと発表（50%）、討論への貢献（50%）

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習ⅡD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 山脇 啓造		

授業の概要・到達目標

この演習は、多文化共生社会の形成に寄与する専門人材を育成することを目的とする。すなわち、外国人受け入れや多文化共生の地域づくりにかかわる自治体や国際交流協会、市民団体、教育機関、企業などのスタッフ（あるいはスタッフをめざす者）が、多文化共生社会の形成に関する現状と課題に対する基本的な理解を深め、課題解決のための具体的方策を探ることを目的とする。

ⅡDでは、各受講生が研究テーマにそって、論文を完成させる。各受講生が中間報告と最終報告を行うほか、各自の研究の中で、特に他の受講生にも関連する興味深いテーマ（文献、調査等）について、別途、自由報告を行う。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：問題意識の共有セッション
 第3回：自由報告（1）
 第4回：自由報告（2）
 第5回：自由報告（3）
 第6回：中間報告および論文提出（1）
 第7回：中間報告および論文提出（2）
 第8回：中間報告および論文提出（3）
 第9回：自由報告（4）
 第10回：自由報告（5）
 第11回：自由報告（6）
 第12回：最終報告および論文提出（1）
 第13回：最終報告および論文提出（2）
 第14回：総括

履修上の注意

英語の文献も取り上げるので、相当な英語力が必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、授業の最後に次週までの課題を課す。

教科書

初回のイントロダクション時に指定する。

参考書

適宜指定する。

成績評価の方法

報告のレジメと発表（25%）、討論への貢献（25%）、論文（50%）

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習Ⅲ A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	特任教授 博士（教育学） 佐藤 郡衛		

授業の概要・到達目標

前半は修士論文を執筆するために必要なアカデミックスキルの習得を目指す。特に、読解力、要約する力、批判的リーディングなどである。そのため、各学生の研究関心や領域を考慮しつつ、多文化共生・異文化間教育に関する基本的な文献を講読するとともに、批判的な解題ができるようにする。後半は、各自の研究内容に関する先行研究を整理しつつ、自分の研究テーマを絞る。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨソ
- 第2回 各自の修士論文の発表・討論（1）
- 第3回 各自の修士論文の発表・討論（2）
- 第4回 研究課題に即した文献講読と討論（1）
- 第5回 研究課題に即した文献講読と討論（2）
- 第6回 研究課題に即した文献講読と討論（3）
- 第7回 研究課題に即した文献講読と討論（4）
- 第8回 研究課題に即した文献講読と討論（5）
- 第9回 研究課題に即した文献講読と討論（6）
- 第10回 研究課題に即した文献講読と討論（7）
- 第11回 研究課題に即した文献講読と討論（8）
- 第12回 研究課題に即した文献講読と討論（9）
- 第13回 研究課題に即した文献講読と討論（10）
- 第14回 まとめと次学期の課題の確認

履修上の注意

毎回、レジュメをきって報告すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

報告の内容について事前に十分に準備すること。また、討論した内容を次の報告に活かすようにすること。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

授業時にテーマに基づいて推薦する。

成績評価の方法

発表内容と討論の内容で評価する。

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習Ⅲ B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	特任教授 博士（教育学） 佐藤 郡衛		

授業の概要・到達目標

各自の先行研究の整理・分析を通して研究課題を焦点化できるようにする。その研究課題を解決するために必要な調査やフィールドワーク、資料収集などの方法について学習する。特に、質問紙調査などの量的な調査法、質的な調査法の中のエスノグラフィー、ライフストーリー、面接調査法などである。その際、形式的な学習にならないように、その方法が使われている文献を講読する、あるいは実際にケーススタディを行うことで、実際に使える方法を修得する。

授業内容

- 第1回 調査方法に関する文献講読と討論（調査方法全体）
- 第2回 調査方法に関する文献講読と討論（質問紙調査と統計的手法）（1）
- 第3回 調査方法に関する文献講読と討論（質問紙調査と統計的手法）（2）
- 第4回 調査方法に関する文献講読と討論（統計的手法と質的方法との統合）
- 第5回 調査方法に関する文献講読と討論（質的方法全体）
- 第6回 調査方法に関する文献講読と討論（エスノグラフィー）（1）
- 第7回 調査方法に関する文献講読と討論（エスノグラフィー）（2）
- 第8回 調査方法に関する文献講読と討論（エスノグラフィー）（3）
- 第9回 調査方法に関する文献講読と討論（ライフストーリー）（1）
- 第10回 調査方法に関する文献講読と討論（ライフストーリー）（2）
- 第11回 調査方法に関する文献講読と討論（ライフストーリー）（3）
- 第12回 調査方法に関する文献講読と討論（面接法）（1）
- 第13回 調査方法に関する文献講読と討論（面接法）（2）
- 第14回 まとめと次学期の課題の確認

履修上の注意

毎回、レジュメをきって報告すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

報告の内容について事前に十分に準備すること。また、討論した内容を次の報告に活かすようにすること。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

授業時にテーマに基づいて推薦する。

成績評価の方法

発表内容と討論の内容で評価する。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習Ⅲ C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	特任教授 博士（教育学） 佐藤 郡衛		

授業の概要・到達目標

1年生までの学修を踏まえて、修士論文のテーマとリサーチクエストを明確にする。特に、検証可能なリサーチクエストを設定し、それを解明するための方法も合わせて明確にする。その上で、具体的方法に基づき、フィールドワークや調査を行い、エビデンスになるデータを収集する。収集したデータを適切な方法で分析し、その結果から予備的な考察を行う。

授業内容

第1回 修士論文の計画・全体構成（1）
第2回 修士論文の計画・全体構成（2）
第3回 修士論文のテーマとリサーチクエスト（1）
第4回 修士論文のテーマとリサーチクエスト（2）
第5回 調査の企画・設計（1）
第6回 調査の企画・設計（2）
第7回 調査の実施報告・討論（1）
第8回 調査の実施報告・討論（2）
第9回 調査結果の分析方法
第10回 調査結果の報告（1）
第11回 調査結果の報告（2）
第12回 予備的な考察・討論（1）
第13回 予備的な考察・討論（2）
第14回 論文の全体構成の再検討

履修上の注意

毎回、レジュメをきって報告すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

報告の内容について事前に十分に準備すること。また、討論した内容を次の報告に活かすようにすること。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

授業時にテーマに基づいて推薦する。

成績評価の方法

発表内容と討論の内容で評価する。

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育演習Ⅲ D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	特任教授 博士（教育学） 佐藤 郡衛		

授業の概要・到達目標

修士論文の完成を目指す。そのために、研究課題、理論的枠組み、研究方法、分析方法、考察について論理的一貫性を持つようにする。つまり、研究課題が明確であること、課題を解明するための理論的枠組みが妥当であること、適切な研究方法がとられていること、分析方法が妥当であり、かつ考察がデータに基づき明快かなどである。各自、定期的に修士論文の進捗状況を報告し、執筆している中で生じた問題を報告し、解決できるようにする。

授業内容

第1回 修士論文の執筆内容の検討（1）
第2回 修士論文の執筆内容の検討（2）
第3回 修士論文の執筆内容の検討（3）
第4回 修士論文の執筆内容の検討（4）
第5回 修士論文の執筆内容の検討（5）
第6回 中間まとめの論文提出（1）
第7回 中間まとめの論文提出（2）
第8回 修士論文の執筆内容の検討（6）
第9回 修士論文の執筆内容の検討（7）
第10回 修士論文の執筆内容の検討（8）
第11回 修士論文の執筆内容の検討（9）
第12回 最終報告と論文提出（1）
第13回 最終報告と論文提出（2）
第14回 修士論文の振り返り

履修上の注意

毎回、レジュメをきって報告すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

報告の内容について事前に十分に準備すること。また、討論した内容を次の報告に活かすようにすること。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

授業時にテーマに基づいて推薦する。

成績評価の方法

発表内容と討論の内容で評価する。

その他

特になし。

日本語学・日本語教育学研究	備 考	
科 目 名	日本語学演習ⅠA	
開 講 期	春学期	単 位 演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語学の研究は、一般的な言語学の枠組によりながら、日本社会に特有な日本語の問題を的確に見定め、それにふさわしい研究方法を用いて、取り組んでいく必要があります。日本語学演習ⅠA～ⅠDでは、その日本語学の基本的な研究能力を、研究の実践を通して養っていくことを目指します。

まず、日本語学演習ⅠAでは、日本語学の主要な研究領域である、音韻、文字、語彙、文法、文章・文体、言語生活の6つについて、代表的な論文を講読することで、日本語学研究の論点ごとに議論の仕方を身に付けることを狙いとしています。

授業内容

- 第1回：日本語学とは何か
 第2回：音韻（1）
 第3回：音韻（2）
 第4回：文字（1）
 第5回：文字（2）
 第6回：語彙（1）
 第7回：語彙（2）
 第8回：文法（1）
 第9回：文法（2）
 第10回：文章・文体（1）
 第11回：文章・文体（2）
 第12回：言語生活（1）
 第13回：言語生活（2）
 第14回：この授業のまとめ

履修上の注意

論文を読んでその内容を理解するだけでなく、批判的に読むことで、研究の論点や方法を身に付けることが必要です。そのためには、精読と議論への積極的な参加が求められます。

準備学習（予習・復習等）の内容

指定する論文を精読することのほか、関連する論文を積極的に読むようにしてください。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

成績評価の方法

授業時の取り組み（50％）と、レポート（50％）によって評価します。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

日本語学・日本語教育学研究	備 考	
科 目 名	日本語学演習ⅠB	
開 講 期	秋学期	単 位 演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語学の研究は、単に現代の日本語をそのまま見るだけではなく、それが歴史の流れの中でどのようにして形成されてきたのか、という歴史的視点を持つことも重要です。日本語学演習ⅠBでは、日本語の歴史を研究する方法を身に付けることを狙いとしています。

授業内容

- 第1回：日本語史をどう研究するか
 第2回：日本語史の研究資料とコーパス
 第3回：奈良時代語の研究
 第4回：平安時代語の研究（1）
 第5回：平安時代語の研究（2）
 第6回：鎌倉時代語の研究（1）
 第7回：鎌倉時代語の研究（2）
 第8回：室町時代語の研究（1）
 第9回：室町時代語の研究（2）
 第10回：江戸時代語の研究（1）
 第11回：江戸時代語の研究（2）
 第12回：明治時代語の研究（1）
 第13回：明治時代語の研究（2）
 第14回：日本語史研究の総括

履修上の注意

各時代の資料を実際に使って、その使い方を習得してください。

準備学習（予習・復習等）の内容

資料には、国立国語研究所編『日本語歴史コーパス』と、各種文献を使います。それらの扱いに習熟するための、予習・復習が必要になります。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

成績評価の方法

授業時の取り組み（50％）と、レポート（50％）によって評価します。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

博士前期課程**主要科目**

日本語学・日本語教育学研究	備 考	
科 目 名	日本語学演習 I C	
開 講 期	春学期	単 位 演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語学の研究を、実際の社会に役立てていくには、社会的な視点で日本語の使われ方を観察していくことが不可欠です。日本社会において、言葉が重要な役割を果たしているいくつかの現場を分析することを通して、日本語と日本社会の関わりについて考察していきます。具体的には、新聞やテレビなどの報道の言葉の分析、医師や法律家などの専門家の言葉の分析を実践して、言葉の使い方のどこに問題があるのか、その問題を改善するにはどうすればよいのかを研究し、よりよい日本語のあり方を探っていきます。

授業内容

第1回：現代社会における日本語
 第2回：社会言語学の考え方
 第3回：漢字政策を検証する
 第4回：語彙調査を実施する
 第5回：外来語はどうして増えるのか
 第6回：外来語を言い換える
 第7回：専門家の説明をチェックする
 第8回：マスコミの言葉を批判する
 第9回：話し言葉を分析する
 第10回：コミュニケーション不全を考える
 第11回：言葉の世代差を分析する
 第12回：社会問題を解決する言葉の研究
 第13回：公共の日本語を設計する
 第14回：日本語と日本社会の将来

履修上の注意

社会にひそむ言葉の問題を見出す授業です。社会と言葉の関係に関心を持ってください。

準備学習（予習・復習等）の内容

国や研究機関が行っている言語調査とその背景について、よく理解してください。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

成績評価の方法

授業時の取り組み（50％）と、レポート（50％）によって評価します。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

日本語学・日本語教育学研究	備 考	
科 目 名	日本語学演習 I D	
開 講 期	秋学期	単 位 演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語学の論文をまとめていくための、実際的な研究を行っていきます。受講者の研究テーマに即して、論文執筆のための、(1) 文献レビュー、(2) 調査の企画と実施、(3) データ分析法、(4) 論の構成法などといった、多角的な視点から研究を実践します。その研究の過程を発表し合い、討議を重ねていきます。

授業内容

第1回：日本語学の研究文献の収集とレビューの方法
 第2回：文献レビューを実践する
 第3回：問題を設定する
 第4回：調査を企画する
 第5回：調査を実施する
 第6回：調査データを集計し分析する
 第7回：論理を展開する
 第8回：研究実践報告（1）
 第9回：研究実践報告（2）
 第10回：研究実践報告（3）
 第11回：研究実践報告（4）
 第12回：論文のまとめ方
 第13回：論文に基づくプレゼンテーション
 第14回：日本語学研究の総括

履修上の注意

受講者は具体的な研究テーマをひとつ持つ必要があります。

準備学習（予習・復習等）の内容

自らの研究を論文にまとめるために、日々の積み重ねを大事にしてください。

教科書

使用しません。

参考書

その都度指示します。

成績評価の方法

授業時の取り組み（50％）とレポート（50％）によって評価します。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

日本語学・日本語教育学研究		備 考	
科 目 名	日本語教育学演習 I A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 姫野 伴子		

授業の概要・到達目標

本演習では、履修者の関心に従って研究テーマを設定し、研究計画を策定し、先行研究の収集・検討を行った上で、各自が行うパイロットスタディの研究計画を決定する。

到達目標は、(1) 適切な研究テーマが設定できること、(2) 先行研究を収集し、自らの研究の課題を明確に認識すること、(3) 適切なパイロットスタディの計画が策定できることである。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：研究テーマの設定 (1)
 第3回：研究テーマの設定 (2)
 第4回：研究計画概要の策定
 第5回：先行研究論文調査と文献リストの作成
 第6回：先行研究論文の講読と討論 (1)
 第7回：先行研究論文の講読と討論 (2)
 第8回：先行研究論文の講読と討論 (3)
 第9回：先行研究論文の講読と討論 (4)
 第10回：研究テーマの修正と研究方法の決定 (1)
 第11回：研究テーマの修正と研究方法の決定 (2)
 第12回：パイロットスタディ計画の策定 (1)
 第13回：パイロットスタディ計画の策定 (2)
 第14回：論文構想の発表

履修上の注意

授業では、参加者相互の討論によって理解を深めることを目指すので、積極的・主体的に授業に参加してもらいたい。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習としては、研究テーマの設定や研究方法の策定など、次回授業の課題について自らの考えを整理し、提示できるように準備しておくこと。復習としては、授業で教員・履修者から得られたコメントを踏まえて、テーマや方法を修正し、洗練していくこと。

教科書

使用しない。

参考書

使用しない。

成績評価の方法

授業への参加度（発表と発言）およびレポートによって総合的に評価する（授業への参加度60％，レポート40％）。

その他

特になし。

日本語学・日本語教育学研究		備 考	
科 目 名	日本語教育学演習 I B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 姫野 伴子		

授業の概要・到達目標

本演習では、履修者が設定した研究テーマについて行ったパイロットスタディの結果を発表して、履修者間で討論し、明らかになった問題点を踏まえて研究計画を修正するとともに、本調査の実施計画を策定する。

到達目標は、(1) パイロットスタディの結果をわかりやすく整理して発表できること、(2) パイロットスタディの問題点を認識して、研究計画を修正すること、(3) 適切な本調査の実施計画が策定できることである。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：パイロットスタディ結果の報告と討論 (1)
 第3回：パイロットスタディ結果の報告と討論 (2)
 第4回：パイロットスタディ結果の報告と討論 (3)
 第5回：パイロットスタディ結果の報告と討論 (4)
 第6回：研究計画概要の修正 (1)
 第7回：研究計画概要の修正 (2)
 第8回：研究計画概要の修正 (3)
 第9回：研究計画概要の修正 (4)
 第10回：本調査の実施計画策定 (1)
 第11回：本調査の実施計画策定 (2)
 第12回：本調査の実施計画策定 (3)
 第13回：本調査の実施計画策定 (4)
 第14回：発表と総括

履修上の注意

授業では、参加者相互の討論によって、理解を深めることを目指すので、積極的・主体的に授業に参加してもらいたい。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習としては、結果の発表や研究計画の修正など、次回授業の課題について自らの考えを整理し、提示できるように準備しておくこと。復習としては、授業で教員・履修者から得られたコメントを踏まえて、計画や方法を修正し、洗練していくこと。

教科書

使用しない。

参考書

使用しない。

成績評価の方法

授業への参加度（発表と発言）およびレポートによって総合的に評価する（授業への参加度60％，レポート40％）。

その他

特になし。

博士前期課程**主要科目**

日本語学・日本語教育学研究		備 考	
科 目 名	日本語教育学演習 I C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 姫野 伴子		

授業の概要・到達目標

本演習では、履修者が設定した研究テーマについて行った本調査の結果を発表して、履修者間で討論し、分析の視点を検討した上で、本調査結果の分析・解釈を進める。

到達目標は、(1) 本調査の結果をわかりやすく整理して発表できること、(2) 本調査の分析視点を明確にすること、(3) 本調査の結果を適切に分析・解釈できることである。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：本調査結果の報告と討論 (1)
 第3回：本調査結果の報告と討論 (2)
 第4回：本調査結果の報告と討論 (3)
 第5回：本調査結果の報告と討論 (4)
 第6回：分析視点の検討 (1)
 第7回：分析視点の検討 (2)
 第8回：分析視点の検討 (3)
 第9回：分析視点の検討 (4)
 第10回：本調査結果の分析と解釈 (1)
 第11回：本調査結果の分析と解釈 (2)
 第12回：本調査結果の分析と解釈 (3)
 第13回：本調査結果の分析と解釈 (4)
 第14回：発表と総括

履修上の注意

授業では、参加者相互の討論によって理解を深めることを目指すので、積極的・主体的に授業に参加してもらいたい。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習としては、わかりやすく結果の発表ができるように準備しておくこと、分析視点など次回授業の課題について自らの考えを整理し、提示できるようにしておくこと。復習としては、授業で教員・履修者から得られたコメントを踏まえて、分析・解釈を進め、執筆していくこと。

教科書

使用しない。

参考書

使用しない。

成績評価の方法

授業への参加度（発表と発言）およびレポートによって総合的に評価する（授業への参加度60％，レポート40％）。

その他

特になし。

日本語学・日本語教育学研究		備 考	
科 目 名	日本語教育学演習 I D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 姫野 伴子		

授業の概要・到達目標

本演習では、履修者が設定した研究テーマについて行った調査の結果について、分析・解釈の妥当性を検討し、論文の構成の検討論文構成を決定して、論文を執筆し、発表する。

到達目標は、(1) 調査結果の妥当な分析・解釈ができること、(2) 論文を論理的に構成できること、(3) 論文内容をわかりやすく発表できることである。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：本調査結果の分析・解釈の妥当性の検討 (1)
 第3回：本調査結果の分析・解釈の妥当性の検討 (2)
 第4回：論文の構成の検討 (1)
 第5回：論文の構成の検討 (2)
 第6回：序論の執筆
 第7回：本論の執筆 (1)
 第8回：本論の執筆 (2)
 第9回：本論の執筆 (3)
 第10回：結論の執筆
 第11回：全体の修正
 第12回：論文発表 (1)
 第13回：論文発表 (2)
 第14回：総括

履修上の注意

授業では、参加者相互の討論によって理解を深めることを目指すので、積極的・主体的に授業に参加してもらいたい。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習としては、分析・解釈の妥当性など次回授業の課題について自らの考えを整理し、提示できるようにしておくこと。復習としては、授業で教員・履修者から得られたコメントを踏まえて、論文執筆を進めていくこと。

教科書

使用しない。

参考書

使用しない。

成績評価の方法

授業への参加度（発表と発言）およびレポートによって総合的に評価する（授業への参加度60％，レポート40％）。

その他

特になし。

日本語学・日本語教育学研究		備 考	
科 目 名	日本語教育学演習Ⅱ A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任准教授 博士（学術） 小森 和子		

授業の概要・到達目標

第二言語としての日本語の語彙習得に関する実証研究の成果を読み、これまでどのような観点から、どのような方法で研究されてきたかを整理し、今後どのような研究が期待されるかを考える。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：日本語の語彙（1）
 第3回：日本語の語彙（2）
 第4回：複合動詞の定義、複合動詞の習得（1）
 第5回：複合動詞の習得（2）
 第6回：和製英語の定義、外来語・和製英語の習得（1）
 第7回：外来語・和製英語の習得（2）
 第8回：漢語の種類、漢語の習得（1）
 第9回：漢語の習得（2）
 第10回：語種の諸相、漢語と和語の習得（1）
 第11回：漢語と和語の習得（2）
 第12回：オノマトペの分類、音象徴性・オノマトペの習得
 第13回：複合辞の習得
 第14回：連語の分類、連語の習得

履修上の注意

授業では実証研究の論文等を講読するが、実証研究の背景となる言語理論の枠組みを深く理解するために、追加で文献講読を課す予定である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎週課題を課すので、指示に従うように。

教科書

特に指定しない。

参考書

『研究社 日本語教育事典』近藤安月子・小森和子（編）（研究社、2012）

成績評価の方法

課題（40％）、授業参加度（20％）、レポート（40％）

その他

特になし。

日本語学・日本語教育学研究		備 考	
科 目 名	日本語教育学演習Ⅱ B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任准教授 博士（学術） 小森 和子		

授業の概要・到達目標

第二言語の語彙習得に関する、(1) テストを用いた研究、(2) 実験研究、および(3) コーパス研究を取り上げ、文献講読と討論を行いながら、(a) 言語習熟度による違い、(b) 第一言語の影響、(c) 習得や記憶に及ぼす要因、(d) 理解と産出の違い等について考える。受講生はそれぞれ研究課題を絞り、先行研究のリストアップとレビューの作成が求められる。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：語彙知識の量的側面と文章理解との関係（1）
 第3回：語彙知識の量的側面と文章理解との関係（2）
 第4回：語彙知識の質的側面と文章理解との関係（1）
 第5回：語彙知識の質的側面と文章理解との関係（2）
 第6回：第二言語の習得に及ぼす第一言語の知識（1）
 第7回：第二言語の習得に及ぼす第一言語の知識（2）
 第8回：修士論文に関する先行研究レビュー
 第9回：コーパスを用いた第二言語の語彙習得研究（1）
 第10回：コーパスを用いた第二言語の語彙習得研究（2）
 第11回：コーパスを用いた第二言語の語彙習得研究（3）
 第12回：言語テスト理論に基づく第二言語の語彙習得研究（1）
 第13回：言語テスト理論に基づく第二言語の語彙習得研究（2）
 第14回：修士論文の調査概要の発表

履修上の注意

授業では実証研究の論文等を講読するが、並行して、各自の修士論文の研究テーマを決定し、調査概要を作成することが求められる。学期末には、先行研究レビュー、研究課題、調査方法等について、詳細な報告が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎週課題を課すので、指示に従うように。

教科書

特に指定しない。

参考書

『研究社 日本語教育事典』近藤安月子・小森和子（編）（研究社、2012）

『日本語教育のためのコーパス調査入門』李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子（くろしお出版、2012）

成績評価の方法

課題（50％）、レポート（40％）、授業参加度（10％）

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

日本語学・日本語教育学研究		備 考	
科 目 名	日本語教育学演習ⅡC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任准教授 博士（学術） 小森 和子		

授業の概要・到達目標

様々な統計処理を用いた第二言語としての日本語の語彙習得研究の実証研究の論文を講読しながら、語彙習得研究の研究課題に即した適切な調査方法と分析方法は何かを学ぶ。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：変数の種類，記述統計
第3回：t検定を用いた実証研究
第4回：一元配置の分散分析を用いた実証研究
第5回：二元配置の分散分析を用いた実証研究（1）
第6回：二元配置の分散分析を用いた実証研究（2）
第7回：二元配置の分散分析を用いた実証研究（3）
第8回：相関関係と因果関係
第9回：回帰分析と重回帰分析を用いた実証研究
第10回：カイ二乗分析を用いたコーパス研究
第11回：多変量解析を用いたコーパス研究
第12回：エントロピー・冗長度を用いたコーパス研究
第13回：因子分析を用いた実証研究
第14回：第二言語習得研究における反証可能性の検証方法

履修上の注意

本演習は、実証的な研究論文を読み、その中で使われている統計手法について確認する。授業で扱う統計手法に関しては、必要に応じて解説を行うが、ある程度の予備知識が必要である。受講に際しては、各自統計の基礎的な知識を得ておくこと。また、本演習は日本語教育学演習ⅡA、ⅡBを履修していることが条件である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎週課題を課すので、指示に従うように。

教科書

特に指定しない。

参考書

『言語研究のための統計入門』石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠（編）（くろしお出版，2010）
『認知言語学研究の方法』辻幸夫（監修），中本敬子・李在鎬（編）（ひつじ書房，2011）
『言語テストの基礎知識』J. D. ブラウン，和田稔訳（大修館書店，1999）

成績評価の方法

課題（50%），レポート（40%），授業参加度（10%）

その他

特になし。

日本語学・日本語教育学研究		備 考	
科 目 名	日本語教育学演習ⅡD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任准教授 博士（学術） 小森 和子		

授業の概要・到達目標

受講生が各自収集したデータを扱いながら，研究課題（あるいは，仮説）に即した分析方法を吟味し，考察方法を検討する。また，自らの研究を，（1）新規性，（2）論理性，（3）客観性，（4）反証可能性，（5）再現性等の観点から評価し，それを論文に記述する方法を学びながら，修士論文の完成を目指す。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：修士論文の目次作成の手順
第3回：先行研究レビュー
第4回：先行研究の知見と研究課題の整合性
第5回：研究の意義性と新規性（1）
第6回：研究課題と調査方法の整合性
第7回：操作的定義の方法
第8回：実証研究における統制群，統制条件，中立条件
第9回：反証可能性と調査方法の整合性
第10回：APAによる図表の記述方法
第11回：調査結果の論述方法
第12回：考察の妥当性の検証
第13回：研究の意義性と新規性（2）
第14回：参考文献，要旨の示し方

履修上の注意

本演習は，受講生のそれぞれの修士論文の進捗状況も考慮しながら進めていく。また，本演習は日本語教育学演習ⅡA，ⅡB，ⅡCを履修していることが条件である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎週課題を課すので，指示に従うように。

教科書

特に指定しない。

参考書

必要に応じて，指示する。

成績評価の方法

課題（50%），レポート（40%），授業参加度（10%）

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	英語教育学演習 I A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 Ph.D.		尾関 直子

授業の概要・到達目標

Task-Based Instruction (タスクを取り入れた指導法) と第二言語習得理論との関連を検証する。

教師主導、文法中心の英語教育に代わるものとして、1980年代に登場した Task-Based Instruction (TBI, タスクを取り入れた指導法) は、第2言語習得理論においても、カリキュラム・デベロップメントにおいても、 TESTING の分野においても普及しつつある。日本の初等中等英語教育では、授業においてタスクが使われることはあるが、そのほとんどは、従来の授業の最後におまけの言語活動として使用されることが多く、指導の中心として使用されることは少ない。本演習では、言語使用の目的を作り、言語学習に有益で自然な環境を作りだす TBI の理論と実践を学ぶ。

授業内容

- 第1回: Explanation about the syllabus
- 第2回: Why TBLT?
- 第3回: SLA and the Fundamental LT Divide
- 第4回: Psycholinguistic Underpinnings: A Cognitive-Interactionist Theory of Instructed Second Language Acquisition
- 第5回: Philosophical Underpinnings: *L'education Inter-grale*
- 第6回: Task-Based Needs and Means Analysis
- 第7回: Identifying Target Tasks
- 第8回: Analyzing Target Discourse
- 第9回: Task-Based Syllabus Design
- 第10回: Task-Based Materials
- 第11回: Methodological Principles and Pedagogic Procedures
- 第12回: Task-Based Assessment and Program Evaluation
- 第13回: The Road Ahead
- 第14回: Review

履修上の注意

Only English is used in class.

準備学習 (予習・復習等) の内容

It will be useful if you read books that deal with 'task-based instruction'.

教科書

Textbooks will be announced in class.

参考書

使用しない。

成績評価の方法

- Class Participation 30%
- Journal Writing 30%
- Presentation (task-based instruction) 40%

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	英語教育学演習 I B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 Ph.D.		尾関 直子

授業の概要・到達目標

個人差要因のなかでも学習者の自律への足掛かりとなるメタ認知を重視した学習ストラテジー指導の理論と実践を研究する。

教師主導から学生主導の授業へ、学習成果から学習経過へ興味に移るにつれて、学習者が第2言語習得を促進するために使用する学習ストラテジーが注目されている。学習ストラテジーとは、新しい情報を理解し、学習し、記憶するために個人が使用する思考プロセスもしくは、行動であると一般的に定義されている。近年、この学習ストラテジーの定義そのものを疑問視する研究者も現れている。しかし、学習ストラテジーの中で、学習の目標を設定し、計画を立て、問題があれば問題を解決し、学習結果を自己評価するメタ認知ストラテジーの重要性は、自律した学習者を育てるために必要不可欠なストラテジーである。授業では、学習ストラテジーを理解し、学習ストラテジー指導を取り入れた英語教育をどのように実施していくかについて研究する。

授業内容

- 第1回: シラバスに関する説明 (授業の目標、概要、授業の進め方、課題の説明など)
- 第2回: (Macaro) The learner's strategies and the teacher's strategies— (マカロの本) 学習者のストラテジーと教師のストラテジー
- 第3回: (Macaro) Investigating the learners in our classrooms: Acquiring the tools of the trade—教室での学習者を調査する: 学習のためのツール
- 第4回: (Macaro) Studies which describe strategy use—学習ストラテジーの使用を描写する研究
- 第5回: (Macaro) Intervention studies—介入研究
- 第6回: (Macaro) An intervention study in detail—詳細な介入研究
- 第7回: (Macaro) Learner training in language classrooms—教室における学習ストラテジー指導
- 第8回: (Macaro) Following up learner training—学習ストラテジー指導のフォローアップ
- 第9回: 学習ストラテジーについて知っておきたいこと: 学習方法、メタ認知ストラテジーの働き
- 第10回: 学習ストラテジーを指導すれば、生徒が変わる: 生きる力と学習ストラテジー、学習ストラテジーとメタ認知
- 第11回: 授業で学習ストラテジーをどう指導するか: 学習ストラテジーとタスク中心の授業、5つのステップを基本とした学習ストラテジー指導
- 第12回: 指導した学習ストラテジーをどう評価するか: 目的、真正の評価、ポートフォリオを使用した評価
- 第13回: 中学用レッスンプラン
- 第14回: 高校用レッスンプラン

履修上の注意

授業では、ディスカッションを頻繁に行うので、課題であるテキストを必ず読んでから授業に臨むこと。

準備学習 (予習・復習等) の内容

You had better books related with 'language learning strategies'.

教科書

Language learning strategies: Thirty years of research and practice. Cohen, A. D., & Macaro, E. (2007). (Oxford, England: Oxford University.)

『英語教師のための学習ストラテジーハンドブック』大学英語教育学会学習ストラテジー研究会 (東京: 大修館書店, 2006)

参考書

Textbooks will be announced in class.

成績評価の方法

- Classroom Participation 30%
- Journal Writing 30%
- Presentation 40%

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	英語教育学演習 I C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 Ph.D. 尾関 直子		

授業の概要・到達目標

言語教育を考えるには2つの見方がある。1つは、言語教育をカリキュラム、指導法、教材、テクニックなど、外的要因から考える方法である。この方法は、教師が授業指導案などを考えるときに役立つ。もう1つは、教室の中で教師が英語を指導するときに、どのようなインタラクティブが行われるのか指導のプロセスに注目する方法である。この授業では、そのようなプロセスに注目して、近年の言語教育に関する研究をどのように授業に生かすのか、どのように教室内で研究を行っていけばいいのかについて考える。

授業内容

- 第1回：シラバスに関する説明（授業の目標、概要、授業の進め方、課題の説明など）
- 第2回：Introduction: Developments in language teaching research
- 第3回：Methods for researching the second language classroom, Part 1
- 第4回：Methods for researching the second language classroom, Part 2
- 第5回：Comparative method studies
- 第6回：Second language classroom discourse, Part 1
- 第7回：Second language classroom discourse, Part 2
- 第8回：Focus on the teacher, Part 1
- 第9回：Focus on the teacher, Part 2
- 第10回：Focus on the learner, Part 1
- 第11回：Focus on the learner, Part 2
- 第12回：Investigating the performance of tasks, Part 1
- 第13回：Investigating the performance of tasks, Part 2
- 第14回：Interaction and L2 learning in the class

履修上の注意

Only English is used in class.

準備学習（予習・復習等）の内容

It is better to read books related to second language acquisition.

教科書

Textbooks will be announced in class.

参考書

Learning strategies in second language acquisition. O'Malley, J. M., & Chamot, A. U. (1990). (Cambridge, England: Cambridge University.)

成績評価の方法

Classroom Participation 30%
Journal Writing 30%
Presentation 40%

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	英語教育学演習 I D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 Ph.D. 尾関 直子		

授業の概要・到達目標

学習者の自律についての研究には、認知心理学的アプローチと社会・文化的アプローチの2つの枠組みがあるが、この演習では、主に社会・文化的アプローチに関して考察する。
日本の教育課程の根幹を定める学校教育法が平成19年に一部改正され、初めて「生涯学習」を推奨する項目が小学校第三十条に入った。そこには、「前項においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うこと」に、特に意をもちいなければならない」と書かれている。この教育法一文は、まさに自律した学習者とは何か、どうして自律した学習者を育てていくべきなのかを的確に表している。本演習では、自律した学習者とは何かを解明し、どのようにして学習者の自律性を育てればよいかについて、社会・文化的アプローチを中心に考察する。

授業内容

- 第1回：Explanation about the syllabus—シラバスに関する説明（授業の目標、概要、授業の進め方、課題の説明など）
- 第2回：The history of autonomy in language learning: Origins of the concept, Autonomy and self-access, Autonomy and learner training, Autonomy and individualization, Autonomy and interdependence—言語学習における「自律」の概念の歴史：自律の概念の起源、自律とセルフアクセス、自律と学習者トレーニング、自律と個人化、自律と相互依存
- 第3回：Autonomy beyond the field of language education: Educational reform, Adult education, The psychology of learning, Political philosophy—言語教育分野を超えた「自律」：教育改革、成人教育、学習のための心理学、政治哲学
- 第4回：Defining and describing autonomy: Levels of control, Measuring autonomy, Autonomy and culture—自律を定義し、描写する：コントロールのレベル、自律を測る、自律と文化
- 第5回：Control as a natural attribute of learning: Self-management in learning, Learner agendas in the classroom, Control of psychological factors influencing learning—学習の自然な属性としてのコントロール：学習における自己管理、教室における学習者のアジェンダ、学習に影響する心理要因のコントロール
- 第6回：Levels of control: Control over learning management, Control over cognitive processes, Control over learning content—コントロールのレベル：学習環境に対するコントロール、認知プロセスに対するコントロール、学習内容に対するコントロール
- 第7回：Fostering autonomy, Resource-based approaches: Self-access, Self-instruction and distance learning, The effectiveness of resource-based learning—自律を育てる、リソースに基づいたアプローチ：セルフアクセス、自己教授と遠距離学習、リソースに基づいた学習の効果
- 第8回：Technology-based approaches, Learner-based approaches: Computer-assisted language learning, The Internet, The effectiveness of technology-based approaches—テクノロジーに基づいたアプローチ、学習者に基づいたアプローチ：CALL、インターネット、テクノロジーに基づいたアプローチの効果
- 第9回：Classroom-based approaches, Curriculum-based approaches, Teacher-based approaches—授業に基づいたアプローチ、カリキュラムに基づいたアプローチ、教師に基づいたアプローチ
- 第10回：Research methods and key areas of research: Action research, Key areas of research—研究方法と研究の重要な領域：アクションリサーチ、研究の重要な領域
- 第11回：Case studies: ethnicity and attitudes towards autonomy, out-of-class learning, reflection—ケーススタディ：民族性と自律に対する態度、授業外での学習、内省
- 第12回：Self-regulation and learning, Rationale and goals—自己調整学習、その理念と目標
- 第13回：Developing time planning and management skills—時間のプランニングと管理のスキル
- 第14回：Developing text comprehension and summarization skills—テキスト理解と要約するスキルの発展

履修上の注意

授業では、ディスカッションを頻繁に行うので、課題であるテキストを必ず読んでから授業に臨むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

none

教科書

Teaching and researching autonomy in language learning. Benson, P. (2011). (Essex, England: Pearson Education.)
Motivation and Self-Regulated Learning: Theory, Research, and Applications. Shunk, D. H., & Zimmerman, B. J. (2007). (New York: Lawrence Erlbaum Associates.)

参考書

『成長する英語学習者：学習者要因と自律学習』小嶋英夫、尾関直子、他（東京：大修館書店、2010）

成績評価の方法

Classroom Participation 30%
Journal Writing 30%
Presentation 40%

その他

特になし。

英語教育学研究		備考	
科目名	英語教育学演習Ⅱ A		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D. (Linguistics) 大須賀 直子		

授業の概要・到達目標

本演習のテーマは「Cross-cultural pragmatics」である。文化的違いによる語用論的特徴の理解を目標とする。

Pragmatics（語用論）は、ことばの「言語使用の中の意味」や「文脈の中での意味」を研究対象とする学問だが、本授業では異文化間の語用比較に重点を置く。授業の流れとしては、まず語用論を理解する上で重要な理論を概観し、つづいて、比較文化語用論や異文化間語用論について、事例研究や実証研究の論文を読みながら理解を深めていく。最終的には、受講生がリサーチをデザインして調査を実行し、結果を分析してプレゼンテーションをおこなう。

授業内容

第1回：導入（授業の概要・進め方等の説明、主要概念についての説明）

第2回：理論的背景（1）スピーチアクト

第3回：理論的背景（2）協調の原則

第4回：理論的背景（3）ポライトネス

第5回：理論的背景（4）研究方法

第6回：日本語と英語の謝罪

第7回：誉めに対する返答：イギリス人と中国人

第8回：語用論的転移

第9回：ドイツ人と中国人の会話における交渉

第10回：日本人とアメリカ人の職場におけるインタラクション

第11回：イギリスに出張した中国人のフェース

第12回：語用論研究におけるデータ収集

第13回：学生によるプレゼンテーション（1）

第14回：学生によるプレゼンテーション（2）

履修上の注意

授業内での議論に積極的に参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の英語文献は必ず事前に読んでくること。関連文献を積極的に読むこと。

教科書

『Culturally Speaking Culture, Communication and Politeness Theory』Helen Spencer-Oatey (Continuum)

参考書

授業内で適宜指示する。

成績評価の方法

授業参加度、発表、レポート等によって総合的に評価する。

その他

特になし。

英語教育学研究		備考	
科目名	英語教育学演習Ⅱ B		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D. (Linguistics) 大須賀 直子		

授業の概要・到達目標

本演習は、語用論的知識の指導をテーマとする。英語授業でいかに語用論的知識の指導をするかを理解することを目標とする。

本授業のテーマは語用論の指導である。国際化が進み、異文化コミュニケーションが身近となった現代においては、英語学習者にとって、文法能力ばかりではなく、場面に即して適切な言い方ができる語用論的能力を身につけることが重要である。英語教育の立場からは、語用論的能力を伸ばすための指導はどのようにおこなえばいいのだろうか。本授業では、語用指導の理論的側面から、実践的な教室での指導方法に至るまで、幅広く取り上げていく。最終的には、受講生が語用指導を取り入れた指導案を作成し、模擬授業をおこなう。

授業内容

第1回：Coming to terms with pragmatics

第2回：Teachers' pragmatics: knowledge, beliefs, and practice

第3回：Collecting data reflecting the pragmatic use of language

第4回：Describing speech acts: linking research and pedagogy

第5回：Learners' pragmatics: potential causes of divergence

第6回：Theories of language acquisition and the teaching of pragmatics

第7回：Class observation and teaching demonstrations

第8回：Adapting textbooks for teaching pragmatics

第9回：Discourse, interaction, and language corpora

第10回：Lesson planning and teacher-led reflection

第11回：Curriculum writing for L2 pragmatics: principles and practice in the teaching of L2 pragmatics

第12回：Strategies for learning and performing speech acts

第13回：Approaches to assessing pragmatic ability

第14回：Assessment of pragmatics in the classroom

履修上の注意

授業内の議論に積極的に参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の英語文献は必ず事前に読んでくること。関連文献を積極的に読むこと。

教科書

『Teaching and Learning Pragmatics』Noriko Ishihara and Andrew D. Cohen (Pearson Education Limited)

参考書

授業内で適宜指示する。

成績評価の方法

授業参加度、発表、レポート等によって総合的に評価する。

その他

特になし。

英語教育学研究		備考	
科目名	英語教育学演習ⅡC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D. (Linguistics) 大須賀 直子		

授業の概要・到達目標

本演習は、主に中間言語語用論研究の中でもスピーチアクト研究に焦点を絞り、スピーチアクトに影響を与える要因や、中間言語話者のスピーチアクトパフォーマンスの特徴について理解を深めることを目的とする。具体的には、個人差要因や文化差、留学などの要因が学習者のスピーチアクトにどのような影響を与えるのか、中間言語話者が依頼、謝罪、断り、不満表明、誉めなどのスピーチアクトをおこなうときに、どのような特徴が表れるのかについて、文献を読みながら批判的に考察していく。最終的には受講生自身がリサーチをデザインして調査を実行し、結果を分析してプレゼンテーションをおこなう。

授業内容

- 第1回：導入
- 第2回：Theoretical groundings
- 第3回：The effect of individual-level variables
- 第4回：Data collection methods
- 第5回：Conversation analysis
- 第6回：The effect of culture
- 第7回：The effect of study abroad
- 第8回：Apologies
- 第9回：Compliments
- 第10回：Compliments and responses to compliments
- 第11回：Refusals
- 第12回：Requests
- 第13回：学生によるプレゼンテーション (1)
- 第14回：学生によるプレゼンテーション (2)

履修上の注意

授業内での議論に積極的に参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の英語文献は必ず事前に読んでくること。関連文献を積極的に読むこと。

教科書

『Speech Act Performance: Theoretical, empirical and methodological issues』Edited by Alicia Martinez-Flor and Esther Uso-Juan (John Benjamins Publishing Company)

参考書

授業内で適宜指示する。

成績評価の方法

授業参加度、発表、レポート等によって総合的に評価する。

その他

特になし。

英語教育学研究		備考	
科目名	英語教育学演習ⅡD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D. (Linguistics) 大須賀 直子		

授業の概要・到達目標

本演習は、中間言語語用論について様々な側面から考察し、理解を深めることを目的とする。具体的には、外国語学習者が語用論的能力をどのように習得するのか、外国語学習者にたいする語用論の指導にはどのような効果があるのか、語用論的能力はどのようにして測るのか、について様々な文献を読み、批判的に考察する。最終的には受講者自身がリサーチをデザインして調査を実行し、結果を分析してプレゼンテーションをおこなう。

授業内容

- 第1回：Introduction
- 第2回：How pragmatics can be learned in foreign language contexts (1)
- 第3回：How pragmatics can be learned in foreign language contexts (2)
- 第4回：How pragmatics can be learned in foreign language contexts (3)
- 第5回：How pragmatics can be learned in foreign language contexts (4)
- 第6回：How pragmatics can be learned in foreign language contexts (5)
- 第7回：How pragmatics can be taught in foreign language contexts (1)
- 第8回：How pragmatics can be taught in foreign language contexts (2)
- 第9回：How pragmatics can be taught in foreign language contexts (3)
- 第10回：How pragmatics can be tested in foreign language contexts (1)
- 第11回：How pragmatics can be tested in foreign language contexts (2)
- 第12回：How pragmatics can be tested in foreign language contexts (3)
- 第13回：学生によるプレゼンテーション (1)
- 第14回：学生によるプレゼンテーション (2)

履修上の注意

授業内の議論には積極的に参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の英語文献は必ず事前に読んでくること。関連文献を積極的に読むこと。

教科書

『Investigating Pragmatics in Foreign Language Learning, Teaching and Testing』Edited by Eva Alcon Soler and Alicia Martinez-Flor (Multilingual Matters)

参考書

授業内で適宜指示する。

成績評価の方法

授業参加度、発表、レポート等によって総合的に評価する。

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	英語教育学演習Ⅲ A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 Ed.D. アレン, キャサリン		

授業の概要・到達目標

The seminar provides an introduction to discourse analysis, that is, how language is organized, the structural aspects of discourse, and the relation of text to context. The focus is on identifying the structural features of various genres. This knowledge will be particularly useful in the teaching of listening and reading comprehension, as well as writing.

The goals of this course are:

1. To become familiar with the tools of discourse analysis by analyzing texts and thus understanding more deeply how meanings are created.
2. To understand how language is organized within and between sentences, that is, cohesion and coherence.
3. To develop skills to analyze spoken and written texts as well as the ways the texts relate to context.

授業内容

第1回: Introduction: What is Discourse Analysis?

第2回: Uses of Discourse Analysis; Facets of Discourse Analysis

第3回: Data for Discourse Analysis; Transcription: Representing Speech in Writing

第4回: "Descriptive" and "critical" goals

第5回: Linguistic categories, minds, and worldviews

第6回: Discourse, culture, and ideology

第7回: Language ideology

第8回: Words and lines

第9回: Paragraphs and episodes

第10回: Discourse schemata and the structure of narrative

第11回: The emergent organization of conversation

第12回: Old and new information and the organization of sentences

第13回: Cohesion

第14回: Structures and rules; Course review

履修上の注意

No prerequisite.

準備学習（予習・復習等）の内容

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and participation in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

Discourse Analysis 2ND ed. by B. Johnstone (Wiley-Blackwell)

参考書

Not assigned.

成績評価の方法

Requirements:

Personal language learning narrative (2-3 pages)

Minimum of three critiques of relevant articles on discourse

Weekly summary (100-150 words) and two discussion questions

Assessment:

Class participation 30%

Assignments 30%

Portfolio 40%

その他

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	英語教育学演習Ⅲ B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 Ed.D. アレン, キャサリン		

授業の概要・到達目標

The seminar further examines discourse analysis, that is, how language is used and how users make sense of language. The ways in which language, either spoken or written, are organized into texts reflect the social context of language use. Texts can bring about changes such as in beliefs and attitudes and so text analysis cannot be seen as separate from social analysis. Yet texts are not necessarily transparent, thus emphasizing the importance of an understanding of discourse analysis for educators. This will assist them in training their students in critical thinking.

The goals of this course are:

1. To further develop skills in using tools of discourse analysis by analyzing texts and thus understanding more deeply how meanings are created.
2. To deepen an understanding of how language reflects social identities and the various contexts in which it is used.
3. To further develop skills to analyze spoken and written texts and the ways the texts relate to context.

授業内容

第1回: Introduction to the Seminar; Participants in discourse: Relationships, roles, identities

第2回: Power and community

第3回: Indexicality

第4回: Stance and style

第5回: Social Roles and Participant Structure

第6回: Audience, Politeness, and Accommodation

第7回: Social identity and identification

第8回: Personal Identity: Discourse and the Self

第9回: The Linguistic Individual in Discourse

第10回: Intertextuality and interdiscursivity

第11回: Repetition in conversation

第12回: Register: Repeated styles for repeated situations

第13回: Genre: Recurrent forms, recurrent actions

第14回: Frames, plots, and coherence; Course review

履修上の注意

Prerequisite: Seminar A.

準備学習（予習・復習等）の内容

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and participation in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

Discourse Analysis 2ND ed. by B. Johnstone (Wiley-Blackwell)

参考書

Not assigned.

成績評価の方法

Requirements:

Minimum of three critiques of relevant articles on discourse

Weekly summary (100-150 words) and two discussion questions

Assessment:

Class participation 30%

Assignments 30%

Portfolio 40%

その他

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	英語教育学演習Ⅲ C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 Ed.D. アレン, キャサリン		

授業の概要・到達目標

The seminar focuses on how language interacts with the media. Drawing on theories of discourse, the ways language is employed in different media, that is, the types of words used and the patterns of organization, will be analyzed. As media communication has changed, so too have the ways language is used.

The goals of this course are:

1. To develop an understanding of the nature of media discourse and the use of various types of texts.
2. To develop skills to critically analyze how media texts use language.
3. To become familiar with the ways media texts can influence public opinion.

授業内容

- 第1回: Introduction to the Seminar; Media as Language Use
 第2回: Speech, Writing and Media
 第3回: Messages as Media
 第4回: Register and Style in Media
 第5回: Different Styles of Media Language
 第6回: The Case of the Blog
 第7回: Mediated Communication
 第8回: Mediated Participation
 第9回: Media Discourse Genres
 第10回: Schema and Genre Theory
 第11回: Listening to Pop Lyrics
 第12回: Media Rhetorics
 第13回: Persuasion and Power
 第14回: Purposes of Persuasion; Course review

履修上の注意

Prerequisite: Seminars A and B.

準備学習（予習・復習等）の内容

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and participation in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

Language and Media by A. Durant and M. Lambrou (Routledge)

参考書

Not assigned.

成績評価の方法

Requirements:
 Weekly summary (100–150 words) and two discussion questions
 Minimum of three critiques of relevant articles
 Assessment:
 Class participation 30%
 Assignments 30%
 Portfolio 40%

その他

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	英語教育学演習Ⅲ D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 Ed.D. アレン, キャサリン		

授業の概要・到達目標

The seminar focuses on the ways language is used in the media to convey information. This can mean not only choosing the appropriate words, but also images, music, and sound to create multimodal discourses. As the ways of using language in the media have changed, so too have the social contexts. These changes in communication raise implications for the role of educators, the classroom, and the meaning of literacy.

The goals of this course are:

1. To develop a deeper understanding of the nature of media discourse and the use of various types of texts.
2. To develop skills to critically analyze how media texts use language and visual images.
3. To become familiar with the ways media texts can influence public opinion as the texts reflect social change as well as influence such changes.

授業内容

- 第1回: Introduction to the Seminar: Literacy and Literacies
 第2回: Communication and Technology
 第3回: Media Storytelling; Telling Stories
 第4回: Media Fact and Fiction
 第5回: Narrative Strategies
 第6回: Words and Images
 第7回: Anchoring Visual Meanings
 第8回: Soundtrack and Multimodal Discourse
 第9回: Analyzing Multimodal Discourse
 第10回: Boundaries of Media Discourse
 第11回: Media Language and Acceptability
 第12回: The Future of Media Language
 第13回: Media Language and Social Change
 第14回: “Literacy Problems” and the Mass Media; Course review

履修上の注意

Prerequisite: Seminars A, B, and C.

準備学習（予習・復習等）の内容

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and participation in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

Language and Media by A. Durant and M. Lambrou (Routledge)

参考書

Not assigned.

成績評価の方法

Requirements:
 Weekly summary (100–150 words) and two discussion questions
 Minimum of three critiques of relevant articles
 Assessment:
 Class participation 30%
 Assignments 30%
 Portfolio 40%

その他

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	英語教育学演習Ⅳ A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（国際広報メディア） 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

第二言語学習の成功や失敗に影響を与える心理的要因に焦点をあてた最新の理論や研究について学ぶ。より具体的には、性格、動機づけ、原因帰属などといった構成概念に対する理解を深めるとともに、それらの適切な測定方法（統計的手法を用いた分析を含む）や実際の教室場面での活用方法（リサーチ・プロポーザルの執筆を含む）を身につけることを目標とする。

授業内容

第1回：イントロダクション（授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など）
 第2回：Self-concept (1)
 第3回：Self-concept (2)
 第4回：Identity (1)
 第5回：Identity (2)
 第6回：Personality (1)
 第7回：Personality (2)
 第8回：Motivation (1)
 第9回：Motivation (2)
 第10回：Attribution (1)
 第11回：Attribution (2)
 第12回：Affect (1)
 第13回：Affect (2)
 第14回：全体のまとめ
 ＊講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の作成を含めた授業前の入念な準備が要求されます。

教科書

Capitalizing on language learners' individuality: From premise to practice. Gregersen, T., & MacIntyre, P. (2014). (Bristol, UK: Multilingual Matters.)

参考書

The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition. Dornyei, Z. (2005). (Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.)
Lessons from good language learners. Griffiths, C. (Ed.) (2008). (Cambridge: Cambridge University Press.)

成績評価の方法

授業（討議含む）への参加状況、課題発表、レポートにより、総合的に判断します。

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	英語教育学演習Ⅳ B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（国際広報メディア） 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

第二言語学習の成功や失敗に影響を与える心理的要因に焦点をあてた最新の理論や研究について学ぶ。より具体的には、学習ストラテジー、メタ認知、グループダイナミックスなどといった構成概念に対する理解を深めるとともに、それらの適切な測定方法（統計的手法を用いた分析を含む）や実際の教室場面での活用方法（リサーチ・プロポーザルの執筆を含む）を身につけることを目標とする。

授業内容

第1回：イントロダクション（授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など）
 第2回：Willingness to communicate (1)
 第3回：Willingness to communicate (2)
 第4回：Strategies (1)
 第5回：Strategies (2)
 第6回：Learning styles (1)
 第7回：Learning styles (2)
 第8回：Metacognition (1)
 第9回：Metacognition (2)
 第10回：Self-directed learning (1)
 第11回：Self-directed learning (2)
 第12回：Group dynamics (1)
 第13回：Group dynamics (2)
 第14回：全体のまとめ
 ＊講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の作成を含めた授業前の入念な準備が要求されます。

教科書

Capitalizing on language learners' individuality: From premise to practice. Gregersen, T., & MacIntyre, P. (2014). (Bristol, UK: Multilingual Matters.)

参考書

The psychology of second language acquisition. Dornyei, Z. (2009). (Oxford: Oxford University Press.)
Exploring language pedagogy through second language acquisition research. Ellis, R., & Shintani, N. (2013). (New York: Routledge.)

成績評価の方法

授業（討議含む）への参加状況、課題発表、レポートにより、総合的に判断します。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	英語教育学演習ⅣC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（国際広報メディア） 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

第二言語の学習・指導と認知・社会・文化的要因との関連を扱った先行研究を概観した上で、(1) 自らが追求したい研究課題や研究仮説の設定、(2) それらに基づいた調査計画の立案、(3) 実際の調査実施と分析・考察、(4) 調査結果の報告・公表、といった一連のプロセスを学ぶ。本演習では、とりわけ (1)、(2) に焦点をあてるとともに、研究を遂行する上で必要となる基礎的な研究手法（統計解析）を身につけることを目標とする。

授業内容

第1回：イントロダクション（授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など）
第2回：研究課題の明確化と先行研究の調査 (1)
第3回：研究課題の明確化と先行研究の調査 (2)
第4回：研究課題の明確化と先行研究の調査 (3)
第5回：研究仮説の設定と研究方法の検討 (1)
第6回：研究仮説の設定と研究方法の検討 (2)
第7回：研究仮説の設定と研究方法の検討 (3)
第8回：予備調査の計画・実施と振り返り (1)
第9回：予備調査の計画・実施と振り返り (2)
第10回：予備調査の計画・実施と振り返り (3)
第11回：本調査の計画と研究発表に向けた準備 (1)
第12回：本調査の計画と研究発表に向けた準備 (2)
第13回：学生による研究発表と講評 (1)
第14回：学生による研究発表と講評 (2)
*講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の作成を含めた授業前に入念な準備が要求されます。

教科書

履修者の興味・関心を踏まえて決定します。

参考書

必要に応じて、講義時に紹介します。

成績評価の方法

授業（討議含む）への参加状況、課題発表、レポートにより、総合的に判断します。

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	英語教育学演習ⅣD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（国際広報メディア） 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

第二言語の学習・指導と認知・社会・文化的要因との関連を扱った先行研究を概観した上で、(1) 自らが追求したい研究課題や研究仮説の設定、(2) それらに基づいた調査計画の立案、(3) 実際の調査実施と分析・考察、(4) 調査結果の報告・公表、といった一連のプロセスを学ぶ。本演習では、とりわけ (3)、(4) に焦点をあてるとともに、研究を遂行する上で必要となる研究手法（統計解析）を身につけることを目標とする。

授業内容

第1回：イントロダクション（授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など）
第2回：本調査の実施と振り返り (1)
第3回：本調査の実施と振り返り (2)
第4回：本調査の実施と振り返り (3)
第5回：本調査の実施と振り返り (4)
第6回：調査結果の多角的検討と関連研究との比較 (1)
第7回：調査結果の多角的検討と関連研究との比較 (2)
第8回：調査結果の多角的検討と関連研究との比較 (3)
第9回：調査結果の多角的検討と関連研究との比較 (4)
第10回：研究発表に向けた準備と意見交換 (1)
第11回：研究発表に向けた準備と意見交換 (2)
第12回：研究発表に向けた準備と意見交換 (3)
第13回：学生による研究発表と講評 (1)
第14回：学生による研究発表と講評 (2)
*講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の作成を含めた授業前に入念な準備が要求されます。

教科書

履修者の興味・関心を踏まえて決定します。

参考書

必要に応じて、講義時に紹介します。

成績評価の方法

授業（討議含む）への参加状況、課題発表、レポートにより、総合的に判断します。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	視覚文化演習ⅠA		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（文学） 萩原 健		

授業の概要・到達目標

視覚文化を扱った国内外の主要な研究を概観します。主となるのは日本の現代演劇に関する研究ですが、近代以前の日本演劇や、他の文化圏の古今の演劇、あるいは造形美術や音楽といった他の芸術分野を扱う研究や、文化人類学の対象とされることの多い、祭儀などを扱った研究も視野に収めます。

言い換えれば、日本の現代演劇についての研究を中心に、視覚文化研究のマッピングを行うことが授業の主眼です。視覚文化研究の現況を把握することが、履修者の到達目標となります。

授業内容

- 第1回：導入
- 第2回：日本演劇：現代1（新劇）
- 第3回：日本演劇：現代2（アングラ）
- 第4回：日本演劇：現代3（小劇場）
- 第5回：日本演劇：現代4（その他）
- 第6回：日本演劇：近代以前
- 第7回：他の文化圏の現代演劇1
- 第8回：他の文化圏の現代演劇2
- 第9回：造形美術と演劇
- 第10回：音楽と演劇
- 第11回：映画と演劇
- 第12回：ポップカルチャー、その他の芸術分野と演劇
- 第13回：非芸術：祭儀、スポーツほかと演劇
- 第14回：総括

履修上の注意

特にありません。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回の前に、当日扱う分野に関する先行研究および研究者について、履修者個々に調べておいていただくことを望みます。

教科書

指定しません。

参考書

- 岩城京子『東京演劇現在形』（Hublet Publishing, 2011年）
- 扇田昭彦『こんな舞台を観てきた』（河出書房新社, 2015年）
- 内野儀『J 演劇の場所』（東京大学出版会, 2016年）
- Jonah Salz (Ed.): A History of Japanese Theatre (Cambridge University Press, 2016)

成績評価の方法

平常点50%（各回の結び、授業内容を要約して提出するコメントシート）、学期末レポート50%

その他

特にありません。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	視覚文化演習ⅠB		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（文学） 萩原 健		

授業の概要・到達目標

ⅠAでの活動をふまえ、履修者がそれぞれ関心を寄せるテーマに即して、国内外の先行研究をリサーチし、吟味していただきます。またそのさいには原則として、追って展開されることになる自身の研究を（1）日本と他の文化圏を等しく視野に収めた視覚文化研究か、（2）他の文化圏からの視点で日本の視覚文化をとらえた研究にすることを求めます。複数回の発表、および発表を受けて行われる、参加者間での意見交換を活動の柱とします。

次年度冬に提出する修士論文に関して、主要先行研究について熟知することを授業の到達目標とします。

授業内容

- 第1回：導入（ⅠAのレビュー）、発表ローテーション決定
- 第2回：履修者各自による研究紹介
- 第3回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第4回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第5回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第6回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第7回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第8回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第9回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第10回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第11回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第12回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第13回：先行研究リサーチ成果発表および意見交換
- 第14回：履修者各自のリサーチ成果総括および意見交換

履修上の注意

特にありません。

準備学習（予習・復習等）の内容

発表担当回に向けての入念な準備、および当日の意見交換への積極的な参加を求めます。

教科書

指定しません。

参考書

「授業の概要・到達目標」参照。参考書については、履修者それぞれの関心によります。各自の研究テーマが具体化するにしたがって、研究に資すると判断されるものを指示します。

成績評価の方法

発表30%、意見交換への参加30%、学期末レポート40%

その他

特にありません。

博士前期課程

主要科目

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	視覚文化演習 I C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（文学）	萩原 健	

授業の概要・到達目標

履修者各自、関心を寄せるテーマに即して選定した先行研究（I Bでの活動）から、自身の研究に直接関わ（りう）る箇所を取り上げて論じ、修士論文の結論とな（りう）る主張について考えていただきます。複数回の発表、および発表を受けて行われる、参加者間での意見交換を活動の柱とします。

次学期の結びに提出する修士論文の核となる主張を定めることを、授業の到達目標とします。

授業内容

第1回：導入（I Bのレビュー）、発表ローテーション決定

第2回：発表および意見交換

第3回：発表および意見交換

第4回：発表および意見交換

第5回：発表および意見交換

第6回：発表および意見交換

第7回：発表および意見交換

第8回：発表および意見交換

第9回：発表および意見交換

第10回：発表および意見交換

第11回：発表および意見交換

第12回：発表および意見交換

第13回：発表および意見交換

第14回：履修者各自の研究に関する総括および意見交換

履修上の注意

特にありません。

準備学習（予習・復習等）の内容

発表担当回に向けての入念な準備、および当日の意見交換への積極的な参加を求めます。

教科書

指定しません。

参考書

「授業の概要・到達目標」参照。参考書については、履修者それぞれの関心によります。各自の研究テーマが具体化するにしたがって、研究に資すると判断されるものを指示します。

成績評価の方法

発表30％、意見交換への参加30％、学期末レポート40％

その他

特にありません。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	視覚文化演習 I D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（文学）	萩原 健	

授業の概要・到達目標

I Cで行った活動をもとに、履修者各自、それぞれの研究を修士論文へと発展させていただきます。論文の具体的な構成を考えるとともに、I Cで取り上げた、先行研究の所定の箇所を、これから書かれるべき自身の論文の特定の箇所へと配置し、これを手掛かりにして論文執筆を進めていただきます。複数回の発表、および発表を受けて行われる、参加者間での意見交換を活動の柱とします。

修士論文の重要な基盤となる上記の活動を十全に行うことを、授業の到達目標とします。

授業内容

第1回：導入（I Cのレビュー）、発表ローテーション決定

第2回：発表および意見交換

第3回：発表および意見交換

第4回：発表および意見交換

第5回：発表および意見交換

第6回：発表および意見交換

第7回：発表および意見交換

第8回：発表および意見交換

第9回：発表および意見交換

第10回：発表および意見交換

第11回：発表および意見交換

第12回：発表および意見交換

第13回：発表および意見交換

第14回：履修者各自の研究に関する総括および意見交換

履修上の注意

特にありません。

準備学習（予習・復習等）の内容

発表担当回に向けての入念な準備、および当日の意見交換への積極的な参加を求めます。

教科書

指定しません。

参考書

「授業の概要・到達目標」参照。参考書については、履修者それぞれの関心によります。各自の研究テーマが具体化するにしたがって、研究に資すると判断されるものを指示します。

成績評価の方法

発表50％、意見交換への参加50％

その他

特にありません。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容演習ⅠA		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術）		張 競

授業の概要・到達目標

〔授業の概要〕 比較文学比較文化の基礎資料を講読し、文献資料の内容についてディスカッションする。講読する資料は比較文学比較文化の基本理論に関するものを中心とし、この学問領域が成立する当初のものはもちろん、近年、海外の学界で注目される研究者の発表した著書や論文も取り上げる予定である。

〔到達目標〕 比較文学比較文化研究の基本理念と研究方法を身に付け、また、比較文学が学問として成立する背景と主な方法論を知る。その上、修論を作成する上で必要な知識とスキルを身につけ、独自の研究テーマを選び、資料調査や研究をまとめる能力の養成を目標としている。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：研究基礎資料の講読・ステップⅠ（1）
第3回：ディスカッション
第4回：研究基礎資料の講読・ステップⅠ（2）
第5回：ディスカッション
第6回：研究テーマ選びについての指導
第7回：研究基礎資料の講読・ステップⅡ（1）
第8回：ディスカッション
第9回：研究基礎資料の講読・ステップⅡ（2）
第10回：ディスカッション
第11回：研究テーマ選びについての発表
第12回：先行研究の文献調査についての報告
第13回：先行研究の文献調査についての指導
第14回：研究計画についての一次発表

履修上の注意

この演習は文化関係・文化変容領域を専攻する学生を想定しており、担当者が指導教員になる学生を指導するために設計されたものである。毎回求められる読書量は非常に多く、ほかの領域を専攻する学生にとって負担が重い。指定された課題をこなせない場合は単位が取得できないので、ご留意いただきたい。

この授業は厳格な学問訓練を目指しており、出欠は厳しくチェックする。授業を二回以上休んだ場合は単位放棄と見なす。また、指定した書籍や資料を事前に予習してこない場合は減点の対象となる。

なお、初回のイントロダクションに参加しない者は履修を認められないので、ご注意ください。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、事前に指定した書籍や資料をよく読んでから授業に臨んでほしい。授業では事前に読んだものについて発表してもらい、それを踏まえて議論を行う予定である。

教科書

特になし。

参考書

『東西比較文学研究』アール・マイナー（明治書院）
『ある学問の死 惑星的思考と新しい比較文学』G・C・スピヴァック著、上村忠男ほか翻訳（みすず書房）

成績評価の方法

授業の参加度30％、プレゼンテーション40％、レポート30％

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容演習ⅠB		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術）		張 競

授業の概要・到達目標

〔授業の概要〕 文化関係・文化変容研究演習ⅠAを履修した者を対象とする授業で、履修者が選んだテーマと関連する資料の講読とディスカッションを行う。また、各履修者は研究の進度に応じて、資料調査や研究の結果について発表することが求められる。

〔到達目標〕 履修生は先行研究をよく調査し、その内容と残された問題をよく理解することが第一の目標である。その上、自分の取り組んだテーマについて基礎的な調査を行い、課題解決の方法と手順を明確にする。学期末には修論を作成できる力を身につける。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：研究に関連する資料の講読（1）
第3回：ディスカッション
第4回：研究に関連する資料の講読（2）
第5回：ディスカッション
第6回：研究課題の選定
第7回：研究に関連する資料の講読（3）
第8回：ディスカッション
第9回：研究に関連する資料の講読（4）
第10回：ディスカッション
第11回：研究調査についての中間報告（1）
第12回：研究調査の指導
第13回：研究調査についての中間報告（2）
第13回：研究計画についての二次発表
第14回：まとめ

履修上の注意

この演習は文化関係・文化変容領域を専攻する学生を想定しており、担当者が指導教員になる学生を指導するために設計されたものである。毎回求められる読書量は非常に多く、ほかの領域を専攻する学生にとって負担が重い。指定された課題をこなせない場合は単位が取得できないので、ご留意いただきたい。

この授業は厳格な学問訓練を目指しており、出欠は厳しくチェックする。授業を二回以上休んだ場合は単位放棄と見なす。また、指定した書籍や資料を事前に予習してこない場合は減点の対象となる。

なお、初回のオリエンテーションに参加しない者は履修を認められないので、ご注意下さい。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、事前に指定した書籍や資料をよく読んでから授業に臨んでほしい。授業では事前に読んだものについて発表してもらい、それを踏まえて議論を行う予定である。

教科書

特になし。

参考書

『比較文学の世界』秋山正幸、榎本義子（南雲堂）
『海を越える日本文学』張競（筑摩書房）

成績評価の方法

授業の参加度30％、プレゼンテーション40％、レポート30％

その他

特になし。

主要科目

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容演習 I C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術）		張 競

授業の概要・到達目標

〔授業の概要〕 この演習は発表を中心に行われる。履修者は自分が関心を持つ問題を取り上げ発表し、それにもとづいて演習参加者全員はディスカッションを行う。取り上げるテーマは比較文学比較文化のうち、とくに近代における異文化受容を中心とする。具体的なテーマは近代日本における西洋文学・西洋文化の受容でいいし、あるいは外国における日本文学・日本文化の受容でもいい。

〔到達目標〕 発表とディスカッションを通して、自らが選んだ研究テーマについての理解を深め、また、資料調査の進め方や、論証の方法の問題点を見つけて改善する。一学期の学習を通して、修士論文の作成に必要な知識とスキルを身につけることが目標である。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：文献資料の分析と検討（1）
 第3回：文献資料の分析と検討（2）
 第4回：文献資料の分析と検討（3）
 第5回：文献資料の分析と検討（4）
 第6回：文献資料の分析と検討（5）
 第7回：文献資料の分析と検討（6）
 第8回：研究実践の発表と討議（1）
 第9回：研究実践の発表と討議（2）
 第10回：研究実践の発表と討議（3）
 第11回：研究実践の発表と討議（4）
 第12回：研究実践の発表と討議（5）
 第13回：研究実践の発表と討議（6）
 第14回：まとめ

履修上の注意

授業担当者と相談の上、発表する内容を決める。この演習は文化関係・文化変容領域を専攻する学生を想定しており、担当者が指導教員になる学生を指導するために設計されたものである。毎回求められる読書量は非常に多く、ほかの領域を専攻する学生にとって負担が重い。指定された課題をこなせない場合は単位を取得できないので、ご留意いただきたい。また、修論の作成に関連し、資料収集の進展や論文作成について報告を求められることがある。

この授業は厳格な学問訓練を目指しており、出欠は厳しくチェックする。授業を二回以上休んだ場合は単位放棄と見なす。また、指定した書籍や資料を事前に予習してこない場合は減点の対象となる。

なお、初回のイントロダクションに参加しない者は履修が認められないので、ご注意ください。

準備学習（予習・復習等）の内容

「文献資料の分析と検討」では授業の前の週に、取り上げる文献資料を決める。事前に指定した書籍や資料をよく読んでから授業に臨んでほしい。事前に指定した書籍や資料をよく読んでから発表してもらい、それを踏まえて議論を行う予定である。「研究実践の発表と討議」ではレジュメではなく、必ず発表する全文を用意してほしい。

教科書

特になし。

参考書

- 『比較文化への展望』伊東俊太郎（研究社出版）
 『異文化を生きた人々』平川祐弘（中央公論新社）

成績評価の方法

授業の参加度30％、プレゼンテーション40％、レポート30％

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容演習 I D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術）		張 競

授業の概要・到達目標

〔授業の概要〕 この演習は修士論文を作成するために関連する科目である。授業は修論進捗の発表と研究状況の検討・指導の二本立てで構成され、一週ごとに参加者による発表を行う。研究資料の検討も発表も修士論文を作成するためのものである。

〔到達目標〕 一学期の演習を通して、修士論文を完成するのが目標である。演習参加者は自分の研究だけでなく、ほかの履修生とのディスカッションを通し、修論関連の研究を深め、より広い視野で課題に取り組むことも目標の一つである。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：修論の全体構成についての発表と討議
 第3回：研究状況の検討（1）
 第4回：論文指導（1）
 第5回：修論第一章の発表と討議
 第6回：研究状況の検討（2）
 第7回：論文指導（2）
 第8回：修論第二章の発表と討議
 第9回：研究状況の検討（3）
 第10回：論文指導（3）
 第11回：修論第三章の発表と討議
 第12回：研究状況の検討（4）
 第13回：論文指導（4）
 第14回：修論の最終発表

履修上の注意

この演習は担当者が指導教員になる学生のために開設されたもので、修論の作成と提出を求められる。履修する際はご留意いただきたい。

なお、初回のイントロダクションに参加しない者は履修が認められないので、ご注意ください。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回の発表ではハンドアウトを配り、また、発表後には発表した章節の書面提出が求められる。翌週の「研究状況の検討」では書面提出の章節についてディスカッションし、書き直しが求められる。「論文指導」では教員の意見にもとづいてディスカッションし、再度の書き直しが求められることがある。毎回、よく予習してから授業に臨んでほしい。発表内容については、授業担当者と事前に相談することが求められる。

教科書

特になし。

参考書

- 『テキストの発見』大澤吉博（中央公論新社）
 『詩文往還』張競（日本経済新聞社出版社）

成績評価の方法

授業の参加度30％、プレゼンテーション40％、レポート30％

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容演習ⅡA		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 渡 浩一		

授業の概要・到達目標

日本文化史の基礎的研究文献の輪読、それに基づく議論を通して、日本文化史研究の課題設定の仕方やその研究方法などの基本を学んでもらうことを到達目標とする。

もっとも、一言で日本文化史といってもその研究対象となり得るものは極めて広い。この演習では中世から近代初期（明治期）にかけての宗教・民俗・文学・美術を主な対象とし、それらを主に歴史民俗学的・民俗史的視点と方法で分析し、日本における文化変容について理解を深めてもらいたいと考えている。日本文化を構成する要素は外来のものがほとんどである。したがって、それは同時に国際日本学的な視点から日本の変容について考えることにもなるはずである。

輪読する基礎的研究文献については、上記の範囲内で受講生の関心を考慮して決めることにしたい。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：基礎的研究文献の輪読と議論（1）
 第3回：基礎的研究文献の輪読と議論（2）
 第4回：基礎的研究文献の輪読と議論（3）
 第5回：基礎的研究文献の輪読と議論（4）
 第6回：基礎的研究文献の輪読と議論（5）
 第7回：基礎的研究文献の輪読と議論（6）
 第8回：基礎的研究文献の輪読と議論（7）
 第9回：基礎的研究文献の輪読と議論（8）
 第10回：基礎的研究文献の輪読と議論（9）
 第11回：基礎的研究文献の輪読と議論（10）
 第12回：基礎的研究文献の輪読と議論（11）
 第13回：基礎的研究文献の輪読と議論（12）
 第14回：研究発表

履修上の注意

毎回、発表者は立てるが、議論をしながら読み進めていくので、発表者以外の出席者も十分な準備学習をしてくる必要がある。

準備学習（予習・復習等）の内容

事前にテキストの当該箇所について通読のうえ、参考書に目を通すなどして疑問点・問題となる所などを予め整理して授業に臨むこと。また、復習として、当該箇所が正確に理解できているかどうかを確認し、さらに、重要な点については、授業での議論を踏まえて参考書を読むなどして理解を深めること。

教科書

上記の通り、受講生の関心を考慮して決める。

参考書

『五来重著作集』（法蔵館）
 渡辺京二『逝きし世の面影』（平凡社ライブラリー）
 その他、適宜提示する。

成績評価の方法

平常点（発表内容・発言回数と内容などに見る授業参加への積極性）および研究発表による。なお、評価割合はそれぞれ50％ずつとする。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容演習ⅡB		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 渡 浩一		

授業の概要・到達目標

日本文化史研究の対象となる資料の扱い方や分析方法を実践的に学んでもらい、日本文化史研究における資料読解の基礎を学んでもらうことを到達目標とする。

もっとも、一言で日本文化史といってもその研究対象となり得るものは極めて広い。この演習では中世から近代初期（明治期）にかけての宗教・民俗・文学・思想などの分野の文献や絵画資料を主な対象とし、それらを主に歴史民俗学的・民俗史的視点と方法で読解していく方法を具体的に体得してもらいたいと考えている。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：文献資料の読解―注釈付き翻刻資料の読解（1）
 第3回：文献資料の読解―注釈付き翻刻資料の読解（2）
 第4回：文献資料の読解―翻字資料の読解（1）
 第5回：文献資料の読解―翻字資料の読解（2）
 第6回：文献資料の読解―翻字資料の読解（3）
 第7回：文献資料の読解―影印資料の読解（1）
 第8回：文献資料の読解―影印資料の読解（2）
 第9回：文献資料の読解―原資料の読解
 第10回：絵画資料の読解―絵巻
 第11回：絵画資料の読解―掛幅絵
 第12回：絵画資料の読解―版本挿絵
 第13回：絵画資料の読解―一枚刷り
 第14回：研究発表

履修上の注意

資料の読解力を身に付けてもらうために、資料の読解を実践的に行っていくので、十分な準備学習をして授業に臨み、復習も十分に行うこと。そして、自分が研究で扱おうとする資料についての読解力を身に付けてもらいたい。そのためには、常に自分が扱うべき資料の選択とその読解方法を意識しながら授業に臨むことも重要である。最後の授業では、自分の研究で扱う資料の読解について発表してもらう。

準備学習（予習・復習等）の内容

文献資料については事前にプリントを配るようになるので、当該箇所について辞書で単語の意味を調べるなどして通読のうえ、参考書に目を通すなどして疑問点・問題となる所などを予め整理して授業に臨むこと。絵画資料についても事前にプリントを配ったり映像を提示したりするようにするので、熟視のうえ、同様に授業に臨むこと。また、復習として、当該箇所が正確に理解できているかどうかを確認し、さらに、重要な点については、授業での議論を踏まえて参考書を読むなどして理解を深めること。

教科書

受講生の関心を考慮しながら、読解すべき資料を決め、プリントとして配布したり、映像を提示したりする。

参考書

『新編 日本古典文学全集』（小学館）
 『室町時代物語大成』（角川書店）
 『室町物語影印叢刊』（三弥井書店）
 『絵巻物による 日本常民生活絵引』（平凡社）
 その他、適宜提示する。

成績評価の方法

平常点（発表内容・発言回数と内容などに見る授業参加への積極性）および研究発表による。なお、評価割合はそれぞれ50％ずつとする。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容演習ⅡC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 渡 浩一		

授業の概要・到達目標

夏休みに修論執筆に取り掛かれるよう、研究課題・研究テーマの確認や先行研究の整理を報告・発表と議論を繰り返しながら行っていく。修論執筆に取り掛かれる状態にまで、研究テーマ、調査・分析の対象、研究方法、仮説（導き出したい論証過程に応じた結論）などを具体的に固めてもらうことを到達目標とする。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：研究課題の確認
第3回：先行研究の整理（報告と議論）（1）
第4回：先行研究の整理（報告と議論）（2）
第5回：先行研究の整理（報告と議論）（3）
第6回：先行研究の整理（報告と議論）（4）
第7回：先行研究の整理（報告と議論）（5）
第8回：先行研究の整理（報告と議論）（6）
第9回：先行研究の整理（報告と議論）（7）
第10回：研究史の確認と研究テーマの決定（発表と議論）
第11回：調査・分析対象の決定（発表と議論）
第12回：研究方法の決定（発表と議論）
第13回：研究テーマ、調査・分析の対象、研究方法についての総合的再検討（発表と議論）
第14回：発表（具体的な研究テーマ、研究・分析の対象や方法について）

履修上の注意

先行研究の整理は修論作成の第一歩で極めて重要な作業である。自らの関心を中心としながらも、できるだけ幅広く多くの先行研究に当たり、問題設定の仕方や研究の視点、研究対象の設定や研究方法さらには、論理的記述の仕方などについても柔軟に具体的に学ぶように心がけること。

準備学習（予習・復習等）の内容

先行研究を積極的に読破し、よく理解したうえで問題点を整理すること。また、議論を踏まえて再考して研究史を整理し、研究史上の問題点を把握したうえで、研究テーマを設定し、調査・分析の対象、研究方法、仮説（導き出したい論証過程に応じた結論）を具体的に詰めていきながら授業に臨むこと。

教科書

特になし。

参考書

履修者個々の研究課題・テーマに応じて、適宜提示する。

成績評価の方法

平常点（報告内容・発言回数と内容などに見る授業参加への積極性）および報告・発表による。なお、評価割合はそれぞれ50%ずつとする。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容演習ⅡD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 渡 浩一		

授業の概要・到達目標

夏休みに執筆を始めた修論について、中間報告と議論と論文指導、それに基づく修正・補足を繰り返しながら完成を目指す。修論の完成を到達目標とする。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：中間報告と議論（1）
第3回：論文指導（1）
第4回：修正と補足の発表（1）
第5回：中間報告と議論（2）
第6回：論文指導（2）
第7回：修正と補足の発表（2）
第8回：中間報告と議論（3）
第9回：論文指導（3）
第10回：修正と補足の発表（3）
第11回：最終中間報告と議論
第12回：修論の最終発表と確認
第13回：研究の意義についての確認と議論
第14回：残された研究課題と研究の展望についての検討

履修上の注意

研究対象の調査・分析結果を十分に整理し、先行研究の成果を踏まえながら論理的で分かりやすい文章で記述するように心掛けること。議論や指導を踏まえ、修正や補足には真摯で柔軟な姿勢で取り組むこと。執筆に行き詰まったら、フィードバックしながら再考したり、熟考のうえ指導教授等の意見を求めること。

準備学習（予習・復習等）の内容

中間報告には、問題点をよく整理し、発表資料を用意して臨むこと。議論や指導を踏まえた修正や補足には積極的に取り組むこと。

教科書

特になし。

参考書

受講生個々の研究課題・テーマに応じて、適宜提示する。

成績評価の方法

平常点（報告内容・発言回数と内容などに見る授業参加への積極性）および報告・発表による。なお、評価割合はそれぞれ50%ずつとする。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	文化関係・文化変容演習Ⅲ A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士(学術) 吉田 悦志		

授業の概要・到達目標

日本近代文学研究の対象は極めて広範です。文学史論、作家論、作品論、さらに明治文学論、大正文学論、昭和文学論、現代文学論もあります。切り口次第では無限のフィールドが広がっています。森鴎外を事例にしますと、鴎外の現代小説かあるいは歴史文学かに研究課題を絞ることもできますし、鴎外の史伝「渋江抽斎」を考察することもできます。この演習は、受講生がそれぞれの課題を確実なものにする期間と位置づけています。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：課題設定のための文献講読と議論（近代文学論）
 第3回：課題設定のための文献講読と議論（近代文学論）
 第4回：課題設定のための文献講読と議論（近代文学史論）
 第5回：課題設定のための文献講読と議論（作家論）
 第6回：課題設定のための文献講読と議論（作家論）
 第7回：課題設定のための文献講読と議論（作品論）
 第8回：課題設定のための文献講読と議論（作品論）
 第9回：課題設定のための文献講読と議論（明治大正昭和期）
 第10回：課題設定のための文献講読と議論（例・鴎外と漱石）
 第11回：課題設定のための文献講読と議論（例・鴎外と漱石）
 第12回：課題設定のための文献講読と議論（例・鴎外と漱石）
 第13回：課題設定のための文献講読と議論（例・自然主義と耽美派）
 第14回：修士論文作成に向けて課題設定

履修上の注意

人文学研究は研究する主体の全体が問われる。己とは何か、時代とは何か、国とは何か、その問う真摯な態度が研究課題を決める。決める際に必要な後付けが研究文献である。研究する主体の自問自答を行いながら、情熱を持続出来る対象を見つけない。

準備学習（予習・復習等）の内容

伊藤整『日本文壇史』1巻から18巻の目次を通読し、明治期文学の流れを把握しておくこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

『上司小剣論—作家と作品』吉田悦志（翰林書房）
 ほか適宜指示する。

成績評価の方法

レジュメ作成と発表（60%）、課題設定度（30%）、平常点（質疑応答等発言力）（10%）

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	文化関係・文化変容演習Ⅲ B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士(学術) 吉田 悦志		

授業の概要・到達目標

Ⅲ A において講読し議論し、分析し総合した研究課題の構想をⅢ B では修士論文を具体化する作業に入ります。論文は徹底した構想の論理展開とそのベースとなる論拠の地固めが欠かせませんし、それなくしては論文の態をなしません。思いつき（想像性・創造性）は大事です。思いつきを確定し説得性を持たせるために、この演習は、文献探索と文献収集を徹底します。初出資料（原資料）を尊重する姿勢と方法（フィールドワークを含む）を学びます。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第3回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第4回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第5回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第6回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第7回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第8回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第9回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第10回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第11回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第12回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第13回：構想具体化のための発表と議論（文献収集とフィールドワーク）
 第14回：修士論文執筆のために（創造と説得）

履修上の注意

人文学研究は研究する主体の全体が問われる。己とは何か、時代とは何か、国とは何か、その問う真摯な態度が研究課題を決める。決める際に必要な後付けが研究文献である。研究する主体の自問自答を行いながら、情熱を持続出来る対象を見つけない。

準備学習（予習・復習等）の内容

伊藤整『日本文壇史』1巻から18巻の目次を通読して、論文のテーマを絞り込む。

教科書

特に指定しない。

参考書

『上司小剣論—作家と作品』吉田悦志（翰林書房）
 ほか適宜指示する。

成績評価の方法

レジュメ作成と発表（60%）、課題設定度（30%）、平常点（質疑応答等発言力）（10%）

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容演習ⅢC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 吉田 悦志		

授業の概要・到達目標

ⅢA・ⅢBを踏まえて、ⅢCでは異分野ではありますが、アカデミックなデータ・オペレーションの古典的名著、遠山茂樹『明治維新』（岩波現代文庫）を参看しながら、それぞれの修士論文作成に取りかかります。章や節によっては、本文より「注」が長い遠山論文は、研究に携わるものが常に拳拳服膺すべき論文です。論文は、課題の設定―構想―文献探索・収集（フィールドワークを含む）―分析―総合（論文執筆）の順で進めて行きます。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第3回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第4回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第5回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第6回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第7回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第8回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第9回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第10回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第11回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第12回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第13回：分析と総合のための発表と議論（データオペレーション）
 第14回：修士論文作成と推敲

履修上の注意

人文学研究は研究する主体の全体が問われる。己とは何か、時代とは何か、国とは何か、その問う真摯な態度が研究課題を決める。決める際に必要な後付けが研究文献である。研究する主体の自問自答を行いながら、情熱を持続出来る対象を見つけ、分析と総合を試みながら論文作成に取りかかるのがこの期の達成目標である。

準備学習（予習・復習等）の内容

遠山茂樹『明治維新』（岩波現代文庫）の本文と注の付し方を研究しておくこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

『上司小剣論―作家と作品』吉田悦志（翰林書房）
 『事件「大逆」の思想と文学』吉田悦志（明治書院）
 はか適宜指示する。

成績評価の方法

論文作成の進捗度（80％）、平常点（質疑応答等発言力）（20％）

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容演習ⅢD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 吉田 悦志		

授業の概要・到達目標

ⅢDでは修士論文を作成しながら、研究過程で発生する知見や問題点を発表し、他者分析や議論の対象にします。その相互作用による論文のブラッシュアップを通して、論文が学問的社会的声価を得られるもの（あるいは準じるもの）に仕上げる努力をして行きます。論文作成過程で、構想力―資料収集力―分析力―総合力を培います。ツールは、PC（Mac, Windows）、iPad、iPhone、Apple TV等

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第3回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第4回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第5回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第6回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第7回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第8回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第9回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第10回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第11回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第12回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第13回：論文のブラッシュアップ議論（知見と問題点）
 第14回：アップデートとアップグレードについて

履修上の注意

研究する主体の自問自答を行いながら、情熱を持続出来る対象を見つけ、分析と総合を試みながら論文を完成させるのがこの期である。さらに書きっぱなしではなく、次のステップをどうするかを考える事も大切である。アップデートとアップグレードとをどう自らに課すかも考えたい。

準備学習（予習・復習等）の内容

野口悠紀雄『超整理法』などを読んで情報を整理する具体的方法を身につける。

教科書

特に指定しない。

参考書

『上司小剣論―作家と作品』吉田悦志（翰林書房）
 『事件「大逆」の思想と文学』吉田悦志（明治書院）
 はか適宜指示する。

成績評価の方法

論文作成の進捗度（80％）、平常点（質疑応答等発言力）（20％）

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想演習 I A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（文学） 美濃部 仁		

授業の概要・到達目標

明治時代以降の日本の思想を考察する際には、それに影響を与えたさまざまな思想伝統の意義を十分に認識しておくことがとりわけ重要です。この授業では、「自己」に焦点をあて、フィヒテの『全知識学の基礎』（1794/95）を読みます。『全知識学の基礎』は、「自己」について考える際の古典的著作であるとともに、近代の日本思想に大きな影響を与えた著作でもあります。

授業内容

第1回：フィヒテの生涯
 第2回：第一根本命題（1）：A=A について
 第3回：第一根本命題（2）：自我について
 第4回：第一根本命題（3）：対自性について
 第5回：まとめ
 第6回：第二根本命題（1）：否定について
 第7回：第二根本命題（2）：他者と物について
 第8回：まとめ
 第9回：第三根本命題（1）：意識と自己意識について
 第10回：第三根本命題（2）：自我とカテゴリー
 第11回：まとめ
 第12回：フィヒテにおける理論的認識
 第13回：フィヒテにおける実践的認識
 第14回：フィヒテにおける神

履修上の注意

履修者の関心によって、テキストを変更する可能性があります。

準備学習（予習・復習等）の内容

テキストを予め読んで、質問をまとめてから授業に臨むようにしてください。

教科書

『Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre als Handschrift fuer seine Zuhörer』, Philosophische Bibliothek 284, Hamburg 1997
 『フィヒテ 全知識学の基礎』木村素衛訳（岩波文庫，1949）

参考書

授業中に指示します。

成績評価の方法

授業中の発表によって評価します。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想演習 I B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（文学） 美濃部 仁		

授業の概要・到達目標

西田幾多郎の論文『場所的論理と宗教的世界観』（1945）を読みます。この最晩年の宗教論において西田は、「自己」とは何かを独自の仕方でも徹底的に究明しています。

授業内容

第1回：西田の生涯
 第2回：「場所的論理と宗教的世界観」一（1）：宗教と自己
 第3回：「場所的論理と宗教的世界観」一（2）：世界と自己
 第4回：「場所的論理と宗教的世界観」一（3）：矛盾的自己同一
 第5回：まとめ
 第6回：「場所的論理と宗教的世界観」二（1）：人生の悲哀
 第7回：「場所的論理と宗教的世界観」二（2）：逆対応
 第8回：「場所的論理と宗教的世界観」三（1）：道徳と宗教
 第9回：「場所的論理と宗教的世界観」三（2）：絶対無
 第10回：まとめ
 第11回：「場所的論理と宗教的世界観」四（1）：一者
 第12回：「場所的論理と宗教的世界観」四（2）：超越と内在
 第13回：「場所的論理と宗教的世界観」五（1）：歴史
 第14回：「場所的論理と宗教的世界観」五（2）：自覚

履修上の注意

履修者の関心によって、テキストを変更する可能性があります。

準備学習（予習・復習等）の内容

テキストを予め読んで、質問をまとめてから授業に臨むようにしてください。

教科書

『場所的論理と宗教的世界観』西田幾多郎（どの版でも可）

参考書

授業中に指示します。

成績評価の方法

授業中の発表によって評価します。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想演習 I C		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（文学） 美濃部 仁		

授業の概要・到達目標

明治時代以降の日本の思想を考察する際には、それに影響を与えたさまざまな思想伝統の意義を十分に認識しておくことがとりわけ重要です。この授業では、「自己」に焦点をあて、キェルケゴールの『死にいたる病』を読みます。『死にいたる病』は、「自己」について考える際の古典的著作であるとともに、近代の日本思想に大きな影響を与えた著作でもあります。

授業内容

第1回：キェルケゴールの生涯
第2回：キェルケゴールにおける宗教
第3回：キェルケゴールにおける自己（1）：自己の自己関係性あるいは閉鎖性
第4回：キェルケゴールにおける自己（2）：自己関係的自己にとっての他者
第5回：まとめ
第6回：絶望（1）：絶望が死にいたる病であること
第7回：絶望（2）：絶望しているという自覚のない絶望
第8回：絶望（3）：有限性と無限性の絶望
第9回：絶望（4）：可能性と必然性の絶望
第10回：まとめ
第11回：絶望（5）：自己自身であらうと欲しない絶望
第12回：絶望（6）：自己自身であらうと欲する絶望
第13回：絶望と罪
第14回：まとめ

履修上の注意

履修者の関心によって、テキストを変更する可能性があります。

準備学習（予習・復習等）の内容

テキストを予め読んで、質問をまとめてから授業に臨むようにしてください。

教科書

『死にいたる病』キェルケゴール（どの版を用いるかについては、第一回の授業で指示します。）

参考書

授業中に指示します。

成績評価の方法

授業中の発表によって評価します。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想演習 I D		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（文学） 美濃部 仁		

授業の概要・到達目標

西谷啓治の『宗教とは何か』（1961）を読みます。この西谷の主著は、日本人哲学者の著作としては国外で最もよく読まれているものの一つです。西谷はそこにおいて「空」を根本概念として自らの思想を展開していますが、この授業では、「空」の場における自己とはどのようなものであるのかを明らかにしたいと考えています。

授業内容

第1回：西谷の生涯
第2回：宗教とは何か（1）：宗教は何のためにあるか、という思考方法について
第3回：宗教とは何か（2）：リアリティについて
第4回：宗教とは何か（3）：意識というあり方について
第5回：宗教とは何か（4）：ニヒリズムについて
第6回：宗教とは何か（5）：悪と罪について
第7回：まとめ
第8回：宗教における人格性と非人格性（1）：宗教と科学
第9回：宗教における人格性と非人格性（2）：宗教と道徳
第10回：虚無と空（1）：空について
第11回：虚無と空（2）：火は火を焼かない
第12回：空の立場（1）：空と自己
第13回：空の立場（2）：回互
第14回：まとめ

履修上の注意

履修者の関心によって、テキストを変更する可能性があります。

準備学習（予習・復習等）の内容

テキストを予め読んで、質問をまとめてから授業に臨むようにしてください。

教科書

『宗教とは何か』西谷啓治（創文社）（単行本版でも著作集版でも可）

参考書

授業中に指示します。

成績評価の方法

授業中の発表によって評価します。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想演習Ⅱ A		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 長尾 進		

授業の概要・到達目標

本演習では、日本思想のなかの「武道・武士道思想」を扱った国内外の主要な研究論文や著作を概観し、先行研究リストを作成する。それらを整理・分析し、これまで十分に研究されていない領域を明確にしたうえで、自分の関心とつきあわせながら、研究テーマを明確にしていく。また、そのテーマに関する資（史）料の収集を開始する。社会調査の必要な場合は、予備調査（アンケート、インタビュー等）を実施する。こうした作業を通じて、武道・武士道思想研究のプラットフォームを整えることを到達目標とする。

授業内容

- 第1回 研究とは。国際日本学研究科において「武道・武士道思想」を研究する意義
- 第2回 武道・武士道思想に関する先行研究のチェック
- 第3回 先行研究の整理分析、リスト作成
- 第4回 未研究領域や未発表見解の明確化と、研究テーマの確定
- 第5回 テーマに関する資（史）料収集の方法
- 第6回 資（史）料収集
- 第7回 資（史）料収集の継続
- 第8回 資（史）料収集の整理・分析
- 第9回 学期中間発表資料作成
- 第10回 学期中間発表
- 第11回 学期中間発表での指摘と課題の確認・整理
- 第12回 学期中間発表での指摘と課題の確認・整理、継続
- 第13回 学期まとめレポートの提出と確認
- 第14回 学期まとめレポートのフィードバック

履修上の注意

武道・武士道関連の先行研究の分析・整理を通じて、未研究分野や未発表見解と自分の関心とのマッチングの見極めが、研究テーマ決定においてとくに重要となる。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業時間帯は、指導教員とのディスカッションが中心となる。上記各回に記した事項については、当該授業時までに可能な範囲で準備をしておくこと。

教科書

とくに指定しない。都度必要に応じて、関連資料を配布する。

参考書

『道の思想』（寺田亨，創文社），『武士道の名著—日本人の精神史』（山本博文，中公新書）ほか。

成績評価の方法

資（史）料収集（20％），学期中間発表（30％），学期末レポート（40％），演習への意欲（10％）

その他

とくになし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想演習Ⅱ B		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 長尾 進		

授業の概要・到達目標

Ⅱ A での武道・武士道思想関係資（史）料収集や学期まとめ論文について精査し、そのうえで不足している資（史）料の収集や調査を行い、それらを含めて整理・分析し、プロット（構成）をたて、ひとつの学術的まとまりをもった論考に仕立てていく。また、学期中（12月）に行われる中間発表に向けて、ディスカッションに資する内容に仕上げていくことを到達目標とする。

授業内容

- 第1回 Ⅱ A における武道・武士道思想関係資（史）料収集や学期まとめ論文について精査
- 第2回 資（史）料収集・補足調査
- 第3回 資（史）料収集・補足調査、継続
- 第4回 収集した資（史）料・補足調査結果の整理・分析
- 第5回 収集した資（史）料・補足調査結果の整理・分析、継続
- 第6回 論文全体構成（プロット）の検討
- 第7回 論文全体構成（プロット）の検討、継続
- 第8回 中間報告会発表資料の作成
- 第9回 中間報告会発表資料の作成、継続
- 第10回 中間報告会発表資料の確認
- 第11回 中間報告会の総括と、今後の方向性確認
- 第12回 年度まとめ論文作成
- 第13回 年度まとめ論文提出
- 第14回 年度まとめ論文のフィードバック

履修上の注意

中間報告会（12月中旬）がとくにメインとなる。武道・武士道思想以外の他領域の教員・学生にも理解しやすい論述・発表資料に仕上げていくことが大事である。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業時間帯は、指導教員とのディスカッションが中心となる。上記各回に記した事項については、当該授業時までに可能な範囲で準備をしておくこと。

教科書

とくに指定しない。都度必要に応じて、関連資料を配布する。

参考書

『武士の思想』（相良亨，ペリカン社）ほか。

成績評価の方法

中間報告会発表及び資料（50％），年度まとめ論文（40％），演習への意欲（10％）

その他

とくになし。

博士前期課程

主要科目

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想演習ⅡC		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授		長尾 進

授業の概要・到達目標

ⅡA・ⅡBで仕上げた武道・武士道関係論考をベースに、補足の資(史)料収集をつづけ、調査の場合は本調査を実施し、使用データの厚みを増していく作業を行う。そのうえで、6月下旬の中間報告会に向けて、発表資料を作成することがメインとなる。学内外での議論・批評に耐える内容に仕上げていくことを到達目標とする。

授業内容

- 第1回 ⅡA・ⅡBまでに明らかにできたことの確認
- 第2回 資(史)料収集・補足調査
- 第3回 資(史)料収集・補足調査, 継続
- 第4回 収集した資(史)料・補足調査結果の整理・分析
- 第5回 収集した資(史)料・補足調査結果の整理・分析, 継続
- 第6回 中間報告会発表資料の作成
- 第7回 中間報告会発表資料の作成, 継続
- 第8回 中間報告会発表資料の確認
- 第9回 中間報告会発表資料の確認, 継続
- 第10回 中間報告会発表資料の総括と、今後の方向性確認
- 第11回 ⅡA・ⅡB・ⅢAを通じてのまとめ論文作成
- 第12回 ⅡA・ⅡB・ⅢAを通じてのまとめ論文作成, 継続
- 第13回 ⅡA・ⅡB・ⅢAを通じてのまとめ論文提出
- 第14回 ⅡA・ⅡB・ⅢA まとめ論文のフィードバック

履修上の注意

中間報告会(6月下旬)がとくにメインとなる。他領域の教員・学生にも理解しやすい論述・発表資料に仕上げていくことが大事である。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業時間帯は、指導教員とのディスカッションが中心となる。上記各回に記した事項については、当該授業時まで可能な範囲で準備をしておくこと。

教科書

とくに指定しない。都度必要に応じて、関連資料を配布する。

参考書

『武士の精神とその歩み』(アレキサンダー・ベネット, 思文閣) ほか。

成績評価の方法

中間報告会発表及び資料(50%), ⅡA・ⅡB・ⅢA まとめ論文(40%), 演習への意欲(10%)

その他

夏季休暇中においてもさらなる資(史)料収集や調査につとめ、できれば関連学会等において発表するなど、意欲的にチャレンジしてほしい。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想演習ⅡD		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授		長尾 進

授業の概要・到達目標

ⅡA～ⅡCまでの作業・成果をベースとして、武道・武士道に関する論文完成へ向けてまとめの作業に入る。プロット(構成)の見直し、不足データのさらなる収集・調査、先行研究との差別化の確認などを行い、オリジナリティのある論文を完成させる。そのうえで、試問において、自らの研究によって得た知見を堂々と披瀝できるようにするのが到達目標である。

授業内容

- 第1回 ⅡA～ⅡCまでに明らかにできたことと、今後の方向性の確認
- 第2回 資(史)料収集・補足調査
- 第3回 資(史)料収集・補足調査, 継続
- 第4回 収集した資(史)料・補足調査結果の整理・分析
- 第5回 収集した資(史)料・補足調査結果の整理・分析, 継続
- 第6回 国際日本学研究の一環として、武道・武士道研究を行う意義についての再確認。
- 第7回 論文下書き作成
- 第8回 論文下書き作成, 継続
- 第9回 論文下書き提出
- 第10回 論文下書きのフィードバック
- 第11回 論文, 完成原稿提出。確認と修正
- 第12回 試問資料作成および準備
- 第13回 試問資料作成および準備のつづき
- 第14回 試問資料の最終確認と、演習ⅡA～ⅡDのまとめ。

履修上の注意

論文の提出(1月初旬)と、試問(2月上旬)への準備がメインとなる。学位にふさわしい内容に仕上げていく意気込みが重要である。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業時間帯は、指導教員とのディスカッションが中心となる。上記各回に記した事項については、当該授業時まで可能な範囲で準備をしておくこと。

教科書

とくに指定しない。都度必要に応じて、関連資料を配布する。

参考書

『日本武道と東洋思想』(寒川恒夫, 平凡社) ほか。

成績評価の方法

論文の内容・完成度(70%), 面接試問への準備(30%), 演習への意欲(10%)

その他

とくになし。

その他	備考	必修講義
科目名	国際日本学総合研究	
開講期	春学期	単位 講2
担当者	田中牧郎 藤本由香里 白戸伸一 山脇啓造 宮本大入 小森和子 廣森友子 横田雅弘 姫野侑子 アレン・キャサリン 長尾 進 岸磨貴子 美濃部仁 大須賀直子 鈴木賢志 森川嘉一郎 瀬川裕司	

授業の概要・到達目標

本科目は、国際日本学研究とは何かについて俯瞰した上で、各領域における研究を行うために必要となる知識と技能を実践的に身につけることを目的とする。さらに、広い領域をカバーする国際日本学研究科の特性を生かして、他の領域の研究に関してディスカッションをしたり、それに対する建設的な批評をできたりするようになることも目指す。

研究は一般的に「研究テーマを決める」「先行研究を調べる」「研究課題（仮説）を設定する」「データ（資料）を収集・分析する」「研究成果を発表する」といった一連のプロセスから成る。本授業では、そのプロセスの特に前半部分を各自が実際に体験することを通じて、研究の基本的な方法論を学ぶだけでなく、修士論文の執筆に向けて、それぞれの研究課題をより発展させていく場とする。

受講者は、研究科の入学試験出願時に提出する「研究計画書」をこの授業を通してブラッシュアップさせ、授業終了後には「研究計画概要」として最終レポートを提出する。

授業内容

- 第1回：イントロダクション（本授業の目的/進め方、国際日本学研究の概略等）
- 第2回：ポップカルチャー研究と国際日本学研究
- 第3回：メディア・社会・国際研究と国際日本学研究
- 第4回：多文化共生・異文化間教育研究と国際日本学研究
- 第5回：国際日本学研究の実践1：研究テーマの設定（講義）
- 第6回：国際日本学研究の実践2：研究テーマの設定（ワークショップ）
- 第7回：日本語学・日本語教育学研究と国際日本学研究
- 第8回：英語教育学研究と国際日本学研究
- 第9回：文化・思想研究と国際日本学研究
- 第10回：国際日本学研究の実践3：先行研究の調査、課題・仮説の設定、量的研究法（講義）
- 第11回：国際日本学研究の実践4：先行研究の調査、課題・仮説の設定、質的研究法（講義）
- 第12回：国際日本学研究の実践5：先行研究の調査、課題・仮説の設定（ゲストレクチャー）
- 第13回：国際日本学研究の実践6：先行研究の調査、課題・仮説の設定（最終発表1）
- 第14回：国際日本学研究の実践7：先行研究の調査、課題・仮説の設定（最終発表2）

履修上の注意

各自の研究テーマについて、定期的に指導教員と相談しながら授業を履修すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

研究分野ごとに講義のシラバスに掲げられている参考書等を事前に読んでおくことが望ましい。

教科書

特に指定しない。必要に応じて、プリントを配布する。

参考書

本研究科講義科目のシラバス中に掲げられている参考書

成績評価の方法

各研究領域（6領域）のテーマごとに作成するレポート（各10点×6）、ワークショップでの発表やレポート（20点）、ならびに最終発表（20点）に基づき、総合的に評価する。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究	備考	
科目名	ポップカルチャー研究A	
開講期	春学期	単位 講2
担当者	専任教授	藤本 由香里

授業の概要・到達目標

日本のポップカルチャーが海外からどう分析されているかを通じて日本文化の特性を改めて見直すために、今回は基本的に、アメリカを代表するアニメ研究者の一人であるMIT教授、イアン・コンドリーが、日本のアニメスタジオなどのフィールドワークを行って書いた『アニメの魂』を、毎回1章ずつ、そこに取り上げられている作品とともに詳細に検討していきます。

具体的には、毎回担当者を決めて1章ずつ読んでいくと同時に、全体をいくつかのグループに分け、その章で取り上げられているアニメ・マンガ作品を実際に見たり読んだりしてきて発表してもらい、それにコメンテーターが、作品あるいは別のテキストの視点をぶつけて問題提起をする形式でやっていきます。

後半は、加えて石岡良治『視覚文化「超」講義』の内容も扱い、視野を視覚文化全般にまで広げていきます。

一方的な講義でなく、双方向的な参加型のディスカッションゼミです。ディスカッションによる延長が考えられるため、この前の時間から続けて開講することを予定しているので、前の時間から確保できるようにしてください。

授業内容

- 第1回：イントロダクション（役割分担）
〈アニメの魂〉
- 第2回：序章 誰がアニメを作るのか？＋情報過多な時代の中で（『視覚文化「超」講義」序章）
- 第3回：協同のネットワークと個人的な未来～細田守とスタジオ
- 第4回：キャラクターと世界観
- 第5回：戦後アニメの方向性
- 第6回：アニメのロボットがリアルになる時
- 第7回：先端的アニメ・スタジオの作り方
- 第8回：ダーク・エネルギー～海外アニメファンと著作権戦争から見えるもの
- 第9回：恋愛革命～オタクという名の日本ファン
- 第10回：アニメの未来
〈視覚文化「超」講義〉
- 第11回：ノスタルジアと消費～消費文化の構造と「懐かしさ」
- 第12回：「まがいもの」としての文化～メロドラマとPV
- 第13回：ホビー/遊戯性～「ガジェット」が文化の意味を覆す
- 第14回：メディアーション/ファン・コミュニティ～「速度と時間」を複数化して考える

履修上の注意

実際的には2コマ続きで授業を行うので、前の時間も履修時間を確保すること。

レポーターは正確な読みと要点のまとめが役割ですが、コメンテーターにあたった個人あるいはグループは、その論文に対する批判的・あるいは発展的な読みの提示、有用なディスカッションを行うことができるような問題提起が求められます。

準備学習（予習・復習等）の内容

自分が当たった回だけでなく、必ず毎回テキストを読んでから参加すること。作品鑑賞は発表の中の紹介を除けば、講義の時間中には行わない。各自観たり読んだりしてきてディスカッションに参加すること。特に重要なアニメ作品・映像作品は、サブゼミとして別の時間に上映会を行うこともある。

教科書

『アニメの魂』イアン・コンドリー（NTT出版、2014年）（※原著：The Soul of Anime by Ian Condry, Duke University Press, 2013）

『視覚文化「超」講義』石岡良治（フィルムアート社、2014年）

参考書

特に指定しません。

成績評価の方法

発表（60%）、ディスカッションへの貢献度（30%）、その他（授業に臨む態度・姿勢等の日常的評価10%）
特別な事情のない3回以上の欠席は履修放棄とみなします。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー研究B	
開 講 期	秋学期	講 2
担 当 者	専任教授 藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

日本のマンガは、その99%がまず「雑誌」に掲載され、それから単行本になることに最も大きな特徴がある。つまり作品の成立は「掲載誌」の性格と切り離すことができない。本科目では、その一次資料である雑誌の性格を押さえ、具体的にデータを取ってその結果を分析・発表することで、「調査」によって自分なりに新しいことを発見できる基礎力を養う。

データ調査はたいへんではあるが、大きな発見もあり、修論を書く上で非常に大きな力になる。院生の場合ほとくに、特定の雑誌の傾向の分析にとどまらず、自分でテーマを決めて対象範囲をしばって調べる、といった実践に力を入れる予定である。

授業内容

- 第1回：イントロダクション～雑誌調査データ表とその成果について
 第2回：役割分担と基準の検討
 第3回：国会図書館にて調査実践
 第4回：(その他の) 図書館にて調査実践
 第5回：雑誌A 中間発表
 第6回：雑誌B 中間発表
 第7回：雑誌C 中間発表
 第8回：テーマA 中間発表
 第9回：テーマB 中間発表
 第10回：雑誌A 本発表
 第11回：雑誌B 本発表
 第12回：雑誌C 本発表
 第13回：テーマA 本発表
 第14回：テーマB 本発表

履修上の注意

実際には2コマ続きで授業を行うので、前の時間も履修時間を確保すること。

雑誌研究であれば、調べるのは5年おきの10冊程度になりますが、それぞれ詳細なデータをとっていくので、1冊3時間くらいはかかります(テーマを絞って調査する場合はまた別の時間配分になります)。それをデータ分析表に記入し、分析結果をグラフにまとめ、特徴を見極めて、見えてきたことを発表します。

テーマを設定する場合は、テーマの選び方と調査対象の選び方が大切です。時間のかかる地道な作業ですが、間違いなく研究力の基礎になります。

準備学習(予習・復習等)の内容

雑誌研究であれば、調べるのは5年おきの10冊程度になりますが、それぞれ詳細なデータをとっていくので、データをとるだけで1冊3時間くらいはかかります(テーマを絞って調査する場合は、また別の時間配分になる)。それをデータ分析表に記入し、分析結果をグラフにまとめ、特徴を見極めて、見えてきたことを発表します。発表の仕方、見やすいデータのまとめ方にも留意してください。

教科書

履修者が選ぶ雑誌やテーマに応じて指定します。

参考書

『藤本由香里ゼミ卒業研究集』1～4

成績評価の方法

発表(60%)、調査データ表(25%)、ディスカッション(15%)。特段の事情のない3回以上の欠席は履修放棄とみなします。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー研究C	
開 講 期	春学期	講 2
担 当 者	専任准教授 森川 嘉一郎	

授業の概要・到達目標

「おたく」という語が誕生してから、すでに四半世紀が経過している。その間、日本のマンガ・アニメ・ゲームの一角が、この「おたく」という人物像と結びつけられるようになり、その関係性が、マンガ・アニメ・ゲームの内容や市場に、少なからぬ影響をおよぼしてきた。そしてその結びつきは、マンガ・アニメ・ゲームが「クールジャパン」と位置付けられたり、その公共的活用が注目されたりするにおよんで、一層複雑に作用するようになっている。本講ではこの関係性を軸に、日本のマンガ・アニメ・ゲームの発展史を概観する。

授業内容

- 第1回：おたく文化と少子化
 第2回：おたくの人物像とその成立
 第3回：共通言語としてのアニメ(1)：魔法少女とロボットの系譜
 第4回：共通言語としてのアニメ(2)：青年向けアニメの誕生とアニメブーム
 第5回：様式としての美少女とやおい
 第6回：宮崎事件と地下鉄サリン事件
 第7回：聖地としての秋葉原
 第8回：おたくとクールジャパン
 第9回：課題の中間発表と講評
 第10回：マンガ・アニメ・ゲーム市場の変遷
 第11回：マンガ・アニメ・ゲームのアーカイブ構築
 第12回：マンガ・アニメ・ゲームの展示的運用(1)
 第13回：マンガ・アニメ・ゲームの展示的運用(2)
 第14回：課題の最終発表と講評

履修上の注意

発表や提出物は英語でも可とする。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業で取り上げたトピックに関し、各々の研究テーマと関わりについて、文献等によって知見を補強すること。

教科書

使用しない。

参考書

講義中、適宜指示する。

成績評価の方法

主として発表と提出物によって評価する。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー研究D	
開 講 期	春学期	単 位 講 2
担 当 者	専任准教授 宮本 大人	

授業の概要・到達目標

日本のアニメーション史概説。アニメーションを論じる基本的な観点を押さえた上で、戦前、戦中から戦後、現在までの主要な作品について見ていく。

授業内容

- 第1回：なぜアニメーションの歴史が問題になるのか
 第2回：戦前・戦中のアニメーション―「桃太郎 海の神兵」と「くもとちゅうりっぷ」―
 第3回：東映動画の仕事（1）―日本初の大規模アニメーション会社の出発―
 第4回：東映動画の仕事（2）―長編動画製作体制の確立―
 第5回：「アニメ」の始まり―虫プロの設立と「鉄腕アトム」―
 第6回：東映動画の仕事（3）―高畑勲と宮崎駿の台頭―
 第7回：「劇画」からアニメへ―「あしたのジョー」の場合―
 第8回：東映動画からテレビアニメへ（1）―二つの「ルパン三世」―
 第9回：東映動画からテレビアニメへ（2）―「アルプスの少女ハイジ」と「未来少年コナン」―
 第10回：タツノコプロの仕事
 第11回：「アニメ」の青年期―「宇宙戦艦ヤマト」と「機動戦士ガンダム」―
 第12回：「アニメ」の自意識―「うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー」―
 第13回：「アニメ」をいったん終わらせる―GAINAXと「新世紀エヴァンゲリオン」―
 第14回：ネット時代のアニメ―「はしのこえ」以後―

履修上の注意

授業内容についての積極的な質問を歓迎する。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回で取り上げる作品を極力見ておくこと。

教科書

用いない。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

期末レポート、または授業内での発表等、受講者数に応じて、初回、または第2回までに決定する。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー研究E	
開 講 期	秋学期	単 位 講 2
担 当 者	兼任教授 博士（理学） 福地 健太郎	

授業の概要・到達目標

ポップカルチャー研究Eでは、コンピュータゲームの歴史と現状について学ぶ。インタラクティブメディアとしてのコンピュータゲームの特性を踏まえながら、ゲームならではの表現・演出技法を主に扱う。インタラクティブ技法やキャラクター演出に基づいたゲームの批評分析を、講義中のディスカッションやレポート作成を通じて学ぶ。講義を通じて、インタラクティブメディア特有の分析批評の手法を深く理解し、また先行するポップカルチャーと比較分析する考え方を身につけることを目標とする。

授業内容

- 第1回：概要説明
 第2回：コンピュータゲーム前史
 第3回：コンピュータゲーム史の概観
 第4回：グラフィックス表現 1
 第5回：グラフィックス表現 2
 第6回：ゲームシステム論
 第7回：インタフェースの発達とインタラクティブデザイン
 第8回：ディスカッション：インタラクティブに注目したゲーム論
 第9回：キャラクター表現と演出
 第10回：オープンワールドゲーム設計
 第11回：ゲーム環境と社会
 第12回：ポップカルチャー
 第13回：ゲーム研究の手法
 第14回：ディスカッション：ゲーム表現論

履修上の注意

本講義では、前半の講義内容を基にした分析レポートと、後半の講義内容を加味した総合レポートの二つのレポート提出が求められる。それぞれのレポートについて提出締切前に設けられたディスカッションの回においてレポートの内容について受講者を含めた全員と議論する機会がある。論点を絞り、ディスカッションに臨むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

講義資料は事前に配布されているので、予習においては講義資料を確認し、自分の研究と関連するトピックを調べておくこと。

また講義で学んだ内容を応用した分析批評を、各自で選んだテーマに対して試みる。必要に応じて「参考書」として挙げた文献を援用するとよい。

教科書

特になし。

参考書

『現代ゲーム全史 文明の遊戯史観から』中川大地 (PLANETS)
 『教養としてのゲーム史』多根清史（ちくま新書）
 『僕たちのゲーム史』さやわか（講談社）
 『ゲームメカニクス おもしろくするためのゲームデザイン』アーネスト・アダマス、ヨリス・ドーマンズ（ソフトバンククリエイティブ）

成績評価の方法

二つのレポートに加えて、講義中の受講態度や議論への参加・貢献度を平常点として加点する。

以下の割合で評価する：

- ・平常点：20%
- ・分析レポート：30%
- ・総合レポート：50%

その他

特になし。

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー研究 F	
開 講 期	春学期	単 位 講 2
担 当 者	特任教授 氷川 竜介	

授業の概要・到達目標

アニメビジネス通史。1963年の『鉄腕アトム』以後、半世紀におよぶアニメビジネスの変遷と発展、主要ジャンルの変化を社会や産業、メディアの変化に照らし合わせつつ総覧する。そこに見てとれる文化的特徴を研究することで日本製アニメの独自性を理解し、未来像を展望する。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：1960年代前半：アニメ文化は SF ヒーローとお菓子のオマケから始まった
 第3回：1960年代後半：高度成長の行き詰まり、怪奇とスポーツものの台頭とビジネス
 第4回：1970年代前半：ロボットアニメの出現、CM 的アニメと特撮文化のクロスオーバー
 第5回：1970年代後半：テレビまんが時代からの脱皮、思春期アニメの台頭と商材の変化
 第6回：1980年代前半：ガンダムとプラモデルの蜜月、オリジナルアニメの時代
 第7回：1980年代後半：オリジナルアニメ冬の時代、ゲーム文化の台頭
 第8回：バブル経済期のアニメ：年表だけでは見えない80年代合作ブームと海外ビジネス
 第9回：映像視聴環境とアニメの発展：OVA とビデオソフト文化
 第10回：1990年代前半：児童向け玩具への回帰とネット文化の夜明け
 第11回：1990年代後半：作品自体がビジネスと直結、「もののけ姫」と「エヴァンゲリオン」
 第12回：2000年代前半：21世紀＝デジタル時代の DVD ビジネスと国際化
 第13回：2000年代後半：深夜アニメビジネスのピーク、ネット配信、デジタル放送時代
 第14回：2010年代と現在、今後：マルチウィンドウ時代のアニメビジネスと作品性の変化

履修上の注意

事前視聴が推奨または必須となる作品タイトル、話数などは指定する。

準備学習（予習・復習等）の内容

初回で配布する各年代の代表作品につき、事前に概要を調べておくこと。

教科書

使用しない。

参考書

適宜、必要な資料を配布する。

成績評価の方法

採点はレポート（2回）評価と授業への参加度、授業態度等をベースにする。受講者数に応じ、授業内で指示する受講者発表も加味する。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー研究 G	
開 講 期	秋学期	単 位 講 2
担 当 者	特任教授 氷川 竜介	

授業の概要・到達目標

アニメ表現論。日本で独自に発展したアニメ文化の特質を知るために、表現に関する諸要素の分類と機能、的確な用語と役割を知る。適宜、海外との比較や歴史的経緯も参照し、一部クリエイターについては、「以前以後」で語られる表現の特徴を述べる。デジタル時代以後の表現についても掘り下げる。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：作画：アニメーションの根源となる運動
 第3回：脚本：ストーリーとドラマを決定づける
 第4回：演出：フィルム品の品質に責任をもつ
 第5回：撮影と編集：平面の画に奥行きをもたらす技術
 第6回：エフェクトアニメ：日本で独自発展した特殊作画発展史
 第7回：音楽と音響：質感と実在感をあたえる音
 第8回：美術：舞台と世界観を決めるもの
 第9回：設定：キャラクターとメカのデザイン論
 第10回：レイアウトシステム：独特のリアリティを生み出す作画法
 第11回：デジタル時代と CG：コンピュータ導入による表現拡張
 第12回：作家による違い：アニメ監督は、それぞれ何を重視しているか
 第13回：必見作品の紹介とアニメ表現発展小史
 第14回：アニメ表現から学べるもの まとめと今後の展望

履修上の注意

事前視聴が推奨または必須となる作品タイトル、話数などは講義中に指定する。

準備学習（予習・復習等）の内容

手近なメイキング書籍、雑誌、映像などに目を通し、工程概略を知っておくこと。

教科書

使用しない。

参考書

資料のコピーを必要に応じて配布する。

成績評価の方法

採点はレポート（2回）評価と授業への参加度、授業態度等をベースにする。

その他

特になし。

ポップカルチャー研究	備 考	
科 目 名	ポップカルチャー研究H	
開 講 期	春学期	単 位 講 2
担 当 者	特任教授 氷川 竜介	

授業の概要・到達目標

特撮概論。日本独自に発展した映像文化のうち、『特撮』について歴史と概要を講義する。昭和の高度成長期(1960年代)、輸出され国際的になった円谷英二特技監督の作品を主軸として、映画・テレビ文化に与えた影響、映像づくりの技術と発想、アニメーション(ANIME)に与えた大きな影響から、CGを取りこんだ現在の姿、博物館活動に至るまで、総合的に文化的価値を概観する。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：歴史その1：映画黎明期から太平洋戦争時の特撮
 第3回：歴史その2：怪獣の誕生と拡大するSF映像
 第4回：歴史その3：テレビ時代とウルトラマン（第一次怪獣ブーム）
 第5回：歴史その4：仮面ライダーと変身ブーム（第二次怪獣ブーム）
 第6回：歴史その5：ロボットアニメと特撮の関係
 第7回：歴史その6：マニアの誕生と特撮文化
 第8回：歴史その7：平成ゴジラと平成ガメラ
 第9回：歴史その8：海外の代表作と日本
 第10回：歴史その9：CG時代と21世紀の特撮
 第11回：特撮技法その1：時間と空間のトリック
 第12回：特撮技法その2：立体デザインと造形
 第13回：特撮技法その3：合成とCG、特殊効果
 第14回：総括：
 ※授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

「特撮」を映画全般の中の技法ではなく、1960～1970年代にはアニメと融合、拮抗して「テレビまんが」を支えたメディア芸術、文化として扱います。「日本のアニメ文化における特殊性」が浮き彫りになる姿勢としますので、アニメの理解を深める上でも聴講していただきたいです。

準備学習（予習・復習等）の内容

指示する代表作品につき、事前に概要を調べておくこと。

教科書

使用しません。

参考書

無償PDF2件を推奨
 「日本特撮に関する調査報告書」http://mediag.jp/?post_type=article&p=916
 「同・平成25年度」http://mediag.jp/?post_type=article&p=2366

成績評価の方法

採点はレポート（2回）評価と授業への参加度、授業態度等をベースにする。

その他

日本製アニメの歴史や特徴は「アニメの年表」だけでは分からないので、ぜひ聴講してください。

メディア・社会・国際研究	備 考	
科 目 名	コンテンツ・メディア研究（コンテンツ産業）	
開 講 期	春学期	単 位 講 2
担 当 者	専任教授 工学博士 長谷川 文雄	

授業の概要・到達目標

日本の成長産業の1つとしてコンテンツ・メディア産業に対する期待は高いが、現状では多くの課題を抱えている。今後、インターネットを経由したコンテンツ流通が普及してくると、既存のビジネスモデルを大きく変える可能性がある。コンテンツ産業の現状と課題を探ると共に、インターネット利用による新たなビジネスフォーメーションについて考えたい。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：コンテンツ・メディア産業の概況
 第3回：産業構造におけるコンテンツ・メディア産業
 第4回：世界における日本のコンテンツ・メディア産業の位置
 第5回：コンテンツ産業の歴史と文化
 第6回：コンテンツとアミューズメント
 第7回：課題発表によるワークショップ1
 第8回：コンテンツのデジタル化の現状
 第9回：インターネットによるコンテンツ流通の変容
 第10回：コンテンツ産業のビジネスモデル（1）クロスメディア戦略
 第11回：コンテンツ産業のビジネスモデル（2）プラットフォーム戦略
 第12回：コンテンツ産業のビジネスモデル（3）グローバル戦略
 第13回：課題発表によるワークショップ2
 第14回：総括

履修上の注意

現在急速に変化している分野なので、新しいメディアについては積極的に自ら体験し、いままでのメディアとどのように異なるのか、自分の意見が述べられるようにしてほしい。コンテンツを健全に流通させるには何が大切なのかを問題意識として持ってほしい。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で紹介した内容については、文献等で調べておくこと。

教科書

『コンテンツ学』長谷川文雄・福富忠和編（世界思想社）
 『コンテンツビジネスが地域を変える』長谷川文雄・水鳥川和夫編著（NTT出版）

参考書

『コンテンツ産業論』川島伸子（ミネルヴァ書房）
 『コンテンツ産業論』出口弘・田中秀幸・小山友介（東京大学出版会）
 『デジタルコンテンツ白書2018』(財)デジタルコンテンツ協会編
 『コンテンツ産業とイノベーション』半澤誠司（勁草書房）

成績評価の方法

授業への参加状況（授業内小レポート及びディスカッション、60%）とレポート（40%）

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	コンテンツ・メディア研究 (コンテンツクリエイト)		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	兼担教授 博士 (知識科学) 宮下 芳明		

授業の概要・到達目標

人々に情報提供や感動を伝えるコンテンツの制作は、様々な技術の支援によってなされており、その形態も多様化している。本講義では、音響・音楽・画像・映像・3DCG・ゲーム・ウェブコンテンツなどを対象に、その制作を支援する技術について講義を行う。講義にあたっては多くのデモンストレーションを行う予定であるが、作曲・音響コンテンツ制作、3DCG制作演習、そしてコンテンツ・プログラミング演習の回を設け、「体験」としても理解できるようにする（これらの演習にあたっては基本的なパソコン操作スキルで足りるよう配慮する。）さらに、本講義の最後の3回については、最新のトピックを織り交ぜながら、コンテンツ制作の未来について考察を行う。

授業内容

第1回：音響コンテンツを支える制作技術
第2回：音楽コンテンツを支える制作技術
第3回：作曲・音響コンテンツ制作演習
第4回：画像・DTPを支える制作技術
第5回：映像コンテンツを支える制作技術
第6回：3DCGを支える制作技術
第7回：3DCG制作演習
第8回：ゲームを支える制作技術
第9回：ウェブコンテンツを支える制作技術
第10回：コンテンツ・プログラミング演習
第11回：エンタテインメントコンピューティング
第12回：コンテンツと著作権 CGMとN次創作
第13回：現実世界×仮想世界×コンテンツ
第14回：最新メディア技術と今後の課題

履修上の注意

日常目にするコンテンツはどのように制作されているのか、関心を持って講義に臨んでもらいたいという観点から、履修者に数分程度のミニプレゼンを1回行ってもらう予定である。

準備学習（予習・復習等）の内容

教科書の該当箇所を振り返り、不明な部分があれば授業で質問すること。余力がある者は、授業内容についてインターネット検索することでさらに発展的な技術を習得すると良い。

教科書

『コンテンツは民主化をめざす 表現のためのメディア技術』宮下芳明（明治大学出版会）

参考書

『デジタルコンテンツ制作入門』デジタルコンテンツ協会（編）（オーム社）
『コンテンツ学』長谷川文雄・福富忠和編（世界思想社）
『コンテンツ産業論』川島伸子（ミネルヴァ書房）
『コンテンツ産業論』出口弘・田中秀幸・小山友介（東京大学出版会）
『映像コンテンツ産業の政策と経営』山崎茂雄・立岡浩（中央経済社）

成績評価の方法

ミニレポート50％ ミニプレゼン50％により総合的に評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	日本社会システム研究 A		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 博士 (商学) 白戸 伸一		

授業の概要・到達目標

かつて、近現代における日本の経済成長要因として日本型社会経済システムや日本的経営の有効性が高く評価されていたが、1990年代以降の長期的低迷とともに正反対の評価がなされるようになり、市場重視のグローバル資本主義に対応した改変が試みられてきた。本講義では、「日本型」あるいは「日本的」とされてきた経済システムや経営システムに着目し、それらの成立過程を歴史的に検証するとともにその変容についても検討し、今後の可能性を追究する。そのために経済史的アプローチと経営史的アプローチを用いている諸研究に注目しつつ、日本的経営、系列、業界団体、国の産業政策等に関する基本構造の理解を深め、グローバル資本主義の浸透による変化と問題点を解明することにより、現段階に相応しい企業経営や産業政策のあり方を展望する。

授業内容

第1回：課題と分析視角
第2回：戦後改革と経済復興
第3回：高度成長のメカニズム (1)
第4回：高度成長のメカニズム (2)
第5回：高度成長のメカニズム (3)
第6回：石油危機と経済構造の転換 (1)
第7回：石油危機と経済構造の転換 (2)
第8回：石油危機と経済構造の転換 (3)
第9回：経済大国への道 (1)
第10回：経済大国への道 (2)
第11回：バブル経済崩壊と日本型企業システムの転換 (1)
第12回：バブル経済崩壊と日本型企業システムの転換 (2)
第13回：バブル経済崩壊と日本型企業システムの転換 (3)
第14回：まとめ

履修上の注意

本講義では受講者に報告を求めながら進める。以下の参考書により受講前に各テーマの要点を理解しておくこと。また、それ以外にもその都度参考文献等を指示するので、読んでおくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

日本経済の現状に関する基礎知識を要するので、武田晴人『高度成長シリーズ日本近現代史⑧』（岩波書店）程度の著作を読んでおくこと。

教科書

『現代日本経済 第3版』橋本寿朗・長谷川信・宮島英昭・齋藤直（有斐閣）

参考書

『日本型経済システム』江川美紀夫（学文社）
『シリーズ流通体系5 日本の流通政策』石原武政・加藤司編（中央経済社）
『講座日本経営史6 グローバル化と日本型企業システムの変容』橋川武郎・久保文克編（ミネルヴァ書房）
『日系小売企業のアジア展開』柳純・鳥羽達郎（中央経済社）
『通商産業政策史4 商務流通政策』石原武政編著（経済産業調査会）

成績評価の方法

報告・発言（60％）、期末レポート（40％）に基づき評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究	備 考	2018年度開講せず
科 目 名	日本社会システム研究B	
開 講 期	春学期	単 位 講 2
担 当 者	専任教授 博士（経済学） 呉 在 恒	

授業の概要・到達目標

ものづくりとは何か、そして、欧米企業と比較して日本企業のものづくりの特徴はどこにあるかを、生産（生産性・品質・納期）、購買、開発などを対象として学習する。この授業は、現場主導型改善（KAIZEN）、全社品質管理、かんばん方式を手段するジャストインタイム方式、コンカレント・エンジニアリングといった日本企業のものづくりの仕組みと活動がどのような考え方・思想、あるいは文化的背景から生まれ、定着し、それが日本企業の競争力にどう結びついているか、そして、それらは欧米企業のものづくりに対してどのような強みをもつものなのかなどについて理解を深めることを目的としている。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：ものづくりの歴史
- 第3回：ものづくり競争力の理解
- 第4回：コストと生産性の概念とその管理
- 第5回：日本型改善（KAIZEN）活動
- 第6回：納期の概念とその管理
- 第7回：ジャストインタイム（JIT）方式
- 第8回：品質の概念とその管理
- 第9回：全社品質管理（TQC）
- 第10回：日米の人事労務管理の比較
- 第11回：購買管理とサプライヤー・システム
- 第12回：製品開発のプロセスと組織
- 第13回：開発期間の管理とその短縮
- 第14回：開発コスト・生産性の管理とその向上

履修上の注意

授業はテキストに沿って講義形式で説明していくが、質問や議論も行うので、事前にテキストを読んで参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、関連資料を紹介あるいは配布するので、テキストとともにそれを読んで授業に出ること。
講義の後、30分程度の時間を確保して議論を行う。

教科書

特に指定しない。その都度、関連資料を配布する。

参考書

- 『生産マネジメント入門（Ⅰ）』藤本隆宏（日本経済新聞社）
- 『生産マネジメント入門（Ⅱ）』藤本隆宏（日本経済新聞社）

成績評価の方法

授業への参加度（60％）とレポート（40％）によって評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究	備 考	2018年度開講せず
科 目 名	日本社会システム研究C	
開 講 期	秋学期	単 位 講 2
担 当 者	専任教授 博士（経済学） 呉 在 恒	

授業の概要・到達目標

イノベーションは現代の日本企業にとってもっとも重要な課題であろう。この授業ではこのイノベーションのマネジメント、すなわち、イノベーションとは何か、なぜイノベーションが重要であり、どうしてマネジメントしていかなければならないのかを学習する。学習内容としては、イノベーションのプロセスから出発して、研究・技術開発や新製品開発のマネジメント、製品アーキテクチャや企業間関係のマネジメントなどについてその基本ロジックや理論を学んで、イノベーション・マネジメントの全体像とその競争力との関連を理解することが目的である。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：日本企業のイノベーションの国際比較
- 第3回：イノベーションのプロセス
- 第4回：イノベーションのパターン
- 第5回：企業の競争力への影響（1）ラディカル・イノベーション
- 第6回：企業の競争力への影響（2）3つのタイプのイノベーション
- 第7回：研究・技術開発のマネジメント（1）技術ロードマップ
- 第8回：研究・技術開発のマネジメント（2）業界標準
- 第9回：製品アーキテクチャの概念とそのタイプ
- 第10回：製品アーキテクチャと日本企業の競争力との関係
- 第11回：新製品開発のマネジメント（1）開発プロセス
- 第12回：新製品開発のマネジメント（2）開発組織
- 第13回：企業間関係のマネジメント
- 第14回：ビジネスモデルのマネジメント

履修上の注意

授業はテキストに沿って要点を説明していくが、質問や議論も行うので、事前にテキストを読んで参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、関連資料を紹介あるいは配布するので、テキストとともにそれを読んで授業に出ること。
講義の後、30分程度の時間を確保して議論を行う。

教科書

『コア・テキスト イノベーション・マネジメント』近能善範・高井文子（新世社）

参考書

- 『OPEN INNOVATION ハーバード流イノベーションのすべて』Henry Chesbrough 著、大前恵一郎訳（産業能率大学出版部）
- 『イノベーションのジレンマ』クレイトン・クリステンセン（著）、玉田俊平太監修、伊豆原弓訳（SE 社）
- 『イノベーションと競争優位：モノディティ化するデジタル機器』榊原清則・香山普編著（NTT 出版）

成績評価の方法

授業への参加度（60％）とレポート（40％）によって評価する。

その他

特になし。

博士前期課程

特修科目

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	日本社会システム研究D		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 博士（政治・国際研究） 鈴木 賢志		

授業の概要・到達目標

本講義では、日本の社会における様々なシステムに関して論ずることにより、日本に関する様々な研究を行う上で基礎となる知識を身に付けることを目標とする。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：選挙システム
第3回：政党システム
第4回：行政システム
第5回：教育システム
第6回：少子化と家族システム
第7回：高齢化と社会保障システム
第8回：経済システム
第9回：金融システム
第10回：農業システム
第11回：労働市場システム
第12回：雇用システム
第13回：企業系列システム
第14回：財政システム

履修上の注意

本講義は、日本の政治や経済のシステムについて、これまで十分な知識を得る機会がなかった者に対して、そのような知識を得る機会を与え、視野の幅を広げるものである。逆に言うと、学部以下のレベルでそのような科目（たとえば国際日本学部において鈴木が開講している「日本社会システム論」）を履修してきた者にとっては、あまり有益ではない。科目選択の際には、そのことを十分踏まえて検討すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回のテーマに関連して、新聞やテレビなどが取り上げていて自分が知りたいこと、あるいは疑問に思っていることを明確にして授業に臨むこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

特に指定しない。

成績評価の方法

レポートおよび平常点（授業参加の積極度と、講義内で出題する課題の達成度）で評価する。

その他

特になし。

メディア・社会・国際研究		備 考	
科 目 名	国際関係・地域研究（アフリカ）		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 溝辺 泰雄		

授業の概要・到達目標

本講義は、「開発」の客体として取り上げられることが多いサハラ以南アフリカ地域において、開発の対象とされた/されている現地の人々の「主体」性に注目することで「開発」の本質を見出すことを目指す。

今年度（2018年度）は、アマルティア・センの「自由としての開発」（Amartya Sen, *Development as Freedom*, 1999）を原書で講読する。受講者は各章を丁寧に読み込み、要旨と自らの考察について報告することが求められる。

授業内容

第1回：導入（開発理論史におけるセンの位置）
第2回：The Perspective of freedom
第3回：The ends and the Means of Development
第4回：Freedom and the Foundations of Justice
第5回：Poverty as Capability Deprivation
第6回：Markets States and Social Opportunity
第7回：The Importance of Democracy
第8回：Famines and Other Crises
第9回：Womens Agency and Social Change
第10回：Population Food and Freedom
第11回：Culture and Human Rights
第12回：Social Choice and Individual Behavior
第13回：Individual Freedom as a Social Commitment
第14回：全体討議

履修上の注意

受講者は相当程度の事前リサーチ及び、複数回にわたる報告課題が課せられる。この点を十分に考慮の上、受講を検討すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

2回目以降の演習では各回必ず事前に課題図書の前読をおこない、演習終了後は課題図書に関する短評を執筆の上、Oh-o! Meiji クラスウェブに提出することが求められる。

教科書

『Development as Freedom』Amartya Sen（Oxford University Press, 1999.）

参考書

初回講義時に指示する。

成績評価の方法

講義参加度およびレポートの内容に基づき、総合的に判断する。

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育研究（異文化間教育学特論）		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 博士（教育学） 横田 雅弘		

授業の概要・到達目標

留学生の学習・生活・心理をいかに支援するかについてのアドバイジング実践について学ぶ。日本語教員や留学生担当の教職員は、留学生の異文化適応の現場に共にいる最も重要な支援者の一人であり、留学生の状況について最もよく知る立場に立つことになる。留学生の背景となる留学制度などのマクロな知識と日常的な接触における支援の仕方などミクロな対応の両者についてケース等を用いて実践的に学ぶ。

授業内容

第1回：イントロダクション
 第2回：留学生政策（世界）
 第3回：留学生政策（日本）
 第4回：留学生アドバイジングの歴史
 第5回：留学生アドバイジングのフィールド
 第6回：オリエンテーションと異文化適応
 第7回：代表的なカウンセリング理論
 第8回：異文化間カウンセリング
 第9回：危機管理
 第10回：異文化間教育の授業実践
 第11回：交流コーディネーションとコミュニティ心理学
 第12回：続き
 第13回：留学生に関する研究動向
 第14回：総括

履修上の注意

テキストをきちんと読んで、積極的にディスカッションに参加する意欲が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

前回取り上げたテキスト（章）について復習し、次回取り上げるテキスト（章）についてしっかりと読んでから参加すること。

教科書

『留学生アドバイジング～学習・生活・心理をいかに支援するか～』横田雅弘・白土悟著（ナカニシヤ出版、2004）

参考書

『開かれた日本語教育の扉』松岡弘・五味政信編著（スリーエーネットワーク）
 『世界と日本の留学生政策に関する研究』<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~yokotam/>
 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』横田雅弘・小林明編著（学文社、2014）

成績評価の方法

レポート60％、授業での発言等積極的な参加40％

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育研究（多文化共生と地域社会）		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	兼任講師 小山 紳一郎		

授業の概要・到達目標

現在、日本に居住する外国人登録者は200万人を超えている。また、国際結婚の増加に伴い外国にルーツを持つ子どもが増加するなど、国籍だけでは地域の「多文化」化の状況を正確に把握することが困難になっている。こうした中、各地の地方自治体や国際交流協会、NPO等が、多様な文化的背景をもつ人々が共に生き活きと暮らす「多文化共生」の地域社会づくりに取り組んでいる。本授業では、フィールドワークやゲスト講師の講義、学生自身によるプレゼンテーションとディスカッションを通じて、共生のまちづくりの専門職を目指す学生等が、「多国籍・多文化」化が急速に進む地域社会の諸課題を解決するための実践力を養成する。

授業内容

第1回：イントロダクション（授業の進め方）
 第2回：外国人児童生徒教育の現状（講義）
 第3回：外国人児童生徒教育の現状（フィールドワーク）
 第4回：外国人児童生徒教育の現状（ふりかえり）
 第5回：多言語情報提供の現状（講義）
 第6回：多言語情報提供の現状（フィールドワーク）
 第7回：多言語情報提供の現状（ふりかえり）
 第8回：日本語教室の現状（ゲスト講義）
 第9回：日本語教室の現状（ふりかえり）
 第10回：地域国際交流拠点の現状（フィールドワーク）
 第11回：地域国際交流拠点の現状（ふりかえり）
 第12回：文化政策と多文化共生（ゲスト講義）
 第13回：文化政策と多文化共生（ふりかえり）
 第14回：多文化社会の専門人材（まとめ）

履修上の注意

フィールドワークやゲスト講師の講義をもとに、レポートとディスカッションを行う。

準備学習（予習・復習等）の内容

自治体国際化協会「多文化共生ポータルサイト」等を通じて自治体等の取組を事前学習すること。

教科書

特になし。

参考書

『シリーズ多言語多文化協働実研究 1～14』東京外国語大学多言語多文化教育研究センター編

成績評価の方法

リフレクションペーパー10％、学生による調査結果の発表30％、学期末レポート60％

その他

特になし。

博士前期課程

特修科目

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育研究（留学生政策）		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	兼任講師 博士（社会学） 竹中 歩		

授業の概要・到達目標

グローバル化が進み、人や物の動きが活発化する中で、高等教育市場も国際化してきている。「優秀な」人材を求める大学（企業・国）間の競争が激しくなる一方、グローバルな知識基盤社会で活躍できる人材の育成が益々大学に期待されている。「グローバルな教育」とは何か。グローバル化に適した教育とは、どうあるべきか。本科目では、近年増えつつある学生の国際的な動きや政策のあり方を分析することで、留学の意義や大学の役割、並びにグローバル化が社会に及ぼす影響などについて考察する。

具体的には、以下の四つの到達目標を掲げる。

- 1) 各国の留学生政策や実情について知識を深める。
- 2) 国際的な学生の流動化の根拠、目的、動機を、個人・大学・政府など異なる視点から分析する。
- 3) 教育の国際化を通して、グローバル化する社会の現状と課題について考察する。
- 4) 以上を踏まえて、文献を調べ、データを収集することで、自分の意見をレポートにまとめる。

授業の一環として簡単なフィールド調査（インタビュー等）を取り込み、受講生は調査とレポートの結果を授業で発表する。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：世界の国際人口移動の動向
 第3回：国際人口移動の理論—人はなぜ動くのか
 第4回：移民政策—国の役割と政策のあり方
 第5回：人口移動と教育問題
 第6回：高等教育の国際化と学生の流動化
 第7回：英語を媒介とする高等教育の意義と役割
 第8回：中間課題（フィールド調査）
 第9回：日本の留学生実情と課題
 第10回：留学生受け入れ制度と実情—英語圏の国々
 第11回：留学生受け入れ制度と実情—ヨーロッパ大陸の国々
 第12回：留学生受け入れ制度と実情—アジアの国々
 第13回：まとめ、演習
 第14回：学生による課題発表

履修上の注意

授業では、日本語・英語の文献を参考に、担当講師や学生の経験やメディアの記事、映像を取り入れながら、講義とディスカッション形式で進める。
 受講者の積極的な参加が期待される。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回与えられた課題文献を読み、自分の考えをまとめ、授業のディスカッションに積極的に参加できるよう準備する。

教科書

特に定めないが、授業の各回のテーマに沿った論文や記事を課題文献として指定する。

参考書

特になし。

成績評価の方法

- 中間課題：20%
 期末レポート：50%
 授業への参加：30%

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育研究（国際教育アドミニストレーション）		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任准教授 小林 明		

授業の概要・到達目標

この授業では、国境や文化圏を超えて往来する人物交流事業に携わる教育分野の職業人が、複雑な国際環境の中で友好的、効率的かつ効果的に活動するために必要な能力、知識、技能および組織インフラについて考察する。比較的新しい分野である国際教育の概念を理解し、国際教育事業の実態把握の一環として大学における国際教育プログラム、国際業務および組織内における国際教育部署の位置付け等について国内外の事例を比較検討する。アドミニストレーションの現状を分析し、課題・問題点を抽出するとともにその解決策を模索する。

この授業を通して、いかなる組織形態の中にあっても柔軟かつ効率的に対応できる国際教育事業に必要な能力、知識、技能を理解し、大学等の国際的交流事業を円滑に管理運営できるアドミニストレーターを養成することを目的とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション 授業内容の打ち合わせなど
 第2回：「国際教育」という概念：歴史的背景
 第3回：「国際教育」という概念：国際教育の変遷（第1次世界大戦後）
 第4回：「国際教育」という概念：国際教育の変遷（第2次世界大戦後）
 第5回：「国際教育」という概念：ユネスコの活動と各国の政策
 第6回：国際教育業務：大学の国際教育事業—学生関連—（調査・発表）
 第7回：国際教育業務：大学の国際教育事業—学生関連以外—（調査・発表）
 第8回：国際教育業務：国際教育事業部門の組織・分掌・人材
 第9回：学生発表：母国以外の大学における国際教育プログラムの実態（調査・発表）
 第10回：国際教育事業管理：ミッションステートメント・意思決定・権限移譲・システム
 第11回：国際教育事業管理：必要最低限の組織インフラとサービス（送出し・受入れ：学内）
 第12回：国際教育事業管理：必要最低限の組織インフラとサービス（送出し・受入れ：学外）
 第13回：国際教育事業管理：国際教育と個人・組織のリスク・マネジメント（調査・報告）
 第14回：総括：国際教育アドミニストレーションのあるべき形

履修上の注意

この科目は「講義」と分類されていますが、講義中心の授業ではありません。受講者がそれぞれの視野を広め、知識が実質的なスキルとして身につくように講義、ディスカッション、調査、発表を組み合わせます。

準備学習（予習・復習等）の内容

テーマに関する授業中の活発な議論を必須とするため、配布資料及び参考書などによる事前学習および事前調査を期待します。

教科書

取り扱う問題が多岐にわたるので、教科書として指定できる本はありません。授業時に資料を配布します。

参考書

- 国際教育及び関連業務を概観できるものです。
 『国際教育学の課題』松崎巖
 『比較・国際教育学』石附実
 『国際教育の研究』深山正光
 『留学生受入れの手引き』JAFSA 編
 『留学生送出しの手引き』JAFSA 編
 『入管法の実務』山脇康嗣
 『International Student Handbook』The College Board

成績評価の方法

授業への積極的な参加（議論、発表、調査活動等）とレポートは必須。授業参加を50%、レポートを50%の割合で総合的に評価する。

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究	備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育研究（多文化共生特論）	
開 講 期	秋学期	単 位 講 2
担 当 者	専任教授 山脇 啓造	

授業の概要・到達目標

日本に暮らす外国人は2008年のリーマンショック、2011年の東日本大震災の影響で僅かに減少傾向にあったが、2013年から再び増加に転じ、現在、約250万人となっている。永住者は増加傾向にあるなど、日本の総人口が減少する中、外国人の定住化が進んでいる。グローバル化と人口減少・少子高齢化が進む21世紀の日本にとって、国籍や民族の異なる人々が共に生きる多文化共生社会の形成は喫緊の課題といえよう。

本講義では、全国の外国人が多く暮らす地域を取り上げ、多文化共生のあり方について比較検討する。また、欧州やアジアの事例も取り上げる。その中で、多文化共生社会の形成に関する基本的な課題への理解を深め、国や自治体、市民団体、企業、大学等が果たすべき役割を探る。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：国の最新動向
- 第3回：総務省（旧自治省）の国際化施策の推移
- 第4回：地方自治体の外国人施策の歴史
- 第5回：事例研究（大阪市、浜松市）
- 第6回：事例研究（新宿区、中野区、東京都）
- 第7回：事例研究（外国人集住都市会議と多文化共生都市サミット）
- 第8回：学生による中間報告
- 第9回：外国の事例（欧州）
- 第10回：外国の事例（欧州都市）
- 第11回：外国の事例（北米）
- 第12回：外国の事例（アジア）
- 第13回：学生による報告
- 第14回：総括

履修上の注意

希望者がいれば、授業時間外に外国人の多い地域の街歩きなどを行う予定である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、授業の最後に次週の授業までの課題を課す。

教科書

特になし。

参考書

『多文化共生の学校づくり』山脇啓造、横浜市立いちょう小学校（編）（明石書店）

成績評価の方法

授業中の討論（20%）、受講生が設定する特定のテーマに関する報告（30%）、4000字程度のレポート（50%）。

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究	備 考	2018年度開講せず
科 目 名	多文化共生・異文化間教育研究（ソーシャル・ビジネスと多文化共生）	
開 講 期	春学期	単 位 講 2
担 当 者	兼任講師	田村 太郎

授業の概要・到達目標

社会の課題を事業的な手法で解決する「ソーシャル・ビジネス」について、地域での実践事例から手法を学ぶとともに、多文化共生分野におけるソーシャル・ビジネスの意義や今後の課題について考える。また、多文化共生分野の課題を解決するソーシャル・ビジネスを組み立てる演習を通じて、従来のビジネスや行政によるアプローチとのちがいを知り、実践に必要な知識を身につける。

修了時にはソーシャル・ビジネスへの基本的な理解と、多文化共生社会の課題解決に資する事業の立ち上げに必要なスキルを習得していることを目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション ソーシャル・ビジネスと多文化共生について
- 第2回：ソーシャル・ビジネスの基礎を学ぶ（1）場づくりのルール
- 第3回：ソーシャル・ビジネスの基礎を学ぶ（2）商品・サービスの開発手法
- 第4回：ソーシャル・ビジネスの基礎を学ぶ（3）顧客コミュニティの創造
- 第5回：ソーシャル・ビジネスの基礎を学ぶ（4）人材マネジメントの手順
- 第6回：ソーシャル・ビジネスの基礎を学ぶ（5）資金調達
- 第7回：多文化共生分野でのソーシャル・ビジネスの進展に向けて：学生発表のためのテーマ選定
- 第8回：多文化共生分野での事例研究（1）日本語習得支援
- 第9回：多文化共生分野での事例研究（2）多言語情報提供
- 第10回：多文化共生分野での事例研究（3）就学支援
- 第11回：多文化共生分野での事例研究（4）就労支援
- 第12回：多文化共生分野での事例研究（5）外国人コミュニティ
- 第13回：多文化共生分野での事例研究（6）インバウンド関連
- 第14回：学生発表、相互評価と総括

履修上の注意

上記授業計画は受講生の人数や関心などに配慮して変更することがある。また授業は講義と演習を織り交ぜて実施するので、学生の主体的な参加を前提とした授業の進行を行う。

準備学習（予習・復習等）の内容

原則として毎回、次回授業のテーマに関する課題を出すので、履修者各自が事前に課題をこなした上で授業に臨むこと。

教科書

随時資料を配付する。

参考書

『好きなまちで仕事を創る』ETIC 編（TO ブックス）

成績評価の方法

課題および授業での発表状況（60%）、期末レポート（40%）

その他

特になし。

博士前期課程

特修科目

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	隔年開講
科 目 名	多文化共生・異文化間教育研究（ダイバーシティと日本社会）		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	兼任講師 田村 太郎		

授業の概要・到達目標

人の多様性に配慮した組織や地域のあり方について、内外の事例をもとにした分野別のケーススタディを通して課題や可能性を議論し、日本におけるあるべき姿について考える。ダイバーシティは企業経営の観点から注目されているが、女性の社会参画や障がい者の就労支援、外国人との共生、セクシャルマイノリティの課題など幅広い分野について企業経営や地域活性化の観点から議論する。

授業全体を通じて、ダイバーシティについての必要な知識を身につけるとともに、組織や地域で求められるマネジメント手法についても身につけることを目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション ダイバーシティと日本社会をめぐる論点の整理
 第2回：企業によるダイバーシティ分野の取り組み
 第3回：自治体によるダイバーシティ分野の取り組み
 第4回：ケーススタディ（1）女性の活躍推進
 第5回：ケーススタディ（2）障がい者の社会参画
 第6回：ケーススタディ（3）外国人との共生
 第7回：ケーススタディ（4）セクシャルマイノリティ支援
 第8回：ケーススタディ（5）子ども・子育て支援
 第9回：ケーススタディ（6）高齢者
 第10回：日本におけるダイバーシティ推進に向けて：学生発表のためのテーマ選定
 第11回：アメリカ社会とダイバーシティ
 第12回：欧州社会とダイバーシティ
 第13回：アジア社会とダイバーシティ
 第14回：学生発表、相互評価と統括

履修上の注意

上記授業計画は受講生の人数や関心などに配慮して変更されることがある。また授業は講義と演習を織り交ぜて実施するので、学生の主体的な参画を前提とした授業の進行を行う。

準備学習（予習・復習等）の内容

原則として毎回、次回授業のテーマに関する課題を出すので、履修者各自が事前に課題をこなした上で授業に臨むこと。

教科書

随時資料を配付する。

参考書

特になし。

成績評価の方法

課題および授業での発表状況（60％）、期末レポート（40％）

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究		備 考	
科 目 名	多文化共生・異文化間教育研究（文化間移動と教育）		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	特任教授 博士（教育学） 佐藤 郡衛		

授業の概要・到達目標

この授業では、グローバル化する社会における文化間移動と教育について学習する。まず文化間移動と教育についてとらえるための理論的な枠組みについて学ぶ。ついで、文化間移動をする人たちに共通するテーマである適応、アイデンティティ、異文化間コミュニケーション、第二言語教育などについて、具体の事例を通して検討する。この授業では、文献講読、そのまとめ方、発表の仕方など修士論文を執筆するためのアカデミックスキルを修得すること、また、グローバル化する教育の課題について考える力を伸ばすことを目指す。

授業内容

- 第1回 イン트로ダクション
 第2回 文化間移動と人間発達を捉える視点について（講義）
 第3回 異文化間教育と文化間移動について（講義）
 第4回 文化移動と適応に関する文献講読・討論
 第5回 文化間移動とアイデンティティに関する文献講読・討論（1）
 第6回 文化間移動とアイデンティティに関する文献講読・討論（2）
 第7回 異文化間コミュニケーションに関する文献講読・討論（1）
 第8回 異文化間コミュニケーションに関する文献講読・討論（2）
 第9回 第二言語教育に関する文献講読・討論（1）
 第10回 第二言語教育に関する文献講読・討論（2）
 第11回 異文化理解教育に関する文献講読・討論（1）
 第12回 異文化理解教育に関する文献講読・討論（2）
 第13回 グローバル化と教育に関する文献講読・討論
 第14回 まとめと振り返り

履修上の注意

毎回、次回のテーマに関する文献を配布するので必ず読んでから出席すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、次回のテーマに関する文献について事前に十分に準備すること。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

毎回、テーマに関する代表的な文献を推薦する。

成績評価の方法

発表内容と討論の内容で評価する。

その他

特になし。

多文化共生・異文化間教育研究	備 考	
科 目 名	アクションリサーチ	
開 講 期	秋学期	単 位 講 2
担 当 者	専任准教授 博士（情報学） 岸 磨貴子	

授業の概要・到達目標

アクションリサーチは教育現場などさまざまな分野で使われている研究法で、現実の問題を解決すること、または、目標となる望ましい状態に向けて変革していくことをめざす。アクションリサーチは1940年代に社会心理学者レヴィンが「理論と実践をつなぐ」ために導入した研究アプローチで、研究者は積極的に実践づくりに関与しながら実践と研究と同時に行う。実践に関わりながら研究したい実践者または研究者に役立つ研究法である。本講義では、次の3つを目標とする。

- (1) アクションリサーチの理論的背景について理解する。
- (2) アクションリサーチのための具体的な方法論について理解する。
- (3) アクションリサーチを計画することができる。

授業内容

- 第1回 アクションリサーチを始めるために
- 第2回 知への3つのメタアプローチ：研究者のポジショニング
- 第3回 批判的アプローチとアクションリサーチ
- 第4回 アクションリサーチの特徴
- 第5回 アクションリサーチの事例分析（1）
- 第6回 アクションリサーチの事例分析（2）
- 第7回 アクションリサーチの事例分析（3）
- 第8回 質的データの収集
- 第9回 データ分析と仮説生成
- 第10回 質的データ分析・解釈（オープンコーディング）
- 第11回 質的データ分析・解釈（軸足コーディング）
- 第12回 理論構築
- 第13回 分析結果についてのグループディスカッション
- 第14回 論文執筆のための注意点

履修上の注意

- (1) 本授業の課題は、主に次の2つの形態で評価する。
・グループ評価：グループで取り組む活動はグループとして評価する
・個人評価：毎回のクラスウェブでの振り返り、出席、レポートは個人課題として評価する
- (2) データの収集においては、授業外の時間を使うことがある（または映像などを用いて教室で行う）
- (3) 受講生の理解に合わせて授業の進度や内容を一部変更する可能性がある

準備学習（予習・復習等）の内容

- (1) 毎回の課題の提出は、授業時間外とする。課題についてのディスカッションは授業内に行うが、ディスカッション内容をクラスウェブに投稿するのは授業時間外に行う。
- (2) 第14回目の授業後、最終レポートあり

教科書

『フィールドワークの技法と実際Ⅱ：分析・解釈編』箕浦康子（ミネルヴァ書房）

参考書

『ラディカル質的心理学—アクションリサーチ入門』イアン・パーカー（著）ハツ塚一郎（訳）（ナカニシヤ出版）
『質的研究の理論的基盤—ポスト実証主義の諸系譜』箕浦康子（ナカニシヤ出版）
その他、参考文献については適宜授業で指示する。また講義資料については授業内にて配布する。

成績評価の方法

定期試験を行わず、平常試験（小テスト・レポート等）で総合評価する。

本授業は、毎回の授業で提示する個人課題およびグループ課題によって評価する。

- ・グループ課題 40点
- ・個人課題 40点
- ・最終レポート 20点

その他

- ・講義資料は授業で配布するが、デジタルデータもクラスウェブにアップする。
- ・授業後には授業のまとめをクラスウェブにアップするため復習のため確認すること。

日本語学・日本語教育学研究	備 考	2018年度開講せず
科 目 名	日本語学研究A	
開 講 期	春学期	単 位 講 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

歴史言語学の視座から日本語の歴史を研究します。上代・中古、中世・近世、近代の3つの時代に分けて、文字、語彙、文法、文体の4つの領域について、日本語史上の重要なトピックを取り上げ、資料研究（コーパス研究を含む）と論文講読の両面から研究を行っていきます。それを通して、文献資料によって日本語の歴史を研究する方法を身に付けることを目指します。

授業内容

- 第1回：日本語の歴史言語学
- 第2回：日本語史研究の資料
- 第3回：上代・中古の文字
- 第4回：上代・中古の語彙と文法
- 第5回：上代・中古の文体
- 第6回：古代日本語から中世日本語へ
- 第7回：中世・近世の文字と語彙
- 第8回：中世・近世の文法と文体
- 第9回：近世日本語から近代日本語へ
- 第10回：近代の文字と語彙
- 第11回：近代の文法
- 第12回：近代の文体
- 第13回：近代日本語から現代日本語へ
- 第14回：この授業のまとめ

履修上の注意

文献資料やコーパスの言葉を集めて整理することを通して、言葉のしくみを見出すことを求めています。その具体的な方法は論文講読を通して学んでいきます。発表やレポートは、時間をかけて取り組む必要があります。

準備学習（予習・復習等）の内容

各時代の日本語史の資料を使って、言語の研究を実践します。

教科書

対象にする資料は、主にネット上の電子資料を利用します。

参考書

『日本語の歴史』全8巻 亀井孝ほか（平凡社）
『日本語学講座』全10巻 今野真二（清文堂出版）
『日本語スタンダードの歴史』野村剛史（岩波書店）
『近代書き言葉はこうしてできた』田中牧郎（岩波書店）
『歴史社会言語学入門』高田博行・渋谷勝己・家入葉子（大修館書店）
そのほか、授業時に提示します。

成績評価の方法

講義、資料（コーパス）上の用例分析、論文講読を織り交ぜます。用例分析と論文講読については、発表を求めます。その発表と討議への参加を平常点とします。発表と討議を踏まえて、考察を深めた結果を、学期末にレポートとして提出してもらいます。

平常点50％、レポート50％。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

日本語学・日本語教育学研究		備 考	隔年開講
科 目 名	日本語学研究 B		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（学術）	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

コーパス言語学に基づいて現代日本語を研究する方法を身に付けることを目指します。国立国語研究所編『現代日本語書き言葉均衡コーパス』および『日本語歴史コーパス』を本格的に用いる研究を、語彙と文法の2つの領域で実践していきます。講義のほか、コーパスを用いた研究を実践してもらい、発表と討議を織り交ぜます。

授業内容

- 第1回：日本語のコーパス言語学
 第2回：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語歴史コーパス』概説
 第3回：『中納言』の使い方
 第4回：コーパスによる語彙研究の基礎 (1)
 第5回：コーパスによる語彙研究の基礎 (2)
 第6回：コーパスによる文法研究の基礎 (1)
 第7回：コーパスによる文法研究の基礎 (2)
 第8回：コーパスの活用方法の整理
 第9回：コーパスによる語彙研究の発展 (1)
 第10回：コーパスによる語彙研究の発展 (2)
 第11回：コーパスによる文法研究の発展 (1)
 第12回：コーパスによる文法研究の発展 (2)
 第13回：コーパス研究の総合
 第14回：この授業のまとめ

履修上の注意

コーパスを使った実践的研究の授業です。授業には、ノートパソコン等を持参してください。

準備学習（予習・復習等）の内容

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語歴史コーパス』を使った実践学習を行います。

教科書

教科書は使いませんが、国立国語研究所編『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語歴史コーパス』を、主として検索ツール『中納言』で利用します。このコーパスと検索ツールの利用登録を、授業開始時までに済ませておいてください。
http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

参考書

- 『講座日本語コーパス1 コーパス入門』前川喜久雄（朝倉書店）
 『講座日本語コーパス2 書き言葉コーパス』山崎誠（朝倉書店）
 『講座日本語コーパス4 コーパスと国語教育』田中牧郎（朝倉書店）
 『講座日本語コーパス5 コーパスと日本語教育』砂川有里子（朝倉書店）
 『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』田野村忠温（朝倉書店）
 『ベジックコーパス言語学』石川慎一郎（ひつじ書房）
 『コーパスと日本語史研究』近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信（ひつじ書房）
 『日本語教育のためのコーパス調査入門』李 在鎬・石川慎一郎・砂川有里子（くろしお出版）
 『日本語コーパス活用入門：NINJAL-LWP 実践ガイド』赤瀬川史朗・ブラザント・バルデン（大修館書店）
 『計量国語学事典』計量国語学会（朝倉書店）
 そのほか、授業時に指示します。

成績評価の方法

実践研究の課題は、「基礎」では教員が提示しますが、「発展」では学生が決めるものとします。「基礎」「発展」それぞれにおいて、担当者を決めて発表をしてもらい、それに基づいて討議を行う形で議論を進めます。発表時の議論をふまえて、考察を深めた結果をレポートで報告してもらいます。平常点（発表と討議への参加）50点、レポート50点

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

日本語学・日本語教育学研究		備 考	
科 目 名	日本語学研究 C		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	兼任講師 博士（文学）	田中 ゆかり	

授業の概要・到達目標

このクラスでは、昨今注目を集めることの多い「方言」を視座として、近代以降の日本語社会のありようを捉えることを目的とします。各種データをはじめ、関連先行研究を用いた講義を行い、データの読み取りや効果的な提示方法、調査計画スキルなどの獲得も目指します。授業では、内容に即した小課題を課し、それらに基づく討議なども予定しています。中には「自分は日本語ネイティブではないから」とか「自分には方言がないから…」と尻込みをする人もいるかも知れません。しかし、このクラスではそれぞれの所属する言語社会の様相の対照や、それに基づく感じ方の違いなども重要なトピックのひとつとして捉えています。小説・マンガ・映画・ドラマ・演劇・ネットなどにおいて再提示される「方言」も枚挙にいとまがありません。身の回りにある「方言」から日本語社会を見通す、つまり「方言」を通して社会言語学的な視点と考え方を獲得する、これがこのクラスの目指すところです。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：標準語・共通語・方言
 第3回：「方言」の価値と位置づけの変遷 (1)
 第4回：「方言」の価値と位置づけの変遷 (2)
 第5回：「方言」の価値と位置づけの変遷 (3)
 第6回：言語意識からみた地域類型 (1)
 第7回：言語意識からみた地域類型 (2)
 第8回：方言ステレオタイプとヴァーチャル方言
 第9回：「方言コスプレ」とは何か
 第10回：ドラマと方言
 第11回：ステレオタイプ度とヴァーチャル度 (1)
 第12回：ステレオタイプ度とヴァーチャル度 (2)
 第13回：最終課題作成解説
 第14回：最終課題提出

履修上の注意

このクラスでは「方言」をテーマとする関係で、生育地など受講者の言語的背景についての情報を互いに共有することになります。

準備学習（予習・復習等）の内容

身近な「方言コンテンツ」をよく観察してクラスに臨んでください。授業における小課題の中から最終課題のテーマを選択するイメージです。

教科書

教科書は使用しません。適宜資料を配布します。

参考書

- 『方言萌え!? ヴァーチャル方言を読み解く』田中ゆかり（岩波ジュニア新書、2016）
 『ドラマと方言の新しい関係』金水敏・岡室美奈子・田中ゆかり編著（笠間書院、2014）
 『「方言コスプレ」の時代』田中ゆかり（岩波書店、2011）
 ※各回のテーマに関連する文献については、スライド・配布資料において示します。

成績評価の方法

平常点（授業参加・小課題含む）50％、最終課題（レポート）50％

その他

最終課題の内容等については第13回に解説します。受講者は、毎回授業のテーマの関連する小課題の中からもっとも関心をもったテーマをひとつ選び、内容をふくらませ、レポートを執筆する、というようなイメージです。非常勤講師なので、オフィスアワーはありません。クラスについての質問などは授業の前後に行います。

日本語学・日本語教育学研究	備 考	
科 目 名	日本語学研究 D	
開 講 期	秋学期	単 位 講 2
担 当 者	兼任講師	井上 優

授業の概要・到達目標

言語の対照研究は、複数の言語を比較対照することにより、(1) それぞれの言語の特性を明らかにし、(2) それぞれの言語を公平に見る（相対化する）ための視点を見出す研究である。

この講義では、言語対照研究の基本的な考え方について述べるとともに、井上がおこなったいくつかの事例研究を紹介する。対象言語は日本語（方言を含む）・中国語・韓国語・英語、トピックは文法・意味・コミュニケーションである。講義を通じて「2つのものを公平に見る視点を見出すセンス」を磨くことをめざす。

授業内容

- 第1回：対照研究とは何か
 第2回：対照研究のタイプ（1）—分析型の対照研究—
 第3回：対照研究のタイプ（2）—統合型の対照研究—
 第4回：対照研究のタイプ（3）—関連づけ型の対照研究—
 第5回：日本語と中国語の語彙—外来語受容法—
 第6回：テンス・アスペクトの対照研究（1）—日本語と韓国語—
 第7回：テンス・アスペクトの対照研究（2）—日本語と中国語—
 第8回：独立型の文法と協力型の文法
 第9回：「気持ちの言語化」の日中対照
 第10回：日本語と中国語の文末助詞
 第11回：日本語と中国語のコミュニケーション（1）：「おしつけ」と「ひかえめ」
 第12回：日本語と中国語のコミュニケーション（2）：「はっきり」と「あいまい」
 第13回：対照研究と言語教育・異文化理解
 第14回：まとめ

履修上の注意

中国語・韓国語に関する知識は特に必要なし。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回授業で課題を指定するので、それについて調べたうえで授業に臨むこと。

教科書

プリント配布。

参考書

『相席で黙ってられるか一日中言語行動比較論』井上優（岩波書店）
 『シリーズ言語科学 4 対照言語学』生越直樹編（東京大学出版会）

成績評価の方法

授業への取り組み（受講態度・授業時の発言：60%）、レポート（40%）により評価。

その他

特になし。

日本語学・日本語教育学研究	備 考	2018年度開講せず
科 目 名	日本語教育学研究 A	
開 講 期	秋学期	単 位 講 2
担 当 者	専任教授	姫野 伴子

授業の概要・到達目標

人間は事態を把握し、把握した事態を言語化するが、その事態把握・言語化には言語によって好まれる傾向があり、〈好まれる言い回し〉を逸脱した文は、たとえ文法的であっても、母語話者には自然さを欠くと感じられる。この講義では、日本語母語話者に顕著な、事態に密着した臨場的な事態把握の傾向と、共同注意態勢にある聞き手を前提に成り立つ会話の具体的な事例を取り上げて論じる。また、日本語に特徴的な事態把握を他言語と対照し、日本語教育において留意すべき点を検討する。

到達目標は、(1) 〈事態把握〉という認知言語学の概念を理解すること、(2) 日本語において〈好まれる言い回し〉の特徴を理解すること、(3) それらが日本語教育において提起する問題を理解することである。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：〈認知言語学〉から〈日本語らしい日本語〉へ向けて（1）
 第3回：認知言語学の日本語教育への応用と有効性（2）
 第4回：日本語らしい表現 1：主体のゼロ化（4.1）
 第5回：日本語らしい表現 2：感情・感覚（4.2）
 第6回：日本語らしい表現 3：ウナギ文（4.3）
 第7回：日本語らしい表現 4：移動動詞（4.4）
 第8回：日本語らしい表現 5：方向性（4.5）
 第9回：日本語らしい表現 6：恩恵と迷惑（4.6）
 第10回：日本語らしい表現 7：コトの把握（4.9）
 第11回：日本語らしい表現 8：ナルの把握（4.10）
 第12回：英語・中国語・韓国語から考える（6）
 第13回：日本語教育・日本語教科書を考える（7）
 第14回：総括

履修上の注意

講義ではあるが、できるだけ受講者との質疑応答、受講者同士の議論の時間を取ることで、積極的・主体的に授業に参加してもらいたい。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習としては、授業の前に教科書の該当箇所を熟読し、疑問点を整理しておくこと。復習としては、扱った事項について、他の日本語の事例との比較や、他言語の事例との対照を通じて、日本語教育でどのように導入・解説・練習すべきか検討すること。

教科書

『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』池上嘉彦・守屋三千代編著（ひつじ書房）

参考書

『日本語論への招待』池上嘉彦（講談社）
 『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』池上嘉彦（NHK ブックス）

成績評価の方法

授業への参加度（発表と発言）およびレポートによって総合的に評価する（授業への参加度40%、レポート60%）。

その他

特になし。

日本語学・日本語教育学研究		備 考	隔年開講
科 目 名	日本語教育学研究 B		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 姫野 伴子		

授業の概要・到達目標

人間の言語を語用論的に考える際に、人間関係を円滑なものに維持するための「ポライトネス」という概念は広く受け入れられている。この授業では、Leech および Brown & Levinson による「ポライトネス」の概念を概観し、フェイス、ポライトネス・ストラテジー、発話内行為の機能・社会的目標と丁寧さの関連等を考察する。また、日本語における対人配慮は敬語だけが担っているのではないという観点から、幅広く配慮表現として捉え、その原理を考察するとともに、ポライトネス理論が日本語の言語運用にもそのまま当てはまるのか検討し、指導方法を考える。

到達目標は、(1) 普遍的なポライトネスの概念を理解すること、(2) 日本語の対人配慮の原理を理解することである。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：待遇表現、敬語、配慮表現
第3回：発話行為
第4回：Leech (1983) の丁寧さの原理 (1)
第5回：Leech (1983) の丁寧さの原理 (2)
第6回：Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論 (1)
第7回：Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論 (2)
第8回：蒲谷・川口・坂本 (1998) の「敬語表現」
第9回：国語審議会 (2000) の「現代社会における敬意表現」
第10回：日本語における配慮表現の原理 (1)
第11回：日本語における配慮表現の原理 (2)
第12回：配慮表現の指導 (1)
第13回：配慮表現の指導 (2)
第14回：総括

履修上の注意

講義ではあるが、できるだけ受講者との質疑応答、受講者同士の議論の時間を取るので、積極的・主体的に授業に参加してもらいたい。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習としては、参考文献を熟読して、疑問点を整理しておくこと。復習としては、授業での議論を踏まえて、他の日本語の事例との比較や、他言語の事例との対照を通じて、日本語教育でどのように導入・解説・練習すべきか検討すること。

教科書

教科書は使用しない。資料を配布する。

参考書

『敬語表現』蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 大修館書店
『敬語』菊地康人 (1994) 角川書店 (1997講談社)
「現代社会における敬意表現」国語審議会 (第22期) 答申 (2000)
「配慮表現の指導」『日本語教育の研究 (日本学研究会叢書第9巻)』姫野伴子 (2016) 外語教学と研究出版社
『敬語』南不二男 (1987) 岩波書店
『発話行為』山梨正明 (1986) 大修館書店
Austin, J. L. (1962) How to Do Things with Words, Cambridge, Mass. (坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』大修館書店)
Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987) Politeness: Some Universals in Language Usage, Cambridge University Press. (田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社)
Leech, Geoffrey N. (1983) Principles of Pragmatics, Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『語用論』(紀伊国屋書店)
Searle, John R. (1969) Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language, Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為一言語哲学への試論』劉草書房)

成績評価の方法

授業への参加度（発表と発言）およびレポートによって総合的に評価する（概ね、授業への参加度60％、レポート40％）。

その他

特になし。

日本語学・日本語教育学研究		備 考	隔年開講
科 目 名	日本語教育学研究 C		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任准教授 博士（学術） 小森 和子		

授業の概要・到達目標

第二言語習得理論の枠組みの中で、語彙に関するこれまでの研究成果を概観する。それによって、第二言語の語彙習得研究では何を探求するのか、どのような課題が研究対象となるのかを知る。

授業内容

第1回：イントロダクション、ヒトの言語理解
第2回：第一言語習得と第二言語習得の相違
第3回：第二言語の語彙習得研究の射程範囲
第4回：日本語の語彙の特徴と習得上の問題
第5回：第二言語の語彙習得のゴール
第6回：第二言語の語彙知識の定義—量的側面
第7回：第二言語の語彙知識の定義—質的側面
第8回：第二言語の語彙知識の測定—テスト理論
第9回：第二言語の語彙知識の測定—テスト分析
第10回：第二言語の語彙習得に見られる第一言語の転移
第11回：第一言語と第二言語の心内辞書
第12回：言語と脳
第13回：第二言語の付随的語彙学習
第14回：第二言語の語彙知識と技能の関係

履修上の注意

事前に以下の二点を準備することが求められる。①文献を事前に読むこと、および②授業日前日までに Searching Questions 課題を提出すること。授業は課題に基づいて討論形式で進められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業までに毎回の論文講読課題を行うこと。

教科書

第6～9回、および第13～14回は、『Learning Vocabulary in Another Language』Nation, I.S.P. (2001) (Cambridge: Cambridge University Press.) を用いる。その他の回については、オリエンテーションで指示する。

参考書

『Words in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon』Aitchison, J. (Oxford: Blackwell., 2003)
『研究社 日本語教育事典』近藤安月子・小森和子 (編) (研究社, 2012)

成績評価の方法

事前課題の達成度 (30％)、授業参加度 (30％)、期末レポート (40％)

その他

講読する文献は、日本語で書かれたものと英語で書かれたものが半数ずつになる予定だが、授業では、第二言語としての日本語について、中国語、韓国語、英語との対照から議論していく。

日本語学・日本語教育学研究	備 考	2018年度開講せず
科 目 名	日本語教育学研究D	
開 講 期	春学期	単 位 講 2
担 当 者	専任准教授 博士（学術） 小森 和子	

授業の概要・到達目標

第二言語学習者の、誤用が含まれた中間言語（特に、語彙）の実態を、学習者コーパスを用いて観察することを通して、学習者の第二言語の語彙習得過程について検討する。
授業は前半が教員による講義と文献講読を中心に行い、後半は受講生が各自で課題を設定し、学習者コーパスを用いて分析を行い、学期末にはその成果の発表を行う。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
第2回：コーパス開発史と学習者コーパス
第3回：学習者コーパス（作文コーパス）を用いた研究（1）
第4回：学習者コーパス（作文コーパス）を用いた研究（2）
第5回：学習者コーパス（作文コーパス）を用いた研究（3）
第6回：学習者コーパス（話し言葉コーパス）を用いた研究（1）
第7回：学習者コーパス（話し言葉コーパス）を用いた研究（2）
第8回：学習者コーパス（話し言葉コーパス）を用いた研究（3）
第9回：学習者コーパスを用いた研究課題の設定方法と分析方法（1）
第10回：学習者コーパスを用いた研究課題の設定方法と分析方法（2）
第11回：実践と発表（1）
第12回：実践と発表（2）
第13回：実践と発表（3）
第14回：まとめ

履修上の注意

国立国語研究所の「中納言」の利用申請が必要。なお、田中牧郎先生の「日本学研究B」を履修済みであることが望ましい。

授業は課題に基づいて討論形式で進められるため、受講者の積極的な参加意欲を求める。

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に「中納言」の利用申請をしておくこと。毎回課題を指示するので、指示に従うこと。

教科書

配布資料を使用する予定。

参考書

- 『日本語教育のためのコーパス調査入門』李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子（くろしお出版，2012）
『ベーシックコーパス言語学』石川慎一郎（ひつじ書房，2012）
『講座日本語コーパス5 コーパスと日本語教育』砂川有里子（編）（朝倉書店，2014）
『認知言語学研究の方法—内省・コーパス・実験』中本敬子・李在鎬（編）（ひつじ書房，2011）

成績評価の方法

事前課題の達成度（30%），授業参加度（30%），期末レポート（40%）

その他

特になし。

日本語学・日本語教育学研究	備 考	
科 目 名	日本語教育学研究E	
開 講 期	秋学期	単 位 講 2
担 当 者	特任准教授 博士（学術） 柳澤 絵美	

授業の概要・到達目標

本講義では、日本語の音声・音韻の基礎を復習しつつ、学習者の日本語発話に見られる音声的な特徴や音声の習得・指導に関する文献にあたり、日本語教育における音声面の課題や発音指導の実践的な取り組みについて概観する。

本講義を通して、日本語音声教育研究の対象となる課題や現在の研究動向などについて知るとともに、日本語の音声・音韻、および、日本語音声教育についての知識と理解を深めることを目指す。

授業内容

- 第1回 イントロダクション，日本語音声・音韻の概観（1）
第2回 日本語音声・音韻の概観（2）
第3回 学習者に見られる日本語音声習得上の諸問題
第4回 音声の聴取と生成の関係
第5回 学習者の母語と日本語音声（1）
第6回 学習者の母語と日本語音声（2）
第7回 母語話者による音声の評価
第8回 学習者要因と音声の習得（1）
第9回 学習者要因と音声の習得（2）
第10回 日本語音声教育の実践研究（1）単音
第11回 日本語音声教育の実践研究（2）リズム
第12回 日本語音声教育の実践研究（3）アクセント
第13回 日本語音声教育の実践研究（4）イントネーション
第14回 まとめ

履修上の注意

授業は、講義だけでなく、質疑応答やディスカッションなどをしながら進めていくため、積極的な姿勢で参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業に参加するための予習として、指定された文献や資料を読み、論点や疑問点などを整理しておくこと。また、授業内で課題が出された際には、参考書や関連文献などを使って必要な情報について調べたり、まとめたりすること。

教科書

教科書は使用しない。授業の中で資料を配布する。

参考書

- 『音声学基本事典』城生伯太郎・福盛貴弘・斎藤純男（勉誠出版，2011）
『音声学概説』ピーター ラディフォギッド（大修館書店，1999）
『日本語の音声』窪蘭晴夫（岩波書店，1999）
『The Sounds of Japanese』Vance Timothy J.（Cambridge University Press，2008）

成績評価の方法

レポート40%，課題30%，授業参加度30%

その他

履修者の専門分野や人数，日本語音声に関する知識量に応じて、内容を若干変更する場合がある。

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	応用言語学研究 (第2言語習得理論A)		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任准教授 Ed.D. マクロクリン, デイヴィッド		

授業の概要・到達目標

This is a survey course in Second Language Acquisition (SLA). The field of SLA research is concerned with how people learn a second (or third, fourth, etc.) language. It is an interdisciplinary field, overlapping with research in linguistics, psychology, cognitive science, neuroscience, first (child) language acquisition, and language teaching.

The goals of this course are:

- (1) To gain an understanding of the main issues in SLA, and to become familiar with the principal theories of SLA.
- (2) To understand the processes at work in acquiring a second language, cognitive and sociocultural.
- (3) To become acquainted with the role of individual differences in the acquisition of further languages.
- (4) To become familiar with the methods of SLA research.

授業内容

- 第1回 Course Introduction/Chapter 1: What is SLA?
- 第2回 Chapter 2: Age and SLA
- 第3回 Chapter 3: Crosslinguistic Influences
- 第4回 Chapter 4: Linguistic Environment
- 第5回 Chapter 5: Cognition and SLA
- 第6回 Chapter 6: Development of Learner Language
- 第7回 Chapter 7: Foreign Language Aptitude
- 第8回 Chapter 8: Motivation in SLA
- 第9回 Chapter 8: Motivation in SLA
- 第10回 Chapter 9: Affect and SLA
- 第11回 Chapter 9: Affect and SLA
- 第12回 Chapter 10: Social Dimensions of L2 Learning
- 第13回 Final Paper (Preparation/Conference)
- 第14回 Final Paper (Presentation)

履修上の注意

Class participation: in-class discussions, preparation for discussions, pre-class reading, class assignments.

Being prepared for each class by reading required articles/book chapters.

Completion of assignments.

準備学習 (予習・復習等) の内容

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and collaboration in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

『Understanding Second Language Acquisition (Understanding Language).』 Ortega, L. (2008). (London: Hodder Education.)

参考書

『The Psychology of the Language Learner Revisited.』 Dornyei, Z. & Ryan, S. (2015). (New York, NY: Routledge.)

成績評価の方法

Class participation 60% Students will be assessed on their participation in class in the following ways: completion of assignments; participation in discussions; being prepared for each class by doing pre-class reading.

Final paper 40% Students will write a paper on a chosen area of Second Language Acquisition Research. The paper will contain a literature review and a discussion of research in the context of the learner's own L2 learning and/or future teaching plans.

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	応用言語学研究 (第2言語習得理論B)		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	兼任講師 Ed.D. ロッセル, ヒュー		

授業の概要・到達目標

Course Components

A) Critical Reading and Discussion

Through a critical reading and discussion of the chapters in the textbook, learners will gain a better understanding of the role of testing in language teaching, of how to apply testing principles in practice, and ultimately, of how to write better tests. More specifically, studying the stages of test development as well as test techniques will enable you to devise tests which are not only valid, reliable, and practical, but which will also provide beneficial backwash to your students. Finally, you will gain insight into how tests can best be administered, and become familiar with a variety of simple statistical analyses that can be applied once you have gathered your test data.

B) Critique and Construction of Tests

Individuals will be required to construct 4 short tests (10–20 items) designed to assess the four major language skills (reading, writing, listening, and speaking), and provide a detailed rationale for the design and grading criteria for each. Prior to being submitted for grading, the strengths and weaknesses of the format, individual items, and grading criteria of each test will be discussed and evaluated in small groups in class.

C) Use of *Word Engine* (requires a small fee)

The purpose of this component of the course is to develop your academic vocabulary, and hence, your ability to convey your ideas clearly and precisely in English. Each student will be required to gain AT LEAST 300 Correct Responses per week on the *Word Engine* website. This website has been very carefully designed not only to develop your knowledge of words that are commonly used in your textbook as well as other academic contexts, but to adjust the words that you study to your individual level, and to re-test you five times over a 90 day period on all the words you study (to ensure that all the words you study enter your permanent memory).

The learning targets for this course include the development of your understanding of the role of tests in language teaching, as well as the ability to write and administer tests effectively.

授業内容

- Week 1—Introduction/Goals of the course/Preface/Assessment Concepts and Issues (Ch. 1)
- Week 2—Principles of Language Assessment (Ch. 2)
- Week 3—Designing Classroom Language Tests (Ch. 3)
- Week 4—Assessing Listening (Ch. 7)
- Week 5—Assessing Reading (Ch. 9)
- Week 6–8—Assessing Speaking (Ch. 8) / Assessing Writing (Ch. 10)
- Week 9—Beyond Tests: Alternatives in Assessment —Portfolios, journals, etc. (Ch. 6)
- Week 10—Assessing Grammar and Vocabulary (Ch. 11)
- Week 11—Grading and Student Evaluation (Ch. 12)
- Week 12—The Statistical Analysis of Test Data (Hughes, Appendix 1)
- Week 13—Standards-Based Assessment (Ch. 4) / Standardized Testing (Ch. 5)
- Week 14—Submit Statistical Analyses of Test Data/Complete Course Questionnaire.

履修上の注意

Students will be required to come to each class prepared to discuss the assigned readings, critique and design a variety of assessment instruments, conduct and interpret the results of basic statistical analyses of test data, and regularly use *Word Engine* to expand their academic vocabulary.

準備学習 (予習・復習等) の内容

It is important that you do your homework every class, NOT for the teacher or to pass a test, but for YOU, and your classmates. Since the homework usually helps you to prepare for the next class, much of the value of doing your homework will be lost if you do it late. Doing your homework each week will enable you to gain a better grasp of the principles that are essential to the design of valid, reliable, and practical classroom language assessment instruments.

Memory research shows that you will learn more if you use *WordEngine* for short periods regularly (rather than fewer longer sessions). To gain the full benefits of using this program, you should use it for at least 5 minutes per day, with the goal of moving as many words as possible into Boxes 4, 5, and Permanent Memory during the course. (You can see the distribution of your words on *My Page* on the *WordEngine* website).

教科書

Brown, H. D., and Abeywickrama, P. [Language assessment: Principles and classroom practices (2nd ed.)]. (Pearson Education), 2010. Print.

参考書

A good English-English LEARNER dictionary is required. (And you must bring it each class!!)

I recommend, either the electronic form, or, if you prefer, the compact Japanese Paper edition, of one of the following dictionaries:

- i. *Longman Dictionary of Contemporary English*,
- ii. *Oxford Dictionary for Advanced Learners*,
- iii. *Macmillan Dictionary for Advanced Learners of American English*,
- iv. *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*

成績評価の方法

Your grade for the course will be determined in the following manner:

- Participation in discussions and use of English: 30%
- Completion of 5-Points I would Like to Discuss: 20%
- Construction and critique of assessment instruments: 35%
- Statistical analyses assignment: 5%
- Use of *Word Engine*: 10%

その他

None.

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	応用言語学研究（社会言語学）		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 Ed.D. アレン, キャサリン		

授業の概要・到達目標

Sociolinguistics focuses on the relationships between language and society. However, the ways in which language is used and the contexts where it is used demonstrate that these relationships are not neutral. Language practices are used to maintain power.

This course critically analyzes how language, power, and ideology are used in media texts. By practicing with a set of tools that include linguistic and semiotic resources, students will be able to critically analyze texts and thus understand more deeply how meanings are created.

授業内容

第1回: Introduction

第2回: Making active choices: Language as a set of resources

第3回: Analysing semiotic choices: Words and images (a)

第4回: Analysing semiotic choices: Words and images (b)

第5回: Presenting speech and speakers: Quoting verbs

第6回: Representing people: Language and identity (a)

第7回: Representing people: Language and identity (b)

第8回: Representing action: Transitivity and verb processes

第9回: Concealing and taking for granted: Nominalisation and presupposition

第10回: Persuading with abstraction: Rhetoric and metaphor (a)

第11回: Persuading with abstraction: Rhetoric and metaphor (b)

第12回: Committing and evading: Truth, modality and hedging

第13回: Doing critical discourse analysis and its discontents

第14回: Course review

履修上の注意

No prerequisite.

準備学習（予習・復習等）の内容

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and participation in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

How to Do Critical Discourse Analysis by D. Machin and A. Mayr. (Sage)

参考書

Not assigned.

成績評価の方法

Requirements:

Minimum of three critiques of relevant articles

Two short papers (3–5 pages)

Weekly summary (100–150 words) and two discussion questions

Assessment:

Class participation 30%

Assignments 30%

Portfolio 40%

その他

None.

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	英語教育学研究（学習指導要領と指導法）		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 Ph.D.	尾関 直子	

授業の概要・到達目標

高校の新学習指導要領に対応した4技能のすべてを向上させ、発信力を養う指導方法を考える。

平成20年度に中学の新学習指導要領が先行実施され、平成25年度には、いよいよ高校で新学習指導要領が実施された。新学習指導要領では、中学の「英語」では、コミュニケーション能力の養成が強調され、高校の「コミュニケーション英語」では、4技能が統合された英語能力の育成、「英語表現」では、スピーキングとライティングの発信力の養成に力点が置かれ、「英語の授業は英語で行う」ことが基本とされる。各高等学校では、CAN-DO リストを目標設定のために作成され、4技能を測る入試の導入も具体的に検討されている。中等教育での英語教育が大きく変化しつつある時代にふさわしい英語教授法の理論と実践をこの授業で身につける。生徒が英語を好きになり、コミュニケーション能力や論理的な思考力を身につけ、最終的には、積極的に英語を学ぼうとする自律した学習者になるには、どのような英語の授業をすればいいのかを共に真剣に考えたい。

授業内容

第1回: 授業の概要説明, シラバス説明

第2回: 改訂の経緯とねらい・基本方針, 新学習指導要領の全体像, 新旧学習指導要領の対比

第3回: コミュニケーション英語: 目標, 内容, 配慮事項, 内容の取扱い, 展開案

第4回: 英語表現: 目標, 内容, 配慮事項, 内容の取扱い, 展開案

第5回: 英語会話: 目標, 内容, 配慮事項, 内容の取扱い, 展開案

第6回: 言語の使用場面, 言語の働き, 言語材料, 配慮事項, 指導計画作成上の配慮事項, 教材の開発, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成, 今回の改訂について

第7回: (CEFR) The Common European Framework in its political and educational context

第8回: (CEFR) Approach adopted

第9回: (CEFR) Common Reference Levels

第10回: (CEFR) Language use and the language user/learner

第11回: (CEFR) The user/learner's competence

第12回: (CEFR) Language learning and teaching

第13回: (CEFR) Tasks and their role in language teaching

第14回: (CEFR) Linguistic diversification and the curriculum

履修上の注意

授業では、ディスカッションを頻繁に行うので、課題であるテキストを必ず読んでから授業に臨むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

高等学校の現学習指導要領を読んでおくこと。

教科書

『高等学校新学習指導要領の展開：外国語科英語編』岡部幸枝, 松本茂編（東京：明治図書, 2010年）

Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment. Council of Europe (2001). (New York: Cambridge.)

参考書

使用しない。

成績評価の方法

ジャーナルライティング 30%

指導案 30%

授業のプレゼンテーション 40%

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	英語教育学研究 (マテリアル・デベロップメント)		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	兼任兼任講師 博士 (応用言語学) 中谷 安男		

授業の概要・到達目標

既存の第二言語習得理論に基づいた、学習者の言語能力の向上に役立つ英語教材の開発に関してディスカッションを行う。英語のリスニング、リーディング、スピーキング、ライティングのそれぞれの技能を伸ばすには、どのような教材が有効で、どのようなシラバスデザインが必要なのかを考察する。また、いくつかの技能を統合したアプローチの導入や、異文化理解を推進するには、どのような教材が役に立つのかテキスト開発の基礎を学ぶ。CEFRなどの概念を導入したテキストやCALL教材の評価も行う。また、LESSONプランを実際に作成し、授業のデモンストラーションを行う。

授業内容

- 第1回: Introduction (イントロダクション: 授業の目的及び概要の説明, 授業の進め方, 課題の説明)
- 第2回: Similarities in Reading and Listening
- 第3回: Sample Formats for Listening Comprehension
- 第4回: Teaching Reading Comprehension
- 第5回: Developing Oral Proficiency
- 第6回: Using Corpus
- 第7回: A Curriculum Planning Guide for Teaching Writing
- 第8回: Expressive Writing
- 第9回: Discourse Strategies
- 第10回: Cohesion & Coherence
- 第11回: Move
- 第12回: IMRD
- 第14回: Review

履修上の注意

授業では、ディスカッションを頻繁に行うので、課題であるテキストを必ず読んでから授業に臨むこと。

準備学習 (予習・復習等) の内容

事前にテキストおよび課題を十分に予習しておくこと。

教科書

『Teaching Language in Context Heinle & Heinle; 3rd edition』Alice Omaggio Hadley (2000)
『Academic Writing Strategies for University Students』Nakatani. Y. (2016) (東京: 大修館書店)

参考書

授業内で指示する。

成績評価の方法

60分授業のLESSONプラン 2つ 30%
授業のプレゼンテーション 40%
論文のレビュー 30%

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	英語教育学研究 (英語教授法)		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	兼任兼任講師 博士 (応用言語学) 中谷 安男		

授業の概要・到達目標

既存の代表的な英語教授を概観し、どのような教授法が、なぜ有効なのか、第二言語習得理論に基づきディスカッションを行う。具体的には、学習者の情緒的要因、認知的要因を考慮して言語能力を養成するには、授業をいかに組み立て、どのような活動を取り入れ、どのような役割を教室内で果たせばいいのかを考察を行う。また、スピーキングやライティングに関する学習者のパフォーマンスをどのように評価するのかなどについて考慮する。以上のような観点から、授業の重要な方向性を決断するときに役立つ概念や考え方を考察する。

授業内容

- 第1回: Introduction (イントロダクション: 授業の目的及び概要の説明, 授業の進め方, 課題の説明)
- 第2回: Defining Language Proficiency
- 第3回: Proficiency and Language Acquisition Theory
- 第4回: Some Research Finding about Oral Proficiency
- 第5回: The Role of Individual Learner Factors in Second Language Learning
- 第6回: Principles and Priorities in Methodology
- 第7回: Proficiency Orientation of Existing Methodology
- 第8回: The Importance of context
- 第9回: Research on the Role of Context in Comprehension
- 第10回: Immersion and Content-Based Instruction
- 第11回: Academic Writing (1)
- 第13回: Academic Writing (2)
- 第14回: Review

履修上の注意

授業では、ディスカッションを頻繁に行うので、課題であるテキストを必ず読んでから授業に臨むこと。

準備学習 (予習・復習等) の内容

事前にテキストおよび課題を十分に予習しておくこと。

教科書

『Teaching Language in Context Heinle & Heinle; 3rd edition』Alice Omaggio Hadley (2000)

参考書

『Academic Writing Strategies for University Students』Nakatani. Y. (2016) (東京: 大修館書店)

成績評価の方法

授業中のプレゼンテーション 70%
論文 (指導法に関するもの) 30%

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	2018年度開講せず
科 目 名	英語教育学研究 (カリキュラムデザイン)		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 Ph.D. (Linguistics) 大須賀 直子		

授業の概要・到達目標

本講義のテーマは英語カリキュラムのデザインである。カリキュラムデザインとシラバスデザインの基礎と応用の理解を目標とする。

本講義ではまず、カリキュラムデザインについての基礎を学ぶ。すなわち、カリキュラムを設計する上で必要な、ニーズ分析、ゴール設定、コース内容の決定、シラバスデザイン、教材の選択、カリキュラムの評価などをどのようにおこなうかをできるだけ具体的に考察する。さらに、教師一人ひとりが置かれた環境の中で、基礎知識をどのように応用すればよいのかを検討する。最終的には受講生がカリキュラムデザインまたはシラバスデザインを作成し、プレゼンテーションを行う。

授業内容

- 第1回：導入（授業の概要・進め方等の説明）
- 第2回：Environment Analysis
- 第3回：Needs Analysis
- 第4回：Principles
- 第5回：Goals, Content and Sequencing
- 第6回：Format and Presentation
- 第7回：Monitoring and assessment
- 第8回：Evaluation
- 第9回：Approaches to Curriculum Design
- 第10回：Negotiated Syllabus
- 第11回：Adopting and Adapting an Existing Course Book
- 第12回：Introducing Changes
- 第13回：学生によるプレゼンテーション (1)
- 第14回：学生によるプレゼンテーション (2)

履修上の注意

授業内での議論に積極的に参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の英語文献は必ず事前に読んでくること。関連文献を積極的に読むこと。

教科書

『Language Curriculum Design』I.S.P. Nation and John Macalister (Routledge)

参考書

授業内で適宜指示する。

成績評価の方法

授業参加度、発表、レポート等によって総合的に評価する。

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	英語教育学研究 (スピーチコミュニケーション)		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	兼任講師 Ed.D. ロッセル、ヒュー		

授業の概要・到達目標

Course Components

- A) Presentations
Each student will give two 20-minute presentations—one practice, and one final. To give effective presentations, you will need to:
- 1) Carry out thorough and comprehensive research.
 - 2) Develop a well-structured speech that clearly explains your main points.
 - 3) Support and illustrate your main points through the incorporation of data, tables, graphs, quotations, and citations.
 - 4) Analyse your data, with a focus on addressing the question “So what?”.
 - 5) Incorporate English words and expressions that will enable you to communicate your points effectively to the audience.
 - 6) Make supporting PowerPoint slides that enable the audience to better understand your main points.
 - 7) Combine #1–4 and with effective presentation skills and to deliver an informative and stimulating presentation.
- B) Using the *WordEngine* website (requires a small fee):
You cannot express yourself clearly in any language if you don't know the words you need, and just as importantly, if you don't know how to correctly use the words you already “know”. Therefore, vocabulary study is an important component of this course, and each student will be expected to gain AT LEAST 300 Correct Responses per week on the Word Engine website. This website has been very carefully designed not only to develop your knowledge of words that are commonly used in academic contexts, but to adjust the words that you study to your individual level, and to re-test you five times over a 90-day period on all the words you study (to ensure that all the words you study enter your permanent memory).
the learning targets for this course include the development of your research, PowerPoint, and presentation skills, as well as that of your academic vocabulary and oral fluency.

授業内容

- Week 1—Introduction/Goals of the course.
Week 2—Using monolingual dictionaries/Complete *My Presentation Topic*.
Week 3—Choose topics and begin presentation preparation/Complete *Presentation Outline*.
Week 4—View and analyse model presentation/Complete *Paraphrasing Exercises*.
Week 5—Submit and discuss presentation outline/Complete *My Fluency Expressions*.
Week 6—Submit and discuss fluency expressions/Complete *Summarising Exercises*.
Week 7—Submit script and *PowerPoint* slides.
Week 8—Revise script and *PowerPoint* slides.
Week 9—Practice presentations—Round A/Complete *Checklist and Self-Evaluation*.
Week 10—Practice presentations—Round B/Complete *Checklist and Self-Evaluation*.
Week 11—Presentation analysis and improvement
Week 12—Presentation analysis and improvement
Week 13—Final presentations—Round A/ Complete *Final Self-Evaluation*.
Week 14—Final presentations—Round B/ Complete *Final Self-Evaluation/ Course questionnaire*.

履修上の注意

Students will be required to select academic presentation topics, conduct research in English, support their claims with evidence, present and analyse relevant data, develop *PowerPoint* slides that improve the clarity and comprehensibility of their presentations, and regularly use *Word Engine* to expand their academic vocabulary.

準備学習（予習・復習等）の内容

It is important that you do your homework every class, NOT for the teacher or to pass a test, but for YOU, and your classmates. Since the homework usually helps you to prepare for the next class, much of the value of doing your homework will be lost if you do it late. If you do your homework each week you will learn more, and you will gradually see an improvement in your ability to communicate your ideas clearly (IN ENGLISH!!) during your discussions and presentations.

Memory research shows that you will learn more if you use *WordEngine* for short periods regularly (rather than fewer longer sessions). To gain the full benefits of using this program, you should use it for at least 5 minutes per day, with the goal of moving as many words as possible into Boxes 4 and 5 during the course, and to then continue moving them into your permanent memory during August, September, and the second semester. (You can see the distribution of your words on *My Page* on the *WordEngine* website).

教科書

Wallwork, Adrian. [English for Presentations at International Conferences, 2nd Ed.]. (Cham, Switzerland: Springer,) 2016. Print.

参考書

A good English-English LEARNER dictionary is required. (And you must bring it to each class!!)

I recommend, either the electronic form, or, if you prefer, the compact Japanese paper edition, of one of the following dictionaries:

- i. *Longman Dictionary of Contemporary English*,
- ii. *Oxford Dictionary for Advanced Learners*,
- iii. *Macmillan Dictionary for Advanced Learners of American English*,
- iv. *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*

成績評価の方法

Your grade for the course will be determined in the following manner:

- Participation in discussions and use of English: 30%
- Homework Completion: 20%
- Presentations (15+15): 30%
- Use of *Word Engine*: 20%

その他

None.

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	英語教育学研究（心理言語学）		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 博士（国際広報メディア） 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

第二言語の習得に影響を与える認知プロセス、そのプロセスを活性化するインプット、インタラクション、アウトプットの役割に焦点をあて、第二言語教育を効果的に進めていく上で必要となる知識や技能を身につけるとともに、そのような教育の効果を検証する方法を身につけることを目標とする。

授業では、英語または日本語で書かれた第二言語習得論に関する基本的な文献を取り上げ、教員による講義、担当者による報告、疑問点・問題点に関する全体討議、教員による補足説明等を行う。文献を深く読み解く上で必須となる研究手法（統計解析）についても、代表的な方法を取り上げ、実際にデータを用いながら体験的に学ぶ。

授業内容

第1 セクション：第二言語習得研究の動向と課題

第1回：イントロダクション（授業の概要説明など）、心理言語学と第二言語習得研究

第2回：第二言語習得研究と第二言語教育との関連

第3回：第二言語習得の概念モデル

第2 セクション：第二言語習得研究の主要テーマ

第4回：第二言語習得とインプット

第5回：第二言語習得とインタラクション

第6回：第二言語習得とアウトプット

第7回：研究計画の発表・討議（1）

第8回：第二言語習得とタスク、フォーカス・オン・フォーム

第9回：第二言語習得の研究法—質的研究

第10回：第二言語習得の研究法—質的研究の実習

第11回：研究計画の発表・討議（2）

第3 セクション：第二言語習得の研究計画の作成と討議

第12回：第二言語教育の原理・原則（1）

第13回：第二言語教育の原理・原則（2）

第14回：効果的な第二言語教育に向けて

*講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の作成を含めた授業前に入念な準備が要求されます。

教科書

毎回、ハンドアウトを配布します。

参考書

The study of second language acquisition (2nd Edition). Ellis, R. (2008). (Oxford: Oxford University Press.)

Theories in second language acquisition: An introduction. VanPatten, B., & Williams, J. (Eds.) (2007). (Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.)

成績評価の方法

授業（討議含む）への参加状況、課題発表、レポートにより、総合的に判断します。

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	英語教育学研究（インストラクショナル・コミュニケーション）		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任准教授 博士（学術） ルーゲン、ブライアン		

授業の概要・到達目標

Instructional communication is the study of how communication skills and competencies relate to learning in instructional contexts. This course examines the foundations of instructional communication in the context of English education. The course introduces students to the guiding principles, theories, and processes of instructional communication, while also offering students practice in integrating effective instructional communication strategies with particular teaching methods in hypothetical instructional contexts.

The goals of the course are:

- 1) to learn the major theories that influence the field of instructional communication.
- 2) to gain an understanding of the characteristics and competencies of instructional communication.
- 3) to analyze how instructional communication behaviors are applied to dominant methodologies for teaching second languages.
- 4) to demonstrate key instructional communication behaviors, with confidence and clarity, through a series of micro-teaching demonstrations.

授業内容

Week 1: Introduction to the course; introduction to instructional communication

Week 2: Instructional communication as an emerging discipline

Week 3: Understanding the audience: students' communication traits

Week 4: Teacher credibility and aggressive communication traits

Week 5: Humor and clarity

Week 6: Teacher immediacy

Week 7: Teacher and student affinity-seeking in the classroom

Week 8: Micro-teaching demonstrations

Week 9: Methods survey: Grammar-translation method

Week 10: Methods survey: Audiolingual method

Week 11: Methods survey: Communicative language teaching

Week 12: Methods survey: Task-based language teaching

Week 13: Micro-teaching demonstrations

Week 14: Review; wrap-up; final essay due

履修上の注意

In this course, there will be frequent whole-class and small-group discussions, so students must complete the reading assignments before class every week.

準備学習（予習・復習等）の内容

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and participation in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

Handbook of Instructional Communication by Timothy P. Mottet, Virginia P. Richmond, James C. McCroskey (Routledge).

参考書

None.

成績評価の方法

Participation: 30%

Micro-teaching demonstration #1: 20%

Micro-teaching demonstration #2: 20%

Final essay: 30%

その他

None.

英語教育学研究		備 考	
科 目 名	リサーチメソッド研究 (量的研究方法)		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	兼担教授 博士 (学術) 中村 和幸		

授業の概要・到達目標

本授業は、別に開講されるリサーチメソッド (質的研究方法) と対になるものであり、両授業の履修によって、社会調査の理論を概観し、具体的な方法の基礎を身につける。

調査やデータ収集から展開される量的研究を適切に進めるには、最終的なデータ分析で得ることができる知見の内容を理解した上で、調査の企画や仮説の構築、データ収集法の設計を行う必要がある。本講義では、このような点を常に意識しながら、データ分析技法を中心に量的研究法の基礎について説明する。

最初に量的研究法について概観し、度数分布、平均、分散といったデータ記述・記述統計量や、ヒストグラム、散布図などの可視化の基礎を扱う。次に、カテゴリカルデータ分析 (クロス集計)、推定、検定、分散分析、回帰分析等について説明する。最後に、これらを基礎とした調査設計について学ぶ。以上の内容について、講義の他に計算機演習も併用することで、理解を深めながら方法を身につける。

これによって、調査企画・設計の能力やデータ収集の技術といった、各種調査研究における量的研究を進めるための基礎知識と能力を身につけることを目的とする。

授業内容

- 第1回：人文社会科学における調査と量的研究方法
- 第2回：調査目的と調査方法、データの記述と可視化
- 第3回：記述統計量
- 第4回：演習Ⅰ (記述統計・可視化)
- 第5回：クロス集計
- 第6回：演習Ⅱ (クロス集計)
- 第7回：推測統計の考え方と推定
- 第8回：演習Ⅲ (推定)
- 第9回：統計的仮説検定の考え方と平均値の差の検定
- 第10回：分散分析と多重比較
- 第11回：演習Ⅳ (検定)
- 第12回：回帰分析
- 第13回：演習Ⅴ (回帰分析・調査の設計と量的研究方法)
- 第14回：発展的な量的研究方法

履修上の注意

統計手法に関しては考え方中心で説明するため、数学的に特別な準備は必要ない。

準備学習 (予習・復習等) の内容

各自の研究課題に関連するデータを準備する、講義後の復習として演習内容を別のデータで実施するなど、積極的な予復習を行うこと。

教科書

『社会統計学』片瀬一男 (放送大学教育振興会, 2007年)

参考書

『社会統計学—社会調査のためのデータ分析入門』G. W. ボーンシュエット, D. ノーキ著, 海野道郎, 中村隆監訳 (ハーベスト社, 1992年)
『ガイドブック社会調査』森岡清志 (日本評論社, 2007年)

成績評価の方法

毎回の演習課題による到達度評価50%, 最終レポート課題50%

その他

特になし。

英語教育学研究		備 考	英語による授業
科 目 名	リサーチメソッド研究 (質的研究方法)		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 Ed.D. アレン, キャサリン		

授業の概要・到達目標

Qualitative research focuses on how the individual makes sense of the world. It borrows from many disciplines and thus there is no single method or practice that is privileged. Since qualitative research is multidisciplinary, it uses a multi-method approach, which also provides a deeper understanding of the situation.

To enable researchers to engage in qualitative research, the course introduces a variety of methods that may be used, depending on the questions being asked and the social context. Examples of qualitative research will be analyzed and discussed.

授業内容

- 第1回：Introduction to qualitative research
- 第2回：What makes research “qualitative”
- 第3回：Narrative inquiry
- 第4回：Case study
- 第5回：Ethnography
- 第6回：Action research
- 第7回：Mixed methods
- 第8回：Observation
- 第9回：Interviews
- 第10回：Open-response items in questionnaires
- 第11回：Introspective techniques
- 第12回：Discourse analysis
- 第13回：Ethics and trustworthiness
- 第14回：Writing up your research; Course review

履修上の注意

No prerequisite.

準備学習 (予習・復習等) の内容

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and participation in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

Qualitative Research in Applied Linguistics: A Practical Introduction by J. Heigham and R. Croker (Hodder Arnold)

参考書

Not assigned.

成績評価の方法

Requirements:

Minimum of two short papers (3–5 pages)

Weekly summary (100–150 words) and two discussion questions

Analysis of research articles using qualitative research methods—Minimum of three articles

Assessment:

Class participation 30%

Assignments 30%

Portfolio 40%

その他

None.

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	視覚文化研究（演劇）		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 博士（文学） 萩原 健		

授業の概要・到達目標

演劇（舞台芸術という意味で、ダンスやパフォーマンスなどを含みます）をたのしむ人々のことを、一般に「観客」といいます。すなわち「観る客」であり、よって、演劇は、視覚に重きを置く文化事象のひとつと位置づけられます。

またこの関連で、演劇は、同じく視覚を通じた受容が主となる、絵画や彫刻、インスタレーションといった造形美術と、あるいはサイバー空間上の動画やスマートフォンのアプリと、多かれ少なかれ、接点を持ちえます。

さらに、「演劇的なもの」を考察するならば、芸術ではないと一般的には理解される分野での文化事象も視野に入ります。たとえば冠婚葬祭の儀式や細かな段取りが台本のように定められた会議、あるいは、「パフォーマンス」という語がしばしば使われる、スポーツの試合もそうです。

こうした一連の事象を考えるための格好の手掛かりとなるのがフィッシャー＝リヒテ著『演劇学へのいざない 研究の基礎』（原書2010）です。同書の内容を吟味する取り組みを通じて、履修者の方々が各自の研究を展開するための補助線を見出していただくことが、本授業での到達目標です（ただし、初回に出席した参加者間での意見交換の内容によっては課題図書の変更もありえます）。

授業内容

- 第1回：導入：「まえがき」＋「訳者あとがき」
 第2回：（「プロローグ」＋）1 演劇概念/2 学科の歴史について
 第3回：3-1 上演概念に関する考察（1）
 第4回：3-2 同（2）
 第5回：4-1 上演分析（1）
 第6回：4-2 同（2）
 第7回：5-1 演劇史研究（1）
 第8回：5-2 同（2）
 第9回：6 理論形成
 第10回：7-1 上演における諸文化の編み合わせ（1）
 第11回：7-2 同（2）
 第12回：8-1 諸芸術の上演（1）
 第13回：8-2 同（2）/9-1 文化上演（1）
 第14回：9-2 文化上演（2）（＋「エピローグ」）

履修上の注意

講義と称していますが、むしろ履修者の方々と対話を基礎にします。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、各回の当該部分を事前に読んでおいていただき（＝本文で言及されている固有名詞や文献について調べておいていただき）、授業当日は各回の内容について意見交換をします。またこの意見交換から得られた各自の成果を、各回の結び、コメントシートにまとめていただきます。

教科書

『演劇学へのいざない 研究の基礎』エリカ・フィッシャー＝リヒテ（国書刊行会、2013年）

参考書

『ポストドラマ演劇』ハンス＝ティース・レーマン（同学社、2002年）

成績評価の方法

コメントシート（50％）、学期末レポート（自身の研究との関連について）（50％）

その他

特にありません。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容研究（比較社会）		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 鹿島 茂		

授業の概要・到達目標

18世紀の文人 Louis-Sebastien Mercier のパリ風俗観察記《Tableau de Paris》を原語で読むことで、近代的な都市の成立の過程を詳しく見て行きます。同時代の誰も意識しなかった都市風俗の変化をひとり Mercier だけが気づいて書き留めてくれたおかげで、われわれは、大革命直前のパリを目前に見るような感覚で理解することができます。文体は易しく、中級程度のフランス語の知識があれば、読み進めることができます。授業を通じて、フランス語のテキストが正確に発音でき、正しく日本語に翻訳できることを目指します。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：Vue des Alpes
 第3回：Grandeur demesuree de la capitale
 第4回：Erreur rectifiee
 第5回：Population de la capitale
 第6回：Contraste des Parisiens avec l'habitant de Londres
 第7回：Babile
 第8回：Cris de Paris
 第9回：L'air vicie
 第10回：Latrines
 第11回：Cimetiere ferme
 第12回：Abreuvoirs
 第13回：La nouvelle muraille
 第14回：Hotel de Bretonvilliers

履修上の注意

毎回、前もって指名された院生が訳読を行い、そのあとでテキストの解説を行うという古典的なかたちで授業を進めます。

準備学習（予習・復習等）の内容

演習参加者全員が次回用テキストの訳文を作成してすること。

教科書

Louis-Sebastien Mercier 《Tableau de Paris》FRANCOIS MASPERO, 1982

現在絶版なのでプリントで処理します。

参考書

そのつど指示する。

成績評価の方法

授業への参加度およびレポートによって評価する。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容研究（比較文化）		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 鹿島 茂		

授業の概要・到達目標

春学期に引き続き、18世紀の文人 Louis-Sebastien Mercier のパリ風俗観察記《Tableau de Paris》を原語で読み進めて行きます。Mercier の観察はパリのあらゆる領域にわたっているので、18世紀の社会学事典としても役立ちます。授業を通じて、フランス語のテキストが正確に発音でき、正しく日本語に翻訳できることを目指します。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：Caisse de Poissy
- 第3回：Les heures du jour
- 第4回：Ou est Democrite!
- 第5回：Le Pont-Neuf
- 第6回：Le faubour Saint-Marcel
- 第7回：Bastille
- 第8回：Bicetre
- 第9回：Rue Vivienne
- 第10回：Les huit classe. Etats indefinissables
- 第11回：Melange des individus
- 第12回：Noblesse
- 第13回：Titres de noblesse
- 第14回：Les deux noblesse

履修上の注意

毎回、前もって指名された院生が訳読を行い、そのあとでテキストの解説を行うという古典的なかたちで授業を進めます。

準備学習（予習・復習等）の内容

演習参加者全員が次回用テキストの訳文を作成してくること。

教科書

Louis-Sebastien Mercier 《Tableau de Paris》FRANCOIS MASPERO, 1982

現在絶版なのでプリントで処理します。

参考書

そのつど指示する。

成績評価の方法

授業への参加度およびレポートによって評価する。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容研究（比較文学）		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 張 競		

授業の概要・到達目標

〔授業の概要〕 比較文学の基本的な考え方や比較文学研究を行う上で基本となる知識を学ぶ。比較文学の研究対象や研究方法および研究史について講義を行い、さらに比較文学研究の実例を挙げながら、この学問領域がどのように発展してきたかを講じる。また、現在、未解明の課題や研究の動向を紹介し、修士論文のテーマ選択に関する問題についてさまざまな角度から検討する。

〔到達目標〕 一学期の学習を通して、比較文学研究の方法、研究史、これまでの主な研究成果や、日本と海外での研究スタイルの異同、および今後の課題などの専門知識を修得するのが目標である。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：比較文学とは何か
- 第3回：比較文学の研究史
- 第4回：英米文学の紹介と明治文学
- 第5回：森鴎外の翻訳と創作
- 第6回：上田敏の訳業
- 第7回：尾崎紅葉とアメリカ大衆小説
- 第8回：永井荷風の『珊瑚集』
- 第9回：佐藤春夫と西洋文学
- 第10回：日本におけるホイトマン
- 第11回：イブセンと近代日本
- 第12回：中国における近代日本文学の翻訳
- 第13回：東アジアにおける大正文学受容
- 第14回：まとめ

履修上の注意

この授業を理解するには、多くの文学作品を知っておくことが必要である。授業では事前に読んだ本を要約してもらい、口頭で発表してもらうことがある。与えられた課題をこなせない場合は平常点が引かれるので、ご留意いただきたい。授業では英語の作品を取り上げることがあるので、原書が読める程度の語学力が求められる。

授業内容は高度に専門化したもので、ほかの領域を専攻する学生にとって非常に難しい。履修の際、ご留意いただきたい。

なお、初回のイントロダクションに参加しない者は履修が認められないので、ご注意ください。

準備学習（予習・復習等）の内容

講義中に多くの文学作品を取り上げるので、作品内容を知らないと、講義を理解できない。指定した本を事前に読んでおくのが受講の前提になる。毎回、読書リストを配布するので、熟読してから授業に臨んでほしい。読書量が多いので、そのための時間を必ず確保してください。

教科書

特になし。

参考書

- 『世界の中の日本文学』芳賀徹編（東京大学出版会）
- 『近代日本の翻訳文化』亀井俊介（中央公論新社）

成績評価の方法

授業の参加度30％、プレゼンテーション40％、レポート30％

その他

特になし。

博士前期課程

特修科目

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容研究（日本文化史）		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 渡 浩一		

授業の概要・到達目標

「日本の宗教と日本人の信仰」というテーマで、下記2点の新書を教科書として、それに則して、日本の宗教の歴史と日本人の信仰の在り方について扱う。日本の宗教史の概略を理解してもらうこと、日本人の信仰の特質とその歴史的背景を理解してもらうことを到達目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：日本宗教史・古代—仏教の浸透と神々（1）
- 第3回：日本宗教史・古代—仏教の浸透と神々（2）
- 第4回：日本宗教史・中世—神仏論の展開（1）
- 第5回：日本宗教史・中世—神仏論の展開（2）
- 第6回：日本宗教史・近世—世俗と宗教（1）
- 第7回：日本宗教史・近世—世俗と宗教（2）
- 第8回：日本宗教史・近代—近代化と宗教（1）
- 第9回：日本宗教史・近代—近代化と宗教（2）
- 第10回：「無宗教」の中身
- 第11回：「無宗教」の歴史
- 第12回：瘦せた宗教観
- 第13回：日常主義と宗教
- 第14回：墓のない村

履修上の注意

半ば演習形式の講義となる。教科書を精読し予習しておくこと。授業中に紹介・説明できる参考資料には限りがあるので、提示する参考資料に積極的に当たり、その不足を補うこと。また、授業中、積極的に発言すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に教科書の当該箇所を精読し、疑問点や問題となる所を整理して授業に臨むこと。また、復習として、重要な点については、参考文献を読むなどして発展的学習をして理解を深めること。

教科書

- 『日本宗教史』末木文美士（岩波新書）
- 『日本人はなぜ無宗教なのか』阿満利磨（ちくま新書）

参考書

- 『日本宗教事典』（弘文堂）
- 村上重良『日本宗教事典』（講談社学術文庫）
- 大島建彦他編『日本の神仏の辞典』（大修館書店）
- 宮田登他編『日本民俗宗教辞典』（東京堂出版）
- 山折哲雄『日本の「宗教」はどこへ行くのか』（角川選書）
- その他、必要に応じて適宜提示する。

成績評価の方法

平常点（受講態度に見られる積極性—どれだけ予習をしてどれだけ的確な質問をするかなど）およびレポートによる。評価割合はそれぞれ50%とする。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容研究（日本近代文学）		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 博士（学術） 吉田 悦志		

授業の概要・到達目標

吉田悦志著「明治大学文人物語」を解説しながら、明治大学と関係を持った文人たちの足跡を追う。大学という学的環境の中にいかに豊富な知的財貨が存在するかを、学び各自の論文に生かすことを到達目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：明治大学と地域性（1）
- 第3回：明治大学と地域性（2）
- 第4回：明治大学と地域性（3）
- 第5回：創立者たち（1）
- 第6回：創立者たち（2）
- 第7回：創立者たち（3）
- 第8回：夏目漱石・上田敏（1）
- 第9回：夏目漱石・上田敏（2）
- 第10回：夏目漱石・上田敏（3）
- 第11回：笹川臨風（1）
- 第12回：笹川臨風（2）
- 第13回：古賀政男と阿久悠
- 第14回：まとめ：阿久悠

履修上の注意

講義と演習を組み合わせで行い、基本的には明治大学に関係した文人たちの動向を追いながら、時代思潮と作家や評論家や作詞家、作家と作品、作家のネットワークなどを理解する。

準備学習（予習・復習等）の内容

吉田悦志著『明治大学文人物語』をあらかじめ読んでおくこと。

教科書

- 『明治大学文人物語』吉田悦志（明治大学出版会）

参考書

文献だけではなく映画、楽曲等幅広く視聴する。

成績評価の方法

適宜行う演習形式の授業（50%）、発表力（20%）、平常点（質疑応答等発言力）（30%）

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容研究（映画）		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	専任教授 博士（文学） 瀬川 裕司		

授業の概要・到達目標

映画文化の振興にとって、戦争ほど大きな影響を与えるものはないといわれる。しかし、第二次世界大戦の時期をとってみても、たとえばアメリカでは従来通りの製作が持続されて映画界に空前の活況がもたらされ、ドイツではあえて「無害な娯楽映画」が大量生産されたのに対し、日本では映画界が完全に国家の統制下に置かれ、「戦争遂行に役立つ」映画のみがつくられたといったように、戦争の時期にどのような映画が生産されるかは、国によって大きく異なっている。この授業では、その時期の代表的な日本映画を視聴しながら、「統制された映画」とはどのようなものであったかを観察し、歴史的な文化的背景、政治と映画文化の密接な関係についても考察し、理解を深めたい。比較研究のために、同時期に他国でつくられた映画の断片を視聴する場合もある。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 第2回：「満映」と李香蘭という虚構（1）
 第3回：「満映」と李香蘭という虚構（2）
 第4回：「満映」と李香蘭という虚構（3）
 第5回：「軍神」の映画（1）
 第6回：「軍神」の映画（2）
 第7回：「軍神」の映画（3）
 第8回：兵学校映画と「銃後の守り」（1）
 第9回：「兵学校映画」と「銃後の守り」（2）
 第10回：戦争期の時代劇映画（1）
 第11回：戦争期の時代劇映画（2）
 第12回：逃避的娯楽映画（1）
 第13回：逃避的娯楽映画（2）
 第14回：総括

履修上の注意

この科目は「講義」と分類されているが、授業が一方通行になることを避けた。参加者は授業中、活発な意見を述べ、議論することが求められる。また、授業中に参考文献を指示するので、それを読んで授業に備える。教室外で見ておくべき映画を指定することもある。

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に、指定した参考書の該当箇所を読み、次回の授業内容に関する専門用語について辞典等で調べる。復習として、参考書の該当箇所を読むこと。

教科書

特に定めない。毎回、DVD もしくは VHS を視聴する。

参考書

『帝国の銀幕』ピーター・B・ハーイ（名古屋大学出版会）
 『日本映画史』佐藤忠男（岩波書店）

成績評価の方法

受講者は毎回の講義の最後に授業内容に関するコメントを提出し、さらに学期末にレポートを提出しなければならない。成績は、コメントに関して50％、レポートを50％で評価する。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容研究（比較演劇）		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	兼任兼任講師 鈴木 国男		

授業の概要・到達目標

現代日本の音楽劇を巡る様々な現象について論じる。そのためには、古代から近代、西洋から日本に至る演劇を幅広く概観し、理論的・歴史的裏づけをしっかりと把握する必要がある。音楽・演劇に留まらず、広く芸術全体の中で位置づける視点、舞台芸術を構成する様々な要素の融合を的確に分析する方法、そして新しいジャンルに対する柔軟な感性が求められる。限られた時間の中ではあるが、それらについてできるだけ総合的に解説しつつ、具体的な作品や事例について考察したい。それにより、芸術作品を客観的・主体的に研究する力を養うことが到達目標である。

授業内容

- 第1回：イントロダクション：メディアから見る芸術
 第2回：映画と演劇
 第3回：古代から中世までのヨーロッパにおける音楽劇
 第4回：演劇と空間：古今東西の様々な劇場
 第5回：演劇における美術・仮面・化粧
 第6回：オペラの誕生
 第7回：オペラの展開：イタリア・フランス・オーストリア
 第8回：ミュージカルの誕生
 第9回：近代日本の音楽劇
 第10回：宝塚歌劇（1）
 第11回：宝塚歌劇（2）
 第12回：2・5次元ミュージカル（1）
 第13回：2・5次元ミュージカル（2）
 第14回：まとめ：21世紀における音楽劇の問題と可能性

履修上の注意

毎回小レポートを課す。内容や提出方法については初回の授業時に説明する。

準備学習（予習・復習等）の内容

音楽劇を含むできるだけ多くの舞台芸術に接し、文献を読む。

教科書

特に用いない。必要な資料はプリントで配布する。

参考書

授業中に適宜紹介する。

成績評価の方法

試験は行わず、平常点（毎回のレポートと質疑応答の内容）により評価する。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容研究（記号と環境A）		
開 講 期	春学期	単 位	演 2
担 当 者	兼任講師 原田 義也		

授業の概要・到達目標

現代文明社会が、戦争やテロ、公害や乱開発を抑止することができず、さらには生きる希望を失って自ら命を絶ちたいと願う人々を生み出し続けているという事態に直面して、私たちは、自らが今日まで疑うことなく抱き続けてきた常識や価値観を、根本的かつ謙虚に見直す必要に迫られています。この喫緊の課題に取り組むには、何よりもまず、私たち自身の世界認識の方法を多角的に捉え直し、自らを取り巻く環境との間に新しい有和/融和的な知覚・行動様式を見出す思考技術を身につけることが求められますが、それを行っていく上で、批判的思考としてのセミオ・リテラシーは、今日益々その重要性を増しているといえます。

このような問題意識に立脚しつつ、本授業では、世界認識のあり方をめぐる現代の諸問題を「記号と環境」の主題の下に概観・再考し、私たち一人ひとりの心に「新しい民主主義のプロジェクトが抱えて立つ概念的基盤を打ち立てる」（ネグリ＝ハート）ことを目標としながら、毎回の講義テーマに対する理解を深めていきます。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン——授業の概要・到達目標
 第2回 パースの記号類型（1）
 第3回 パースの記号類型（2）
 第4回 パースの仮説形成（1）
 第5回 パースの仮説形成（2）
 第6回 佐藤信夫のレトリック論（1）
 第7回 佐藤信夫のレトリック論（2）
 第8回 レヴィ＝ストロースのプリコラージュ（1）
 第9回 レヴィ＝ストロースのプリコラージュ（2）
 第10回 記号とデザイン（1）
 第11回 記号とデザイン（2）
 第12回 記号とアフョダンス（1）
 第13回 記号とアフョダンス（2）
 第14回 まとめ

履修上の注意

本授業では、記号論とその関連分野（言語学・文化人類学・生物学等）にまつわる若干の専門用語を取り扱いますが、授業目標の達成に必要な説明はその都度行いますので、基本的に履修に際しての当該分野における特別な準備は必要ありません。

なお、授業内容は、議論展開および進捗状況に応じて多少変更する場合があります。

準備学習（予習・復習等）の内容

本授業では、必要に応じてプリント・資料等を配布します。事前に目を通すべき資料や踏まえるべき知識については、前週までにその旨を伝えますので、配布資料や参考書等で調査・確認の上、授業に臨んでください。

教科書

特に指定はありません。

参考書

- 『パースの記号学』米盛裕二（勁草書房）
 『レトリックの記号論』佐藤信夫（講談社学術文庫）
 『野生の思考』レヴィ＝ストロース（みすず書房）
 『アフョダンス——新しい認知の理論』佐々木正人（岩波書店）
 その他

成績評価の方法

成績評価の内訳は、授業への参加状況およびミニッツペーパーが70％、期末レポートが30％です。

その他

授業の到達目標に向けて、共に探究の歩みを進めましょう。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	文化関係・文化変容研究（記号と環境B）		
開 講 期	秋学期	単 位	演 2
担 当 者	兼任講師 原田 義也		

授業の概要・到達目標

現代文明社会が、戦争やテロ、公害や乱開発を抑止することができず、さらには生きる希望を失って自ら命を絶ちたいと願う人々を生み出し続けているという事態に直面して、私たちは、自らが今日まで疑うことなく抱き続けてきた常識や価値観を、根本的かつ謙虚に見直す必要に迫られています。この喫緊の課題に取り組むには、何よりもまず、私たち自身の世界認識の方法を多角的に捉え直し、自らを取り巻く環境との間に新しい有和/融和的な知覚・行動様式を見出す思考技術を身につけることが求められますが、それを行っていく上で、批判的思考としてのセミオ・リテラシーは、今日益々その重要性を増しているといえます。

このような問題意識に立脚しつつ、本授業では、世界認識のあり方をめぐる現代の諸問題を「記号と環境」の主題の下に概観・再考し、私たち一人ひとりの心に「新しい民主主義のプロジェクトが抱えて立つ概念的基盤を打ち立てる」（ネグリ＝ハート）ことを目標としながら、毎回の講義テーマに対する理解を深めていきます。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン——授業の概要・到達目標
 第2回 象徴表現とは何か（1）
 第3回 象徴表現とは何か（2）
 第4回 声の文化と文字の文化（1）
 第5回 声の文化と文字の文化（2）
 第6回 詩と形式（1）
 第7回 詩と形式（2）
 第8回 ユクスキュルの環世界論（1）
 第9回 ユクスキュルの環世界論（2）
 第10回 ソロモンの指環（1）
 第11回 ソロモンの指環（2）
 第12回 外来と在来のはざま（1）
 第13回 外来と在来のはざま（2）
 第14回 まとめ

履修上の注意

本授業では、記号論とその関連分野（言語学・文化人類学・生物学等）にまつわる若干の専門用語を取り扱いますが、授業目標の達成に必要な説明はその都度行いますので、基本的に履修に際しての当該分野における特別な準備は必要ありません。

なお、授業内容は、議論展開および進捗状況に応じて多少変更する場合があります。

準備学習（予習・復習等）の内容

本授業では、必要に応じてプリント・資料等を配布します。事前に目を通すべき資料や踏まえるべき知識については、前週までにその旨を伝えますので、配布資料や参考書等で調査・確認の上、授業に臨んでください。

教科書

特に指定はありません。

参考書

- 『象徴表現とはなにか』スペルベル（紀伊國屋書店）
 『声の文化と文字の文化』オング（藤原書店）
 『ロシア・詩的言語の未来を読む』工藤正廣（北大出版界）
 『生物から見た世界』ユクスキュル他（岩波書店）
 その他

成績評価の方法

成績評価の内訳は、授業への参加状況およびミニッツペーパーが70％、期末レポートが30％です。

その他

授業の到達目標に向けて、共に探究の歩みを進めましょう。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想研究A		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授		長尾 進

授業の概要・到達目標

この講義では、日本思想の内、武道をめぐる思想について学びます。

日本思想というものをどうとらえるかについては、仏・儒学における高僧・碩学の著作等を中心とした旧来的な大系づけのみではなく、そこに民衆レベルから創出される体験知に基づいて語られた文学論・芸術論・芸道論なども包含してとらえるべき、とする指摘があります。日本における武道思想は、中世末に能楽の芸道論に刺激を受けて形作られ、近世には仏・儒学の影響をうけてその深化が図られました。とくに禅学から受ける影響は近・現代の武道にも少なからず影響を及ぼしています。

本講義では、中世～近世初期の武道思想について概括的に捉えるとともに、その代表的著作の吟味を通して、日本武道に通底する思想の源流について、理解を深めることを到達目標とします。

授業内容

- 第1回：武道思想とは。日本思想の大系における武道思想の位置づけ。
第2回：中世における芸道論の芽生え
第3回：芸道論の武道への影響
第4回：能楽の影響、世阿弥『風姿花伝』（年来稽古条々）を読む
第5回：『風姿花伝』（別紙口伝）を読む
第6回：武芸伝書形成の背景
第7回：柳生宗矩『兵法家伝書』（殺人刀）を読む
第8回：『兵法家伝書』（活人剣）を読む
第9回：『兵法家伝書』と沢庵『不動智神妙録』
第10回：日本武道における禅の影響
第11回：宮本武蔵『五輪書』の武道思想上における位置づけ
第12回：『五輪書』を読む（地之巻、水之巻）
第13回：『五輪書』を読む（火之巻、風之巻、空之巻）
第14回：まとめ

履修上の注意

日本思想研究B（秋学期）と合わせて履修することによって、武道思想についての理解がより深まります。

準備学習（予習・復習等）の内容

当該の回に関わる資料は、その前週までに配布または配信しますので、必ず授業の前に読み、わからないところは図書やインターネット等で調べるなどして、準備学習（予習）してきてください。復習については、単元のまとまりごとにアサインメントを提出してもらいますので、その作成過程のなかで復習することになります。

教科書

教科書は用いません。授業の前週までに、資料を配布・配信します。また、適宜、ヴィジュアル教材（映像等）を使用します。

参考書

『近世芸道論 ―日本思想大系61』西山松之助・渡辺一郎・郡司正勝校注（岩波書店）

成績評価の方法

学期中に目を通した文献のなかから、とくに興味や関心をもったり、もっと深く掘り下げてみたいと思ったテーマに関する期末レポートを提出してもらいます（60％）。これに、単元のまとまりごとに提出してもらおうアサインメント（30％）、質問・意見など授業への意欲や積極性（10％）を勘案して、総合的に評価します。なお、出席はとりまじし、総合評価の際の参考にします。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想研究B		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授		長尾 進

授業の概要・到達目標

この講義では、日本思想の内、近代以降の武道・武士道思想について学びます。
近世中期以降、幕藩体制の緩みと武士の情弱化への警鐘もあって、武士や儒学者たちのなかから武道（武芸）・武士道への復古的思潮が顕れてきます。一方で山鹿素行をはじめとして、幕藩体制における農・工・商三民の上にたつ官僚としての武士のあるべき生き方を説いた「土道論」も著されるようになります。そのうち近世後期になると、異国船の出現などの「外患」を梃子として、富国強兵の論旨のもと新たな武道・武士道思想が創出されました。その最たるものは、後期水戸学における武道思想でした。

明治維新後、武道は文明開化の世情にそぐわないものとして一時衰退の一途を辿りますが、西南戦争を契機としてその実用的価値が見直され、治安組織（警察）における教育法として採用されて、学生の間にも普及してゆきます。そして、日清戦争を契機として国民の間に尚武の気風が起こり、これに愛国精神が重なって「武徳」という思想が登場してきます。一方で武士道は、近代においてキリスト教信仰や皇国史観などそれぞれの立場から見直され、また意味づけがなされ、一部では「武徳」思想との融合が図られてゆきます。

昭和初期から第二次世界大戦中にかけては、武道思想も戦時色の影響を受け、軍国主義的思潮のなかに組み込まれていきます。戦後は、その反動で占領政策に基づいた「民主主義」の名目での新しい武道のあり方が模索されてきました。

近代以降の武道思想は、このように時々社会情勢や国際情勢との間で大きく揺れ動いてきましたが、嘉納治五郎が説いた「精力最善活用」や「自他共栄」思想のように、本来はそれらとは一線を画した、また国境を越えて共感しうる普遍的価値をもつものです。この講義を通じて、受講生の皆さん自身が、日本武道や武士道本来の価値を見極めることが、到達目標です。

授業内容

- 第1回：江戸期思想史における武道思想や武士道論・土道論の位置づけ
第2回：復古・懐古主義的武士道論 大道寺友山『武道初心集』、山本常朝『葉隠』
第3回：儒学（古学派）における武士道論 山鹿素行の「土道論」と赤穂義士
第4回：享保の改革と武道思想 一获生徂徠『鈴録』
第5回：寛政の改革と武道思想 一松平定信『修身録』『修行録』
第6回：後期水戸学影響下の武道思想 一藤田東湖『常陸帯』と、米田是容『武技論』
第7回：嘉納治五郎と近代修養主義 「柔道一斑並ニ其教育上ノ価値」から「精力善用・自他共栄」へ
第8回：1890年代における「武徳」思想の登場と、近代における武士道論の諸相
第9回：日本人論としての新渡戸“Bushido—the Soul of Japan”（序文～5章のなかから代表的部分）
第10回：日本人論としての新渡戸“Bushido—the Soul of Japan”（6章～17章のなかから代表的部分）
第11回：近代武道における「道」の思想 嘉納治五郎と西久保弘道
第12回：戦時中における「体錬」の思潮と武道
第13回：戦後の占領政策と民主主義が武道思想に与えた影響
第14回：まとめ 一新しい武道思想の創造 「普遍」と「固有」の対立を超えて

履修上の注意

日本思想研究A（春学期）と合わせて履修することによって、武道思想についての理解がより深まります。

準備学習（予習・復習等）の内容

当該の回に関わる資料は、その前週までに配布または配信しますので、必ず授業の前に読み、わからないところは図書やインターネット等で調べるなどして、準備学習（予習）してきてください。復習については、単元のまとまりごとにアサインメントを提出してもらいますので、その作成過程のなかで復習することになります。

教科書

教科書は用いません。授業の前週までに、資料を配布・配信します。また、適宜、ヴィジュアル教材（映像等）を使用します。

参考書

『徳川思想小史』源了圓（中公新書）
『武道の名著』渡辺一郎編（東京コピイ出版部）
『剣術諸流心法論 上・下巻』筑波大学武道文化研究会編（筑波大学武道文化研究会）
『史料 明治武道史』渡辺一郎編（新人物往來社）
『近代武道史研究資料集』渡辺一郎編（筑波大学体育科学系・武道論）
『武道のすゝめ』中林信二（島津書房）
『今なぜ武道か』中村民雄（日本武道館）
『武士道の名著—日本人の精神史』（山本博文，中公新書）

成績評価の方法

学期中に目を通した文献のなかから、とくに興味や関心をもったり、もっと深く掘り下げてみたいと思ったテーマに関する期末レポートを提出してもらいます（60％）。これに、単元のまとまりごとに提出してもらおうアサインメント（30％）、質問・意見など授業への意欲や積極性（10％）を勘案して、総合的に評価します。なお、出席はとりまじし、総合評価の際の参考にします。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想研究C		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 博士（文学） 美濃部 仁		

授業の概要・到達目標

この授業では、西田幾多郎の思想をテキストに即して正確に理解するとともに、そこで考えられている問題を明らかにすることを目指します。

はじめに、最初の著作『善の研究』や論文「場所」を手がかりに導入をおこなったあと、論文「叡知の世界」と論文「私と汝」に中心的に取り組む予定です。

毎回担当者を決めてテキストを要約してもらい、それを基礎に参加者全員で議論するという形で授業をすすめようと考えています。

授業内容

- 第1回：西田幾多郎の生涯
- 第2回：『善の研究』と純粹経験
- 第3回：シェームズの純粹経験
- 第4回：ヘーゲルの具体的一般者と西田の純粹経験
- 第5回：まとめ
- 第6回：意識と意識を超える対象
- 第7回：「場所」(1)：於てある物と於てある場所
- 第8回：「場所」(2)：無の場所
- 第9回：「叡知の世界」(1)：判断的一般者
- 第10回：「叡知の世界」(2)：自覚的一般者
- 第11回：「叡知の世界」(3)：叡知的一般者
- 第12回：まとめ
- 第13回：「私と汝」(1)：環境と主体
- 第14回：「私と汝」(2)：個物

履修上の注意

哲学史の知識をある程度もっている学生を対象とした授業です。

準備学習（予習・復習等）の内容

テキストを予め読んで、質問をまとめてから授業に臨むようにしてください。

教科書

『西田幾多郎全集』（岩波書店、旧版第5巻・第6巻/新版第4巻・第5巻）あるいは『西田幾多郎哲学論集I』（岩波文庫）

参考書

- 『善の研究』西田幾多郎（岩波文庫）
- 『西谷啓治著作集』第14巻（創文社）
- 『西田幾多郎を読む』上田閑照（岩波書店）
- 『西田哲学を学ぶ人のために』大峯顕編（世界思想社）

成績評価の方法

授業における議論への貢献、また、授業中の発表によって評価します。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想研究D		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	専任教授 博士（文学） 美濃部 仁		

授業の概要・到達目標

この授業では、西田幾多郎の思想をテキストに即して正確に理解するとともに、そこで考えられている問題を明らかにすることを目指します。

秋学期は、論文「叡知の世界」と論文「私と汝」の概要を確認したあと、「弁証法的一般者としての世界」に中心的に取り組む予定です。

毎回担当者を決めてテキストを要約してもらい、それを基礎に参加者全員で議論するという形で授業をすすめようと考えています。

授業内容

- 第1回：西田の「場所」概念
- 第2回：「叡知の世界」の思想
- 第3回：「私と汝」の思想
- 第4回：まとめ
- 第5回：「弁証法的一般者としての世界」(1)：個物と一般者
- 第6回：「弁証法的一般者としての世界」(2)：主語と述語
- 第7回：「弁証法的一般者としての世界」(3)：時間と空間
- 第8回：まとめ
- 第9回：「弁証法的一般者としての世界」(4)：自己同一
- 第10回：「弁証法的一般者としての世界」(5)：世界
- 第11回：「弁証法的一般者としての世界」(6)：歴史
- 第12回：「弁証法的一般者としての世界」(7)：行為
- 第13回：「弁証法的一般者としての世界」(8)：行為的直観
- 第14回：まとめ

履修上の注意

哲学史の知識をある程度もっている学生を対象とした授業です。

準備学習（予習・復習等）の内容

テキストを予め読んで、質問を準備した上で授業に臨んでください。

教科書

『西田幾多郎全集』（岩波書店、旧版第7巻/新版第6巻）あるいは『西田幾多郎哲学論集II』（岩波文庫）

参考書

- 『善の研究』西田幾多郎（岩波文庫）
- 『西田幾多郎を読む』上田閑照（岩波書店）
- 『西田哲学を学ぶ人のために』大峯顕編（世界思想社）

成績評価の方法

授業における議論への貢献、また、授業中の発表によって評価します。

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想研究 E		
開 講 期	春学期	単 位	講 2
担 当 者	客員講師 博士（文学）	松本 直樹	

授業の概要・到達目標

20世紀初頭にヨーロッパでさかんに論じられたキリスト教の終末論の問題を手がかりに、宗教の言葉をどのように受けとるかについて考えます。

同じ時期に終末論の問題を論じた人は数多くいますが、この講座では、とくにドイツの神学者 R・ブルトマンの議論を取りあげます。彼の議論は同時代の哲学者 M・ハイデガーの実存哲学を大胆に参照しています。それゆえ、彼の議論を検討することを通じて、一般に宗教の言葉が哲学の言葉と、さらにはごくふつうの日常の言葉とどのように関わるかについて、一つの典型的な見方を理解することができます。また、講義時間に余裕があるなら、こうした議論と、近代以降の日本の宗教哲学との関係についても考えてみましょう。

授業内容

- 第1回 モジュール a のみ イン트로ダクション：宗教の言葉をどのように受けとるか
- 第2回 宗教と神話の関係について
- 第3回 神話を解釈するとは何を意味するか
- 第4回 理解と解釈の諸問題
- 第5回 実存哲学という選択
- 第6回 神話としての終末論
- 第7回 ブルトマンの終末解釈・その1：「世」と不信仰
- 第8回 ブルトマンの終末解釈・その2：啓示と信仰
- 第9回 ハイデガーの実存哲学・その1：「世界」概念と頹落
- 第10回 ハイデガーの実存哲学・その2：死への先駆と本来の実存
- 第11回 不信仰としての本来の実存
- 第12回 哲学的実存と信仰の実存
- 第13回 神学の言葉と哲学の言葉
- 第14回 宗教の言葉と日常の言葉：まとめ

履修上の注意

とくに予備知識は必要ありませんが、自ら能動的に考える姿勢を求めます。

講義中の私語など、講義の進行を妨げる行為については、厳しく対処します。

準備学習（予習・復習等）の内容

講義で言及した事柄について、そのつど文献等で調べることを。

教科書

用いません。

参考書

R. Bultmann, *Glauben und Verstehen I*, Tübingen [邦訳：『ブルトマン著作集11』, 新教出版社]

M. Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen [邦訳：『存在と時間』(上・下), 筑摩書房]

成績評価の方法

期末レポート（100%）

その他

特になし。

文化・思想研究		備 考	
科 目 名	日本思想研究 F		
開 講 期	秋学期	単 位	講 2
担 当 者	客員講師 博士（文学）	松本 直樹	

授業の概要・到達目標

ヨーロッパにおける20世紀初頭のキリスト教神学・同時期の実存哲学・日本の宗教哲学などの議論を手がかりに、宗教における特異な時間感覚（永遠・瞬間・回帰・終末など）について考えます。

そのような時間感覚を生きたことが、宗教的であることの、少なくとも一つの本質的な局面であることを理解することを目指します。また、その過程で、時間についての哲学的な諸議論のいくつかの形に触れることができます。

授業内容

- 第1回 モジュール a のみ イン트로ダクション：宗教における時間感覚——永遠・瞬間・回帰・終末
- 第2回 時間と生との関係について
- 第3回 終末論の歴史・その1：古代～中世
- 第4回 終末論の歴史・その2：近世以降
- 第5回 ブルトマンの終末解釈・再論
- 第6回 救済の時としての瞬間について
- 第7回 ハイデガーの終末解釈・その1：事実的な生とキリスト教
- 第8回 ハイデガーの終末解釈・その2：終末が到来する時について
- 第9回 ハイデガーの終末解釈・その3：終末に臨む諸態度について
- 第10回 終末はどのような経験に似ているか——死と覚醒について
- 第11回 ハイデガーの実存哲学・再論
- 第12回 実存の Endlichkeit について・その1：運動としての先駆
- 第13回 実存の Endlichkeit について・その2：圧縮された時間性について
- 第14回 終末論解釈の射程：まとめ + 近代日本の宗教哲学における時間感覚

履修上の注意

とくに予備知識は必要ありませんが、自ら能動的に考える姿勢を求めます。

講義中の私語など、講義の進行を妨げる行為については、厳しく対処します。

準備学習（予習・復習等）の内容

講義で言及した事柄について、そのつど文献等で調べることを。

教科書

用いません。

参考書

M. Heidegger, *Gesamtausgabe Bd. 60 (Phänomenologie des religiösen Lebens)*, Frankfurt am Main [邦訳はありません] その他、講義中に紹介します。

成績評価の方法

期末レポート（100%）

その他

特になし。